

解題

一 『難波鑑』は、『名所繪入』の四字を頭書にしてゐます。『蘆分船』と同じく一無軒道治の著で、やはり六冊本です。延寶八年庚申（我が二三四〇）の開板。原本は左右六寸二分、天地九寸。總丁數壹百〇五丁。内容は大坂及び大坂附近の社寺にて行はるゝ神事佛事并に市内に於ける年中行事を敘述したもので、古雅な挿圖が行文と相俟つて當時の浪速情趣を漂はせてゐます。

一 本叢書刊行會が、今次、本冊に此の書を収録するに際し、本會顧問新村出博士を煩はし、京都帝國大學圖書館受託の久原文庫本の貸出しを許され、それを底本とし、挿圖は一枚も省略せず、これを凸版にし、その製版に際し、十分の注意はしたのでございますが、挿圖の線が原本に比し稍太くなつたところのあるは、やむを得ません。偏に各位の御諒恕を希ふ次第です。

一 『蘆分船』に比べ、五年後れて開板された此の書は、所謂姉妹篇ともいふべきもので、趣きを異にした一種の名所記でもあり、また風俗誌とも見られます。殊に今回の底本に用ゐました久原文庫本は、蜀山大田南畝が愛藏した本で、每冊、長方形の 大田氏藏書 の印があり、方形の 南畝文庫 の印も捺されてゐます。そして卷六の末尾に、蜀山自筆の『難波鑑六卷於難波』

書肆收得時享和元年辛酉仲夏杏花園書于難波南本町客舎』との朱書がございます。享和元年と
(我が二四六一) いへば、その七月十一日に小澤蘆庵が京都に歿し、九月廿九日に本居宣長が伊勢
(西暦一八〇一) で故人となつた年で、當時、我が蜀山は銅坐の役人として浪速の客舎にゐたのでした。その蜀
山の手澤の存する此の『難波鑑』が、今次、本叢書の底本とならうとは、蜀山みづからも期待し
てゐなかつたでせう。

一 『難波鑑』も『蘆分船』と同じく六冊いづれも題簽の文字を異にしてゐます。前々々ページの『
なには鑑』の四字は、原本巻四の題簽の文字を用ゐたのであります。

難波のこゝろに蘆分船の
うきものより想ひしんと船の
船のうら枕夢れよ子橋のあやうき
とこりりくく位れはの岸よ
よら波よるくくや秘を踏く松れ戸小
行り月となとあゝ夢こゝろてお花
のうりりりよとくぬえは表ふく
咲やこの花と葉一葉も芦の枯

系は秋成しし田叢の碇れ雲乃
 かゝれ小神うららこふやの雲れ
 煤幕まろくはぼめくく神法若
 祭れ佛園れ浄法きたにわらを
 志のいへるや、啓長明の四季
 物候は準入むけまもも藤もたねや
 けしと六年中待事とらわられたり
 きんかひゆきしなるとして川遠ま

わらりたや井の沙わりさる中しく
 眼の余赤されは信書れ能かとなりて
 今らりしちるしけり末のやみ
 まくいなあくやとこち母はうけん
 けしとせららちるしなれ泉まはれ葉
 くらよあつらつあひなれ海まほし
 模障のまはけしるまなまに取に

三つ三つ内鑑と名づけぬ是志
 余りたるらるるに於ては
 梓小鶴め又字乃保八奇願良小
 徳り信る人等一紙入也
 三つ三つ

延寶八庚申春五月上旬

一軒 道治軒

難波鑑第一

目録

氷様 并 若水

正月と云事

門松 并 炭藁竹齒菜ゆづり葉筋繩の事

住吉明神御供 并 内侍所御供 附 住吉橋木

聖徳太子御精進供

餅鏡 居事

毬打玉 并 胡鬼板破魔弓はねつく事

屠蘇白散

道頓堀初芝居

住吉白馬神事 附 七草

大融寺富之祈 并 卯杖

神宮寺薬師講 附 富士が事

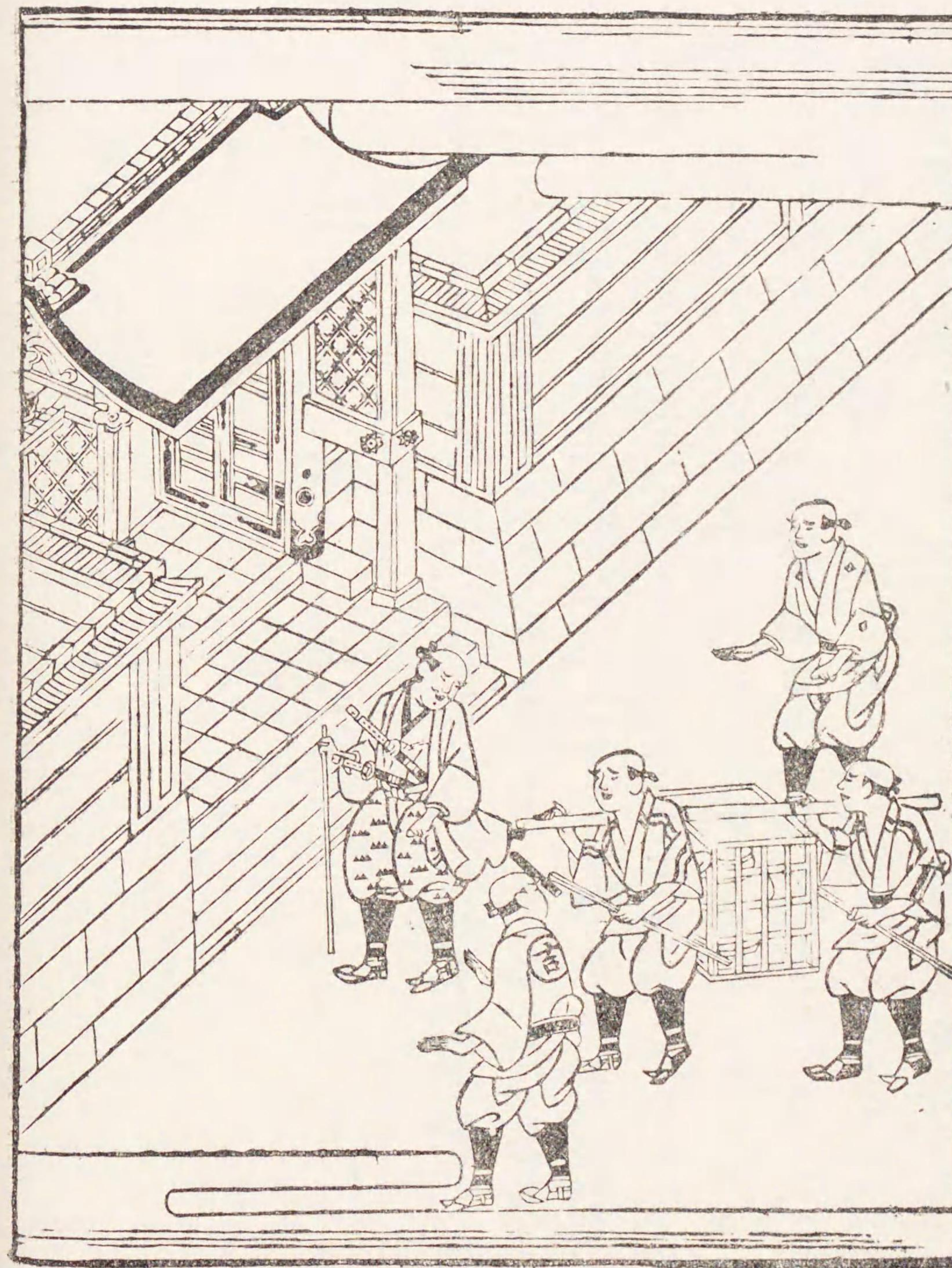
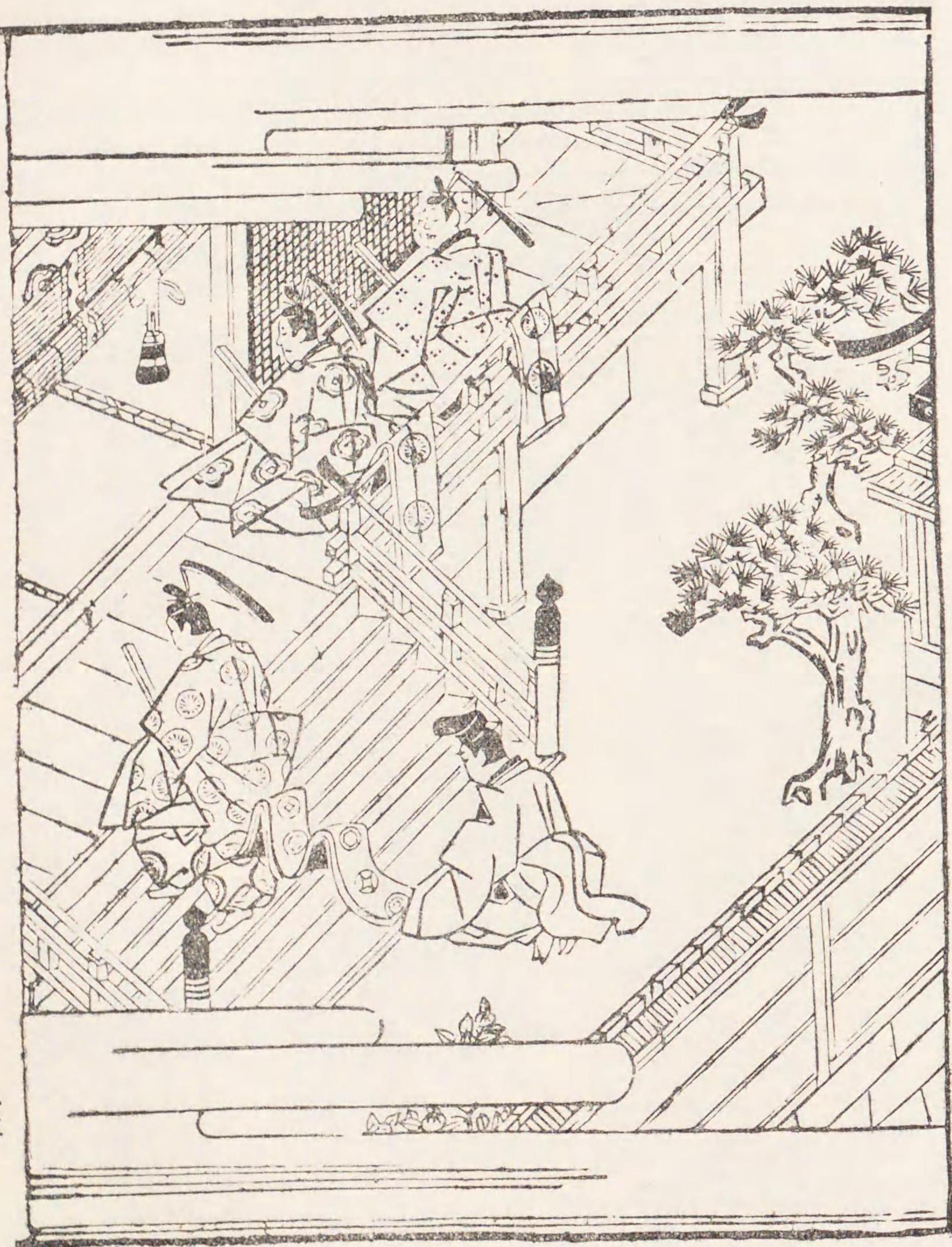
住吉御弓

東土場左義長 附 萬歳

難波鑑第一

氷様 正月朔日

○難波の帝の御時より。はじめてたてまれる也。仁徳天皇六十二年五月に。額田太中彦皇。鬪鷄といふ所に侍しに。出行て。山にのほり。野中を。見やり給ひしかば。庵をつくりたる様なる所あり。人をつかひし見せ給ふに。窟なりと申。其時彼山のあたりに侍る人をめして。とへせ給ふに。氷室なりと申。皇子の云其氷をは。いか様にしておさめたるにか。答て云。土を一丈餘ほりて。草を其上にふきて。茅葺などをあつく取まきて。凍を置たるに。氷で。いかなる大旱にも。とけず。是をとりて。熱月に。用るとなむ。其時皇子この氷を。仁徳帝へ奉らせ給ひければ。叡感ありしと也。是則氷を。奉りしはじめ也。其後季冬ごとに。納て。國々に。氷室を。置れしと也。今朝家にいたりて。氷様と申是也。則氷の御所とて大法祕法おこなはるゝとぞ。舊冬納まる氷のあつさ。薄さにて。豊年凶年を奏聞せし事と也。様ハこほりの寸法分際あるゆへならし是を凍らす池を。氷池とも



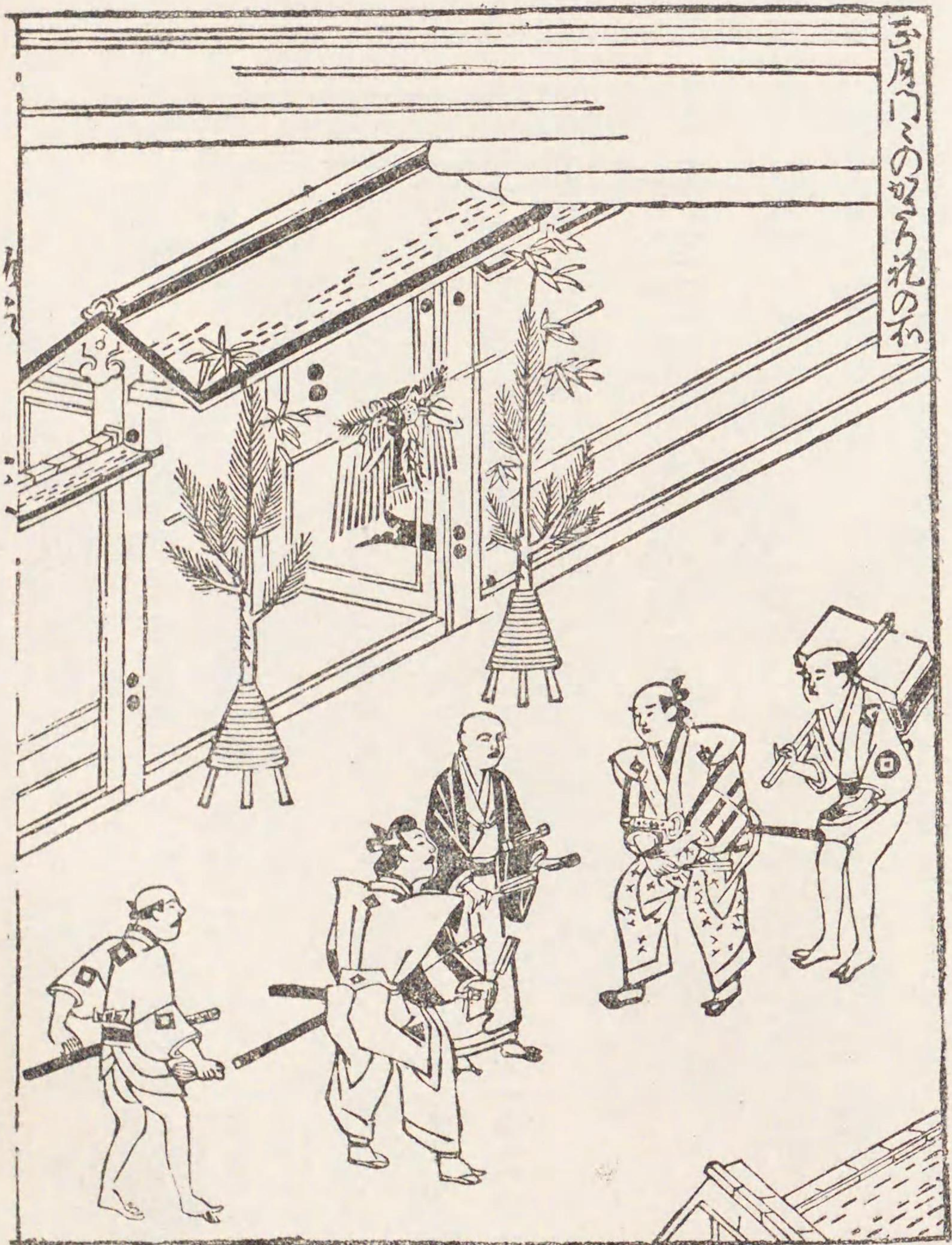
いへり。近比ちかきこに。石いしかいらのわれを。奉たてまつると也。延喜式えんぎしきにも。氷池ひやうたせ風神かぜがみの祭まつりと載のりたるも、此このことなりとぞ
年中行事ねんちゆうぎじ 合あ 今日けふそしるとしはきのふにくるすの、氷池ひやうたせの水みづのふかきめくみを 入道大納言にゅうだうだいなごん

附つけたり 若水わかみづ

○去年こぞ御生氣ごせいきのかたの井いをてんじ。ふたをして。其内そのうちくまず。立春りつしゅんの日ひむすびて。主水司内裏もんすいすいにたてまつれば。
朝餉あさかえにて。きこしめし給たまふとなり。年中ねんちゆうの邪氣じやきを除のぞくといふ本文いまじんかあり。今民家いまみんかに。元日げんじつのものとはばかり。こゝろ
うるいあやまれり。春はるのはじめにくめば。若水わかみづとい。申まをにや

正月しょうげつご云事いふこと

○夫それとしの初月まよげつを。正月しょうげつといふ。秦あしの始皇しきわうの月に誕生たんじやうあり。されば。降誕かうたんの月つきなるによりて。專政せんせいをおこ
なる、ゆへに。政月せいげつといひしを。始皇しきわうの諱政いみなつりこなるゆへに。後改のちあらためて。旁つくりはだを省はぶて。偏へんばかりを用もちい。是これひとへ
に。天下あめまたを正たしくなすべきなりとて。正月しょうげつとせり。今の正月しょうげつは。震旦しんたんの法ほうにて。とらの月つきをもちゆ夏の世よの例れいなり。
殷いんの代よの月建げつけん。丑うしの月つき。今の十二月じふにがつにあたる。周しゅうの代よの月建げつけん。子しの月つき。今の十一月じふいちがつ也。冬至とうじを。唐たうの正月しょうげつと
いふ。このゆへなるへし



門

松 并 炭藁竹齒朶ゆづりは飭繩の事

○むかし素戔嗚尊。南海へ。かよひ給ひし時。宿を。巨旦將來に。かり給ひしに。かし奉らず。蘇民將來宿をかしたてまつる。其後尊いかりて。巨旦をころし。其家をほろほさる。是を後の世までの。まるしにせんとて。巨旦が墓の上に。生たる松を。年の始に。門に立ると也

門松をいとなみたつる其ほとや春あけかたに夜やなりぬらむ

また炭わらを。かざるへ。巨旦を火葬の心。是悪をこらし。善をすゝむる義也。かざり竹へ。すなをなる。君子の徳に。ながきよひをことぶけり。齒朶ゆづり葉へ。雪霜にもなやまされず。色をも。かへぬめでたきもの也。かざり繩へ。不淨を経だて。正月の神をまつる義なるへし

住吉明神御供 并 内侍所御供 同朔日

○神主大晦日より。神館殿に。参籠して。元日卯の刻に。一の神殿へ。出仕して。御精進供を獻す。むかしへ。攝津國司より。奉幣ありて。饗應あり。毎月一日にも。供せらるゝと也。則一の神殿へ。底筒男命にて。天照太神宮にて。わたらせ給ふと也。是則内侍所の御供になぞらふるか。抑内侍所とへ。三種の神器のその一なり。



住吉の神あはすそのつと

天照太神あまの岩戸を。さし籠給ふ時。鑄うつさせたまふける。日神の御かたちの鏡となり。是を八咫の鏡となづく。むかし神鏡とび出て。天にあがらんとし給ひしを。女官の衣の袖に。かけ奉りて。とめけるよりして。今に。此内侍所へ。女官の守護し奉れると也。御供へ。寛平年中にはじまる。萬治四年正月十五日禁裏炎上の時ことゆへなく。白河に移奉れり。あはらく此所に。皇居をまふけさせ給ふて。遷幸近衛殿に。かり殿をあらためられ。同二月十八日渡御

附橘木之事

○むかし。神功皇后三韓を。うちまたかへ給ひしより。後本朝に。歸伏して。三國同心して。八十餘艘の船に。數のたからをつミ。我朝に。到來せしに。橘は。是いはるの物なればとて。第一の船の。上積にして。奉りけると也是によりて。社内に。植をかしむるとかや。かゝるめてたき物なれば。正月の蓬菜の組物にも。橘をかざるも。ゆへあることによ

我國にはなたち花のいろみればこかねの鈴をならすなりけり 顯 仲

聖徳太子御精進供

同朔日



○正月一日より。同十一日まで。毎日御精進供を獻す。其職掌嚴重也。また元日に。御寶庫をひらき。靈寶を。人におがましむるを。恒例とせり。されば。太子ハ。用明帝の皇子推古女帝の儲君也。御母ハ。間人皇后御誕生ハ。欽明天皇三十三年正月一日。御厩戸の前にて。御誕生也。さるによりて。厩屋の王子とハ申き

餅鏡居事

○齒固といひて。餅かゞミをむかふことハ。人ハ齒を以て。命とするがゆへに。はといふ文字をは。よはひともよむ也。齒固ハ。齡をかたむる心也。餅ハ近江の國火切の餅を用べき事也。餅鏡にむかふ時。誦する歌あり

古今集 あふみのやか、みの山をたてたれハかねてそ見ゆる君かちとせは

此うたハ。延喜の御門の御時近江國より。大嘗會の御べたてまつりし時。大伴の黒主がよめる也。また餅ハ。蚩尤が肉と。名づけて。くふと云説もあり

毬打玉并胡鬼板破魔弓はねつく事

○むかし唐に。黃帝と申みかど。炎帝といふ。子孫をほろほして。位につき給へり。炎帝の臣に。蚩尤といひて。惡人あり。涿鹿といふ所にて。黃帝の爲に。うたれしゆへに。其惡靈疫病といふ神になりて。國土の人民



をほろほせり。是によつて。末の代に。疫病をおそれしめむ爲に。蚩尤が。身分を。つだくに。わかちて。ひとつものこさじの。はかりことに。正月に。彼眼の中の。ひとみをぬきて。毬打の玉にして。うつことにせり。彼眼のふくりん三重にありしゆへに。弓いる時の的に。三重に。繪をかきて。中のひとみをバ。のぞきたり。はねをつくり。そのかみのた、かひに。悪鬼の矢をはらふて。太平ならしむる。はねハ。其矢のかたちをかたどり。ふせくものを。胡鬼板といひ。はこ板ともいふ也。破魔弓も。悪魔をやぶり。ちりぞかす心也。なをまた。千町や萬町の鳥追けさう文などいふもの。本説たしかならず

屠蘇白散

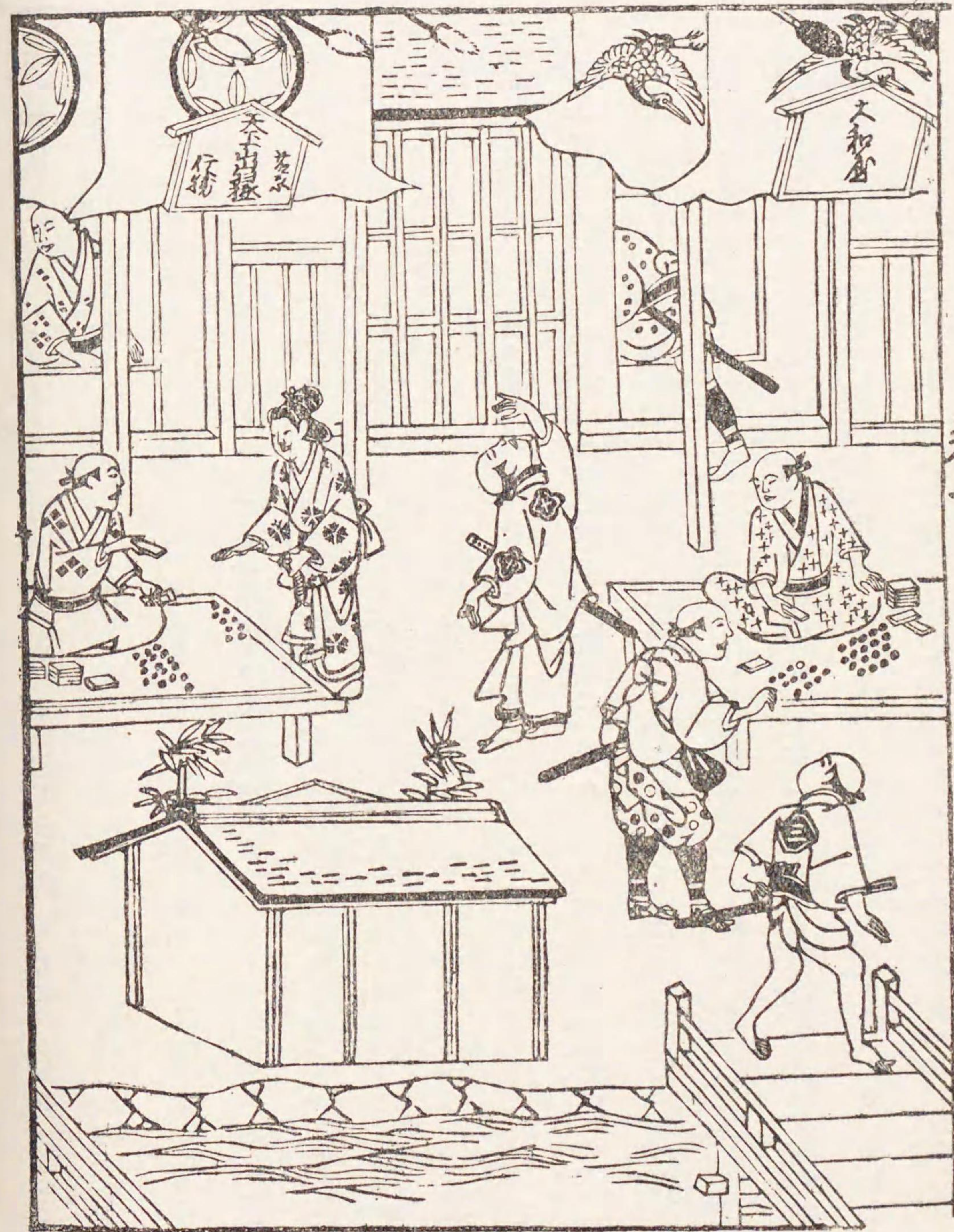
○五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁年中に。はじめ給ふ。此薬ハ。一人是をのめバ。一家無病。一家是をのめバ。一里無病。自少飲之。至老無病云云此薬を。きこしめさるゝに。未嫁稚童女に。なめそめさせ。さて酒にいれ。清涼殿にて。主上へたてまつると也。よいて。此少女を薬子と云

としことにけふなめそむるくすり子ハわかえつゝ。見むきみかためとか

新大納言爲秀

道頓堀初芝居

○初芝居といふよりも。其名めづらしく。心もうき立物ハ。道頓堀江の川波。うちはやす。太鼓のをと唐土ハ。あらず。日本橋のはしの上。老若男女。きせると。火繩に。辨當提重箱のうへに。毛氈繪むしろを。からみつけさせ。とちや遅しと。はせ来る粧ハ。雲のごとく。霞に似たり。抑役者の名ハ。ちらねども。としのうちの。貞ミせの比より。そんじやうそれと。かたりつとふるを。きくよりも。なつかしく。鼠戸のあたりに。徘徊して。こゝに来る。人々のなりふり。品かたちの。異様なる。有さまを見るに。わがふれる人多く。こなたよりハ。それとおもへど。予が。すがたを。見付られじと。志のぶの山の山守も。人めのあみの志けきにもれ。更に。とがむる人もなし。た、芝居の見もの見むよりハ。まされる物をと。おもへど。物の音に。心うつり。はやくも内に。入らんことをおもふ。されバ樂器をとれば。音をたてんことをといへるも。餘所ならず。内に入侍りて。こゝらの人に。案内してゐけるに。いまだ狂言もはじまらず。其中に。人々とありかゝりと。四方山のとハすがたりを。なしけるか。側なる人のいひけるをきけハ。此所を。道頓堀といふハ。人みな此地に來りて。歌舞喜若衆の遊興に。入事の頓きがゆへに。かく名づけ侍ると也。其むかし。若衆歌舞喜のありし時ハ。僧俗に。よらず貴となく。賤となく。價を以なさけを。かけしゆへ。錢あれハ。此市に。立むこと易しと。御寺法師は。布施のつゝ。みがねをハ。花代とさ、け。町の一番子ハ。親の讓の巾着のかねごとに。そひねの床の。袖枕口より。かねを。すひとられ。あるひハ。家財をうしなひ。あるひハ。所を立ざりて。身をほろほす人多し。是ミな。此道の長じぬる媒



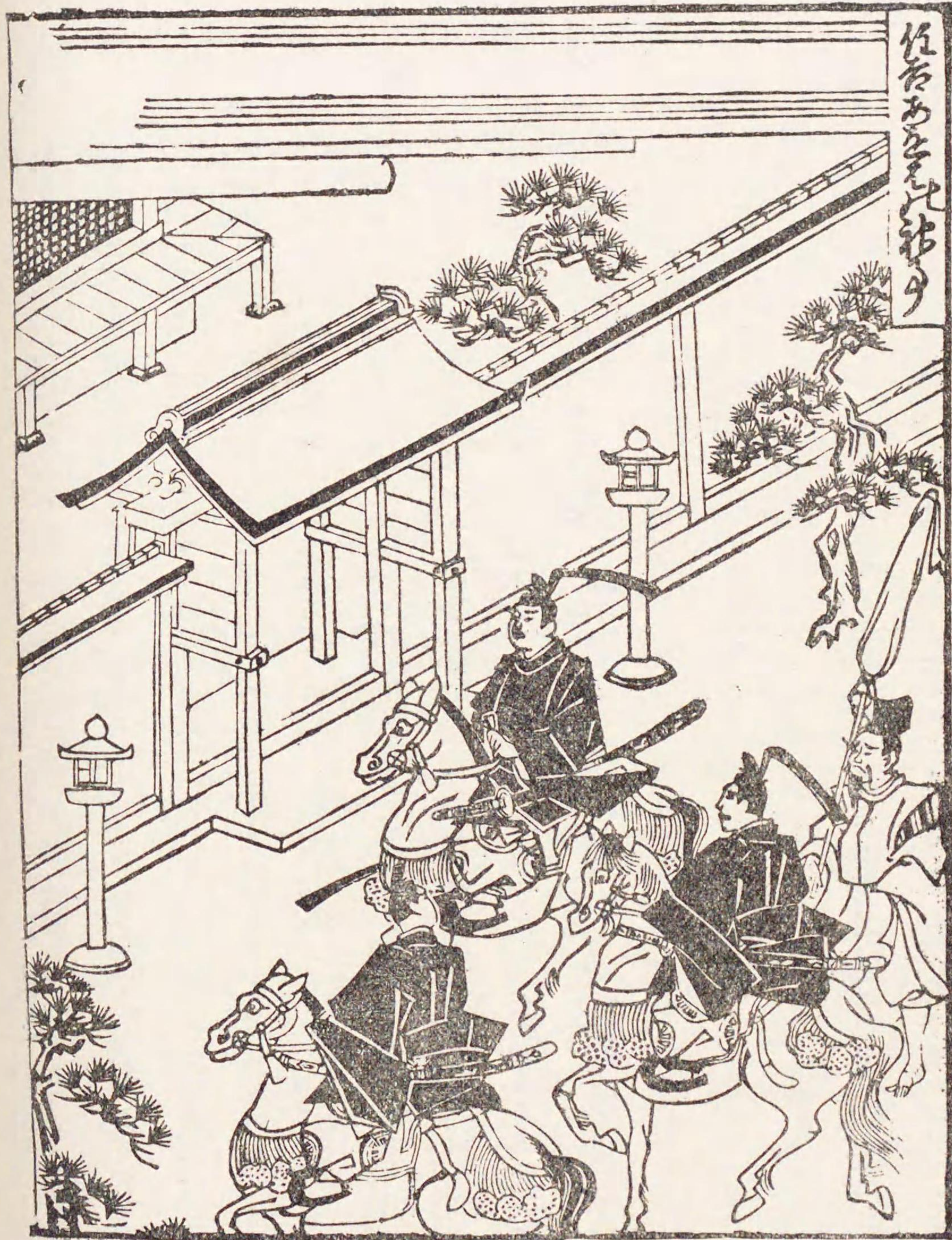
なれば。天に口なし。人を以いはせよと。誰か披露へ。なけれども。去じ承應元年初秋の比。かぶき若衆の額髪をとらせ。こと／＼く。野老となし旅芝居を。かける子ともまで。さがし出させ給へ。普天の下いづくにか。かゞまり。すむべきにあらねば。をのが生縁に立かへり。えもいはれぬことわざのみにて。落穂ひろふありさま。見るめいと堪がたし。志かしより。此道すこしことさめてけり。志かれども。芝居のことへ。と、めさせ給へねば。そのうち。能狂言と。品をかへ。右近左近が海道くだりを。舞しより。人また二人静のまひぶりも。かくやと。もてはやして。羣集しぬと。かたるがうちに。はじめよ。／＼と。の、しれバ。追つけはじめぬ。さてはしか、りのかたを。見やれば。としのよひひ。二八ばかりの粧にて。なよく／＼と。楊柳のはるかぜに。またがふ風情にて。出ると。いなや。是々おでやつた。あつた物でいなひ。妙音菩薩の御來迎かとほむれい。こなたにむかひ。袖うちか、けて。めくばせして。一たびゑめるかほばせは。さながら季花の一枝春雨に。ほころぶるかとおもひる。また二九ばかりにも。あまりたると見えしが。つゞひて出ければ。洞庭の秋の月は々と。ほむるもおかし。ふくるもよしといふことにや。其外色をあらそひ。品をわかち。いづれも。おとらぬ中に。霜葉へ。二月の花よりも。くれなるなりと。いはまほしきもあれど。其名をいはず。凡人間百に。ミたす常に。千歳のうれひをいなく。世の中に。何ぞ男色にめで。遊興を催し侍らんや。されども。狂言の其品々を見るに。されめきたること共にて。おさなき事ども多し。いにしへに。佛神の本縁をも。とりまじへ。うたひまひければ人もお

もしろがり。あはれがりしに。いつしか今やうい。むかしにをとり。きのふ大坂のうちに。ありしことを。けふははや。とりくミ。戀慕密通せしことを。狂言にして。其人の名をさして。それといひければ。人また是をおもしろがりぬ。されハ。大坂のうちハ。云に及ばす。國々遠き縣までも。聞つたへ。其親に。恥をあたへけること。いかばかりの歎ならずや。かくつたなきことを。よしとおもひて。人のおやの娘なと引つれきたりて。物見し侍ること心得られず。けふは人の上。あすのわれらが身をあらで。うか／＼と役者に。はかられる。あさましさよと。ふとおもひ出るより。いざ／＼立むとしけるを。傍なる人のまたしめよと。ひざをおさへて。尤と感じつゝ。仰のごとくさにてい。物じて。娘なと持たる人の心つかひあるべきハ。此見物なり。其人にハ。よるべけれども。戀慕の手だてを見るよりも。心なきも。こころをつけ。我もまたしやせまし。志のびても。見まほし。情もかけてもやと。色のなきも。をのづから。色をつくるハ。此見物ならんと。答して。立わかれぬ。いとおかしかりけり

住吉白馬神事

同七日

○今日一の神殿へ御精進供を備へ奉る。神前にをいて。白馬の神事とて。神馬の乗初あり。此時神主一族禰宜社僧俗人以下にいたるまで出仕しけると也。抑白馬の節會といふこと。大内にをいて。今日おこなひる。此節



會をかたどれるにや。是ハ天武天皇十年より。はじめれり。馬ハ陽の獸なり。青は、春也。是によりて。正月七日に。青馬をみれば。年中の邪氣を除くといふ本文侍る也。されハ。主上紫宸殿に。出御おはしまして。白馬を御覽ある也。夜に入ての事也。此時の出御をりから。地下人も玉體を拜ミたまつる。されども。法頂ハ。今日まで、御門に入事停止。節會の義式さまくありといへども。本より。下さまのもの。あることにあらねば。あらハすへき節もなし。僻耳に。き、なし侍るは。内辨のミこゑにて。いしハ。まかりよんぬるか。のたまへば。いし着座といらへ。又開門なといへる事有。今のわらバへの春駒といふハ。是よりはじまり侍るにや。こよひある節會に馬を引ぬればひらくといふや四つ足の門

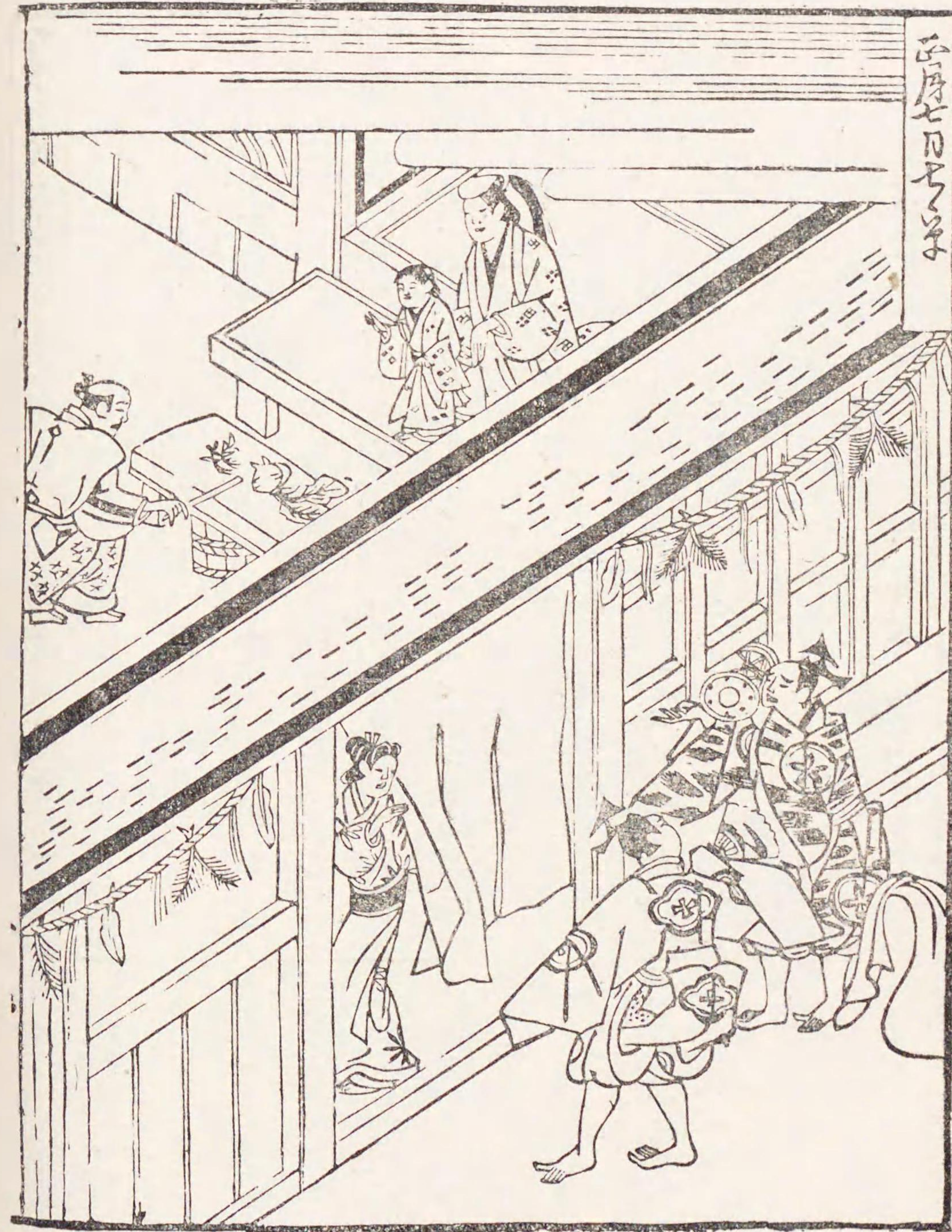
附七草之事

○七草の若菜を羹にして。食するとハ。人に三魂七魄といふ神あり。天に七曜と現じ地に七草となる。是をとりて。服すれば。我魂魄の氣力をまし。命を延るなり。大宋文王の時より。始る事也。七草といふハ。せりなつな五行たひらこ佛の座す、なミ、なしこれを七くご

大融寺富之祈 并卯杖 同七日



大仰ちんちんつてり



正房七日子

○正月一日より。七日まで。修正の法會辨財天女。牛玉寶印降富の執行あり。是へ。天下太平國土安穩風雨順時五穀成就萬民豐饒の御祈禱と也。抑降富の符札へ。其數所々不同なり。當寺にへ。七番の富有。七難即滅。七福即生の標主なりとぞ。凡牛玉寶印とへ。諸の惡魔をはらひ。諸の福德を集む。辨財天女の内證を顯す謂也。此こと。いつはじまりたりといふことたしかならず。今日當國にも。所々に有。いづれか。前後なることを知らず。爰のミにもあらず。諸寺。諸山にをいて。正月にへ。修正ありて。福杖といふものを。物し給ふことあり。是ミな。此等の類に。ひとしきか。けふまた。大内にをいても。卯杖と申こと侍りき。是は。持統天皇三年正月の卯日。大學寮より。是を奉るよし。日本記に見へたり。ある人のいへるへ。卯杖と申へ。若菜を備へける時。つく杖をいふと也。此卯杖へ。卯のかたへ。向ひたる。椿のえだ。柳のえだ松の枝。此三のえだを。いづれも。三尺五寸つゝにきりて。けづり五色の絲にて。十二所ゆひ付て。若菜を君に備へ奉ると也。是を卯杖といふと也。猶尋へし

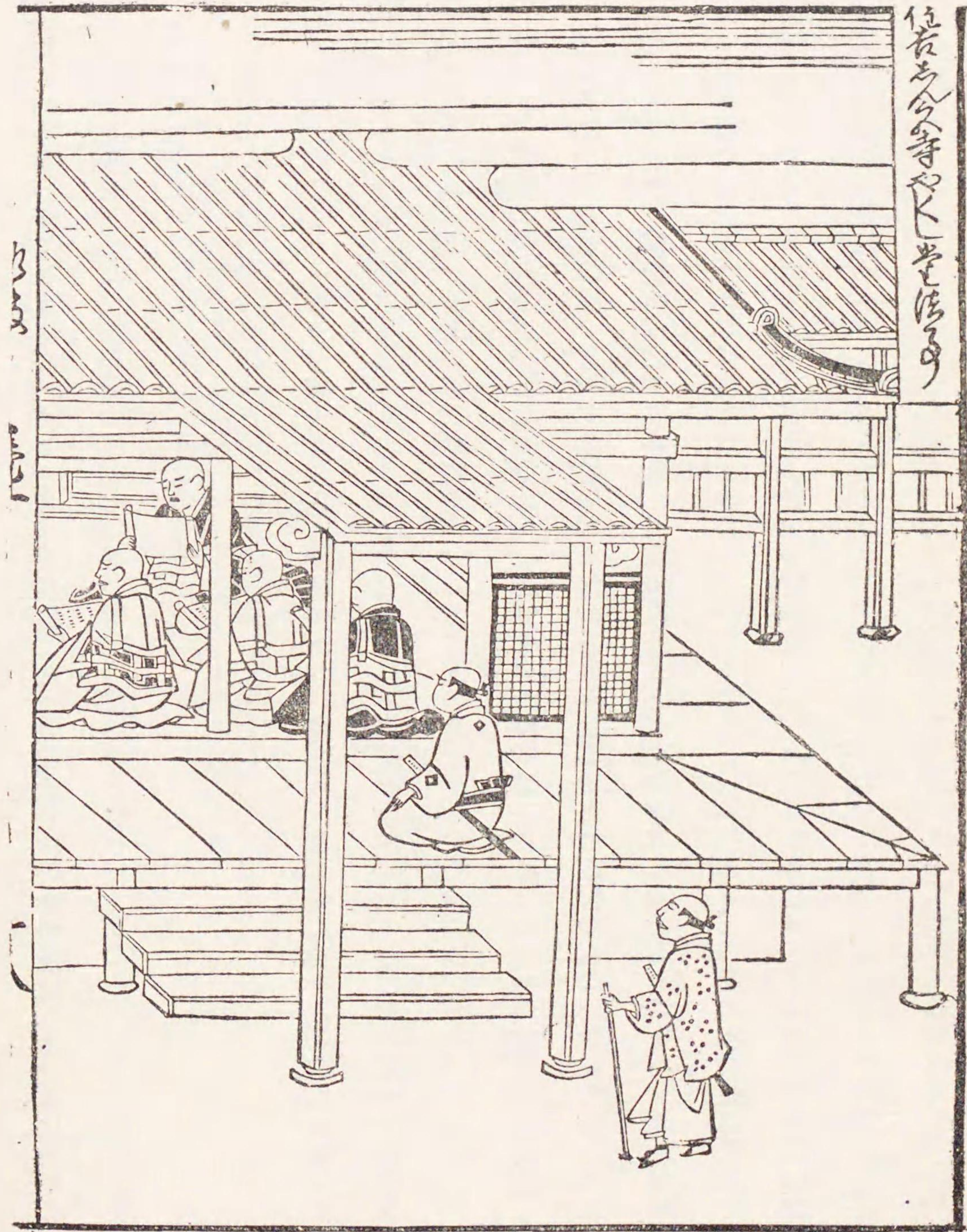
神宮寺薬師講 附富士か事 同八日

○正月八日薬師講筵義ありて。法花轉讀の後いにしへへ。管絃ありと也。むかしへ。住吉にも地給の樂人ありて。管絃の役を。つとめしと也。往古萩原院の御時大内に。七日の管絃ありしに。津の國天王寺に。淺間といふ。樂

人あり。ならびなき。太鼓の上手にてありしゆへ。禁裏にめされ。太鼓の役をつとめし也。其比當所に。富士といふ樂人あり。是もおとらぬ太鼓の上手なりしゆへ。管絃の役をつとめむと。おなしく京にのほりしが。帝叡聞ましうて。富士淺間いづれも。おもしろき名なりうたに

信濃なる淺間か嶽ももゆるといへる富士の煙のかひやなからむ

此ころなれば。名こそうへなき。富士なりとも。あつられ。淺間へ。まさらん物をと勅掟ありしによりて。その、ちへ。富士が名をよひ出すものも。なかりき。志かるに。淺間いか、やおもひけむ。富士を。あやまつて。うちぬ。此こと妻子へ。夢たにちらす。只富士がかへることのおそきを。待かね。京へ尋のほりしに。富士へ。淺間にうたれぬる形見の色品とりいだし。これ見よとさしいます。妻子きくよりはや。宮古にのほりし。夜の間のゆめ。こころにかゝる月の雨。身をしる袖のなみだかと。あかしかねたる折からに。かゝるものうき。かた見とや。さしも名たかき。富士へなど。けふりとへなりぬらんと。いひかなしめるありさまへ。よ所のたもともぬれぬべし。妻へ娘にむかひ。あれに妻のかたきあり。いさうたんといふ娘き。て。あれへ太鼓にてこそあれ。おもひのあまりに。こころみだれ。すぢなきことをの給ふ物かな。あらあさましやといへば。あかてわかれし。我妻のうせにしことも。太鼓ゆへ。たゝうらめしきへ。太鼓なり。妻のかたきよ。うたんといへば。實ことへり也。ちゝにわかれしことも。太鼓ゆへなれば。さあらばおやのかたき。うちて。うらみをはらさむと。持たるば



位若夫の寺の下堂を伝ふ

ちを剣とし。ひたすら噴毒を。はらしけるとなり。いとあはれならずや其富士か舊跡ハ今にありとそ

今宮恵比須祭

同十日

○西宮を勸請しけるゆへに。當日を。まつりとす。殊あき人の家にとしの始に。若恵比須といひて。とりわきいはる奉れハ。けふの参詣大かたならず。また市に。えびすを。まつることハ。聖徳太子の願によりて。商をまもらせ給ふゆへと也

帳綴祝

同十一日

○けふハ。吉書とて。商人の家に。帳をとぢ上書をしていはふ日也。あかれども近曾より。大坂の内所々に。帳を綴上書をして。うりかふ事になれり。則帳をあきなふ家ハ。門に。竹をたて。幕なとはりて。うりてのさいはひ。かふてのよろこびなど。祝しけるとそ。禁裏にも。吉書の奏と。申こと侍りき

住吉御弓

同十三日

○今日晝過より。神主一族禰宜出仕して。南の拜殿にをいて。饗膳しをはりて。其後の場にさがりて。二人つゝ。



かはりくに。弓をいる。其義式委細也。むかしハ。大社御狩の神事とて。神子男の形となりて。弓箭を持て。狩場を。出る體の義式ありと。舊記に見へたり。是等のこと。今ハ中絶せるか尋べし

東土場左義長 大阪町中ニも有 同十四日

○東土場ハ、今の大手の上ニあり。むかし大閤御所の御時。此所にて。左義長ありしゆへに。かくいふと也。抑左義長のおこりハ。漢の明帝の時はじめて。天竺より。佛法わたる。五獄の道士是を破らんと祈るにより。其志るしを見むと。佛經をひたりに置。道士の書を。右にきて。火をかくるに。道士の書。焼失す。されバ。左の義長ぜりとありて。左義長といへり。また。西域義長や。東土やと。はやすハ。西域佛法の義まさりて。東土へ。流布すと。いふことなりともいへり。又神異經に云西方の山中に有人長一尺餘人見之則病寒熱名曰山臊以竹燒火爆爇有聲則驚去不來云々此を以て。正月に。燒爆竹説々おほし

附 萬歳

○今千壽萬歳とて。門々を。うたひありくものあり。是ハ。踏哥のかたちをあらハし。萬歳樂とうたひ侍る其濫解を尋ぬるに。今日年始の祝詞を作りて。うたひまふ。節會を。男踏哥といふ。則あらればしりともいふ也。



是則源氏物語にも。このことあり。高巾子綿の花をつくること。このとのかさしのわたなどよめり。天武天皇より。はしまる。節會にや。聖武天皇天平の比へ。踏哥の義はて。祿をたまふに。仁義禮智信の五つの題をさぐらふめて。絹布綿などそれ々の題に。よりて。たまはりし事有つる也とそ

住吉粥之御供

同十五日

〇一の神殿へ。今日粥之御供を獻す。されば。今日禁裏にも。御粥を獻する也。其來由を尋ぬるにむかし虫尤といふ。悪人を。黄帝と申御門正月十五日に。ころされたり。そのうち。天狗となり。其身は。地靈となる。是よりして。けふ亥の時小豆の粥を煮て。天狗をまつり。是を食すれば。年中の邪氣を除くとなり。其外の異説もあり。尋へし

難波鑑第二

目録

住吉甘菜御供

新御靈御弓 并射禮

新清水觀音供

并仁壽殿觀音供

法然御忌

廿日團子

北野石不動參

天王寺涅槃會

聖德太子聖靈會

天王寺彼岸詣

瓢箪町夜見世

節日草餅

并曲水宴附 鶏合

住吉浦鹽干

住吉大乘會

善導忌

難波鑑 第二

住吉甘菜御供

正月十六日

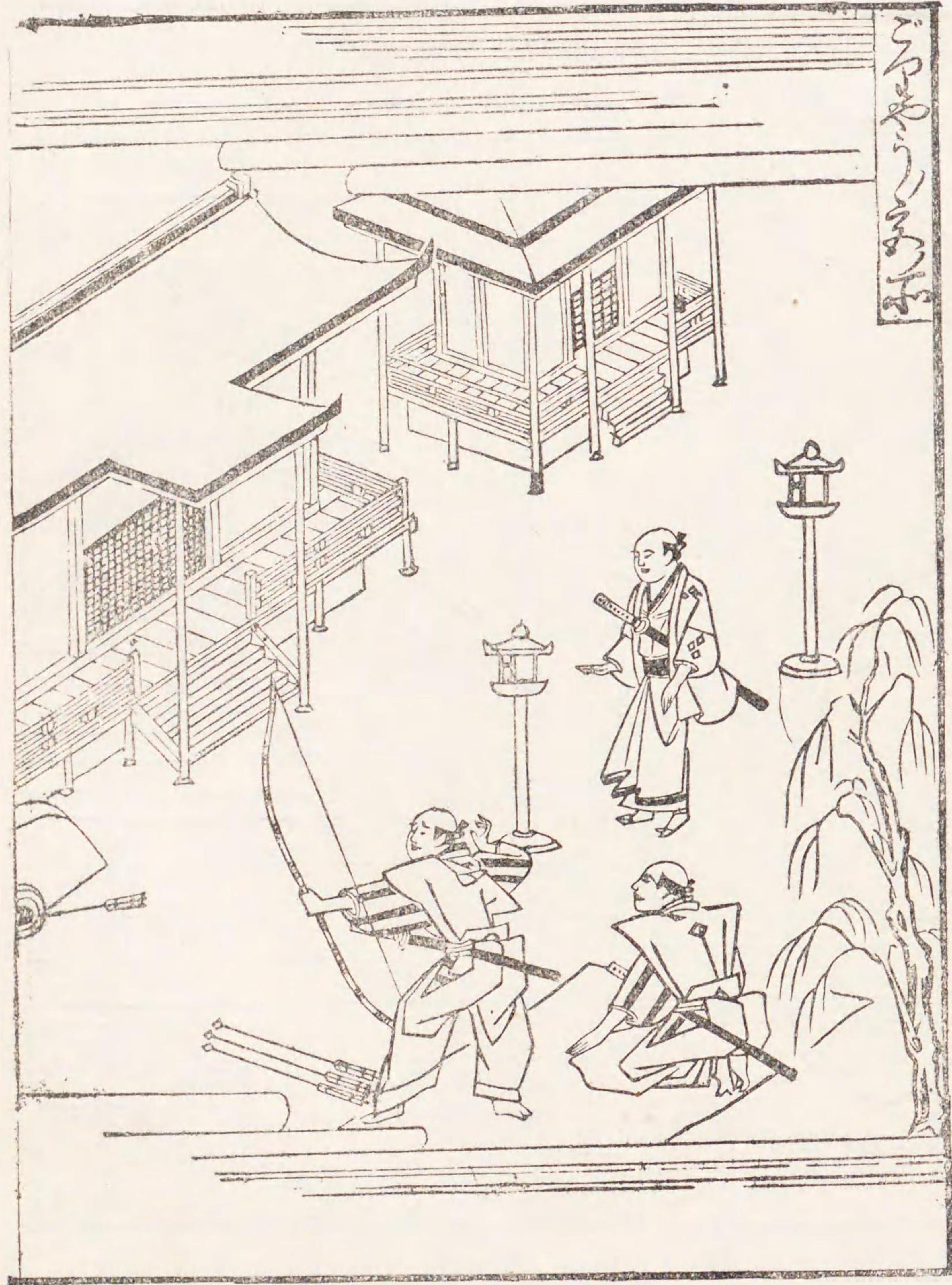
○住吉四所明神へ。今日たてまつるを、あまなの御供と申たてまつる也。一の神殿へ。御精進供也。そのほかの。三じや神へ。魚釜也。尤鯉鮒蛭等。海草のたぐひ多し。魚御供の御神詠に

伊豫の國うへの浦半の魚までもわれこそ行くへつミすくふとて

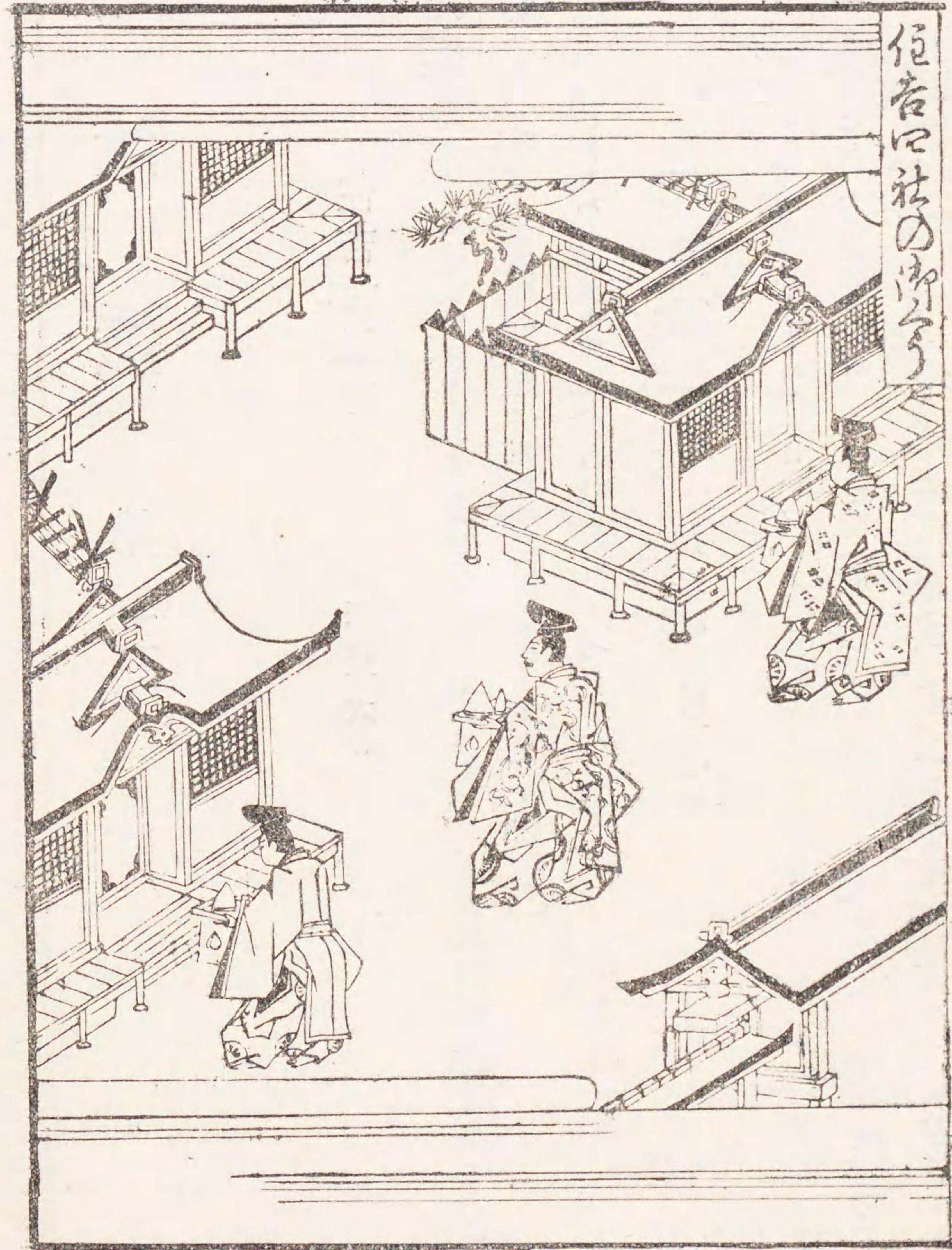
住吉明神

新御靈御弓 并射禮 同十七日

○當社へ。津村のうち神也。むかし。今日いろくのねりものに。つくり物を。いだといへども。いつのころよりか。此ことも。おこたり。今。わづかに。社内にをいて。的をたて。弓をいる。人これを。御弓となづく。是則。御靈宮の。門のうちに。茶屋あり。此あるじ是をつとむ。今日禁裏建禮門院にをいて。おこなはる。



とらきりしあふ



伝吉田社の御子



射禮を。準するならし

新清水観音供

并仁壽殿観音供

同十八日

○今日當寺に法事等有。是ハ國土安全。當所靜謐の祈願也。是則禁裏仁壽殿の観音供に。準するか。此観音供ハ。應和年中。観音の像二體を。仁壽殿に。安置せらる。寛空僧正開眼供養あり。天子の御祈のために。加持ある事也とぞ。當所にも。近曾より。三十三番の札所ありて。人々巡禮することにはなれり。ふかれども。此観音ハ。わきてはやらせ給ひ。けふハ殊更。參詣の羣集袖をつらね。下寺町の道筋ハ。人はふばりて。跡へも。さきへも。ゆかれぬほと多く。長町より。野道を出る人限なく。舞臺の上へ。みぬ人おほく。西海を。遠見して。たすみけり

法然御忌

同十九日

○けふより。廿五日まで。源空上人。御遷化の御忌。とりおこなはる。寺々。先智恩院の末寺。八十六ヶ寺淨花院が廿一ヶ寺黒谷光明院派十九ヶ寺に。をよべり。其寺々に。男女老少參詣の羣集聲をはかりに。念佛すること。十萬億土の西方極樂へも。手にとるやうに。きこゆらんと。いとたうとし

團

子

廿日

○今日ハ。武家に。具足の餅ひらきいはふ日にて。だんごを。あづきにて。煮たるを。俗に甘日團子と名づく。具足もたぬ。中間足輕ばらも。けふハ。いはふ事にて。餅の代に。だんごハすることなりといふ。土民の家に。すること。おもへるハ。いぶかし

北野石不動參

廿八日

○此尊ハ。弘法大師の御作にて。靈驗あらた也。當日錦帳をか、け諸人に。拜見せしむ。むかしより尼の住持せし寺也

天王寺涅槃會

同十五日

○當日ハ。天王寺の堂塔ミなひらけて。諸方の參詣袖をつらねて。羣集す。御葬禮の次第ハ。先聖德太子堂より。御輿を。ふりいだして。さきにハ。梅のすひひを持たる人。其つゞきには。獅子がしら。花笠の兒數十人。はた。面。其ほか異類。異形の出立して。管絃を。奏し。仁王門の前に出給ふ。また尺迦堂より。御輿を。ふりいだす。

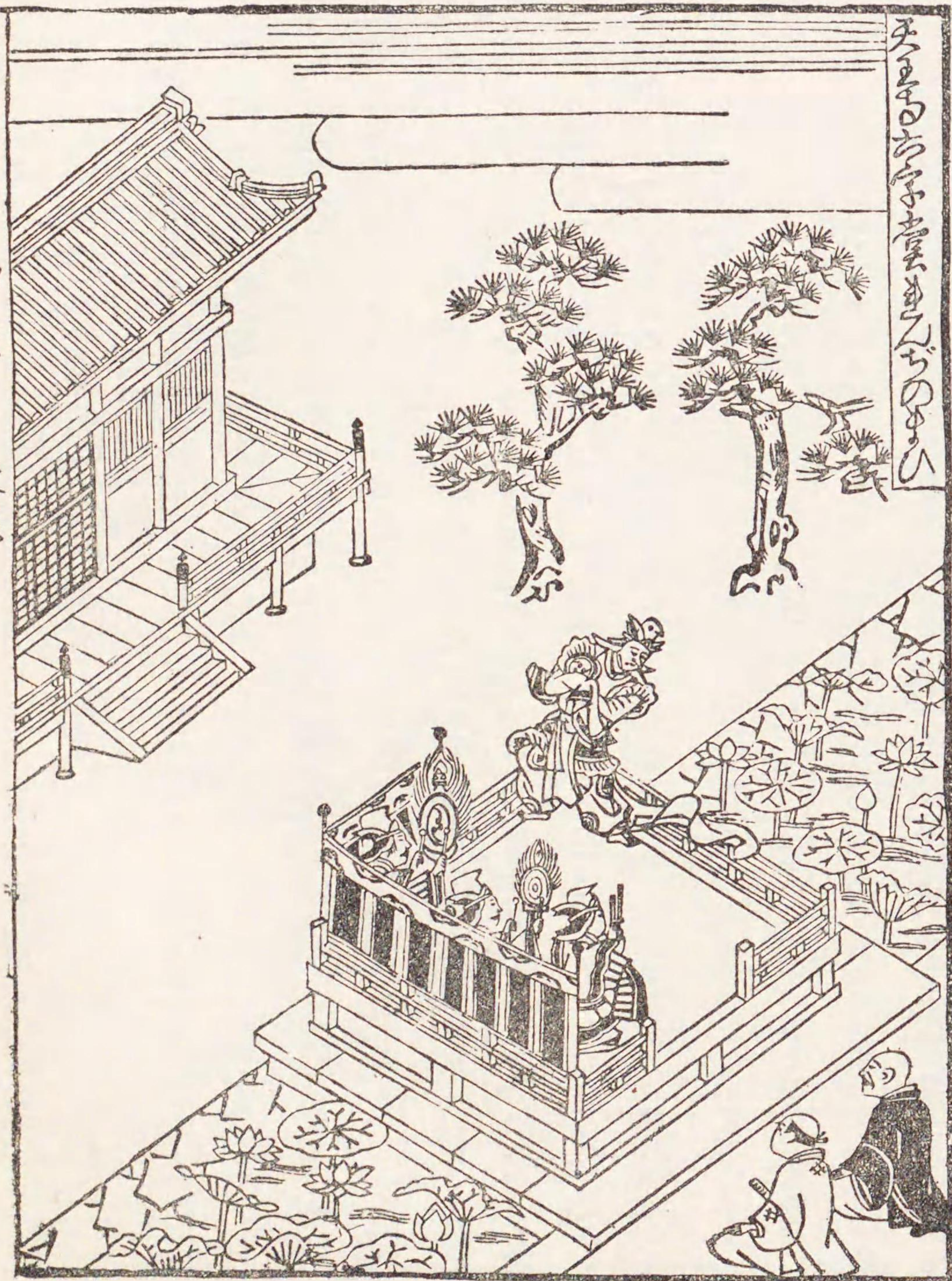


行列太子の御輿におなじく。是も。仁王門の前に出給へり。兩輿立むかひ給ふ時。兩方より。梅のすゝひ持たる人。のつとをあけ。それより。太子の御輿へ。廻廊の外を。にしへねりて。六時堂へ。いらせ給へは。尺迦の御輿へ廻廊の外をひかしへねりて。是も。六時堂へいらせ給ふと。俗人の舞はじまる。まことに天王寺の舞樂のミ都に恥すといへるも。實さる事ぞかし。抑此舞のはじめは。神代佛在世のはじめ。月氏。震旦。日域に傳へり。狂言綺語をもつて。作佛輪法輪の因縁を。まもる。まえんをありぞけ。福をまねき。此舞を。奏し給へり。國ゆたかに。民あづかに。壽命長遠也と。秦の川勝につたへ。六十六番の舞を。つくりて。まゝしめ給ふより。于今其遺法によれるとかや。此日堂上がたには。涅槃の賭とて。尊影の前に。絹布あるひ。墨筆なにて。も。それくくに。かけをして。晩に。賭を。たがひにとりかふことありとそ。今日諸方の寺々にも。涅槃像を。かけて諸人に。おがましむる也

聖徳太子聖靈會

同廿二日

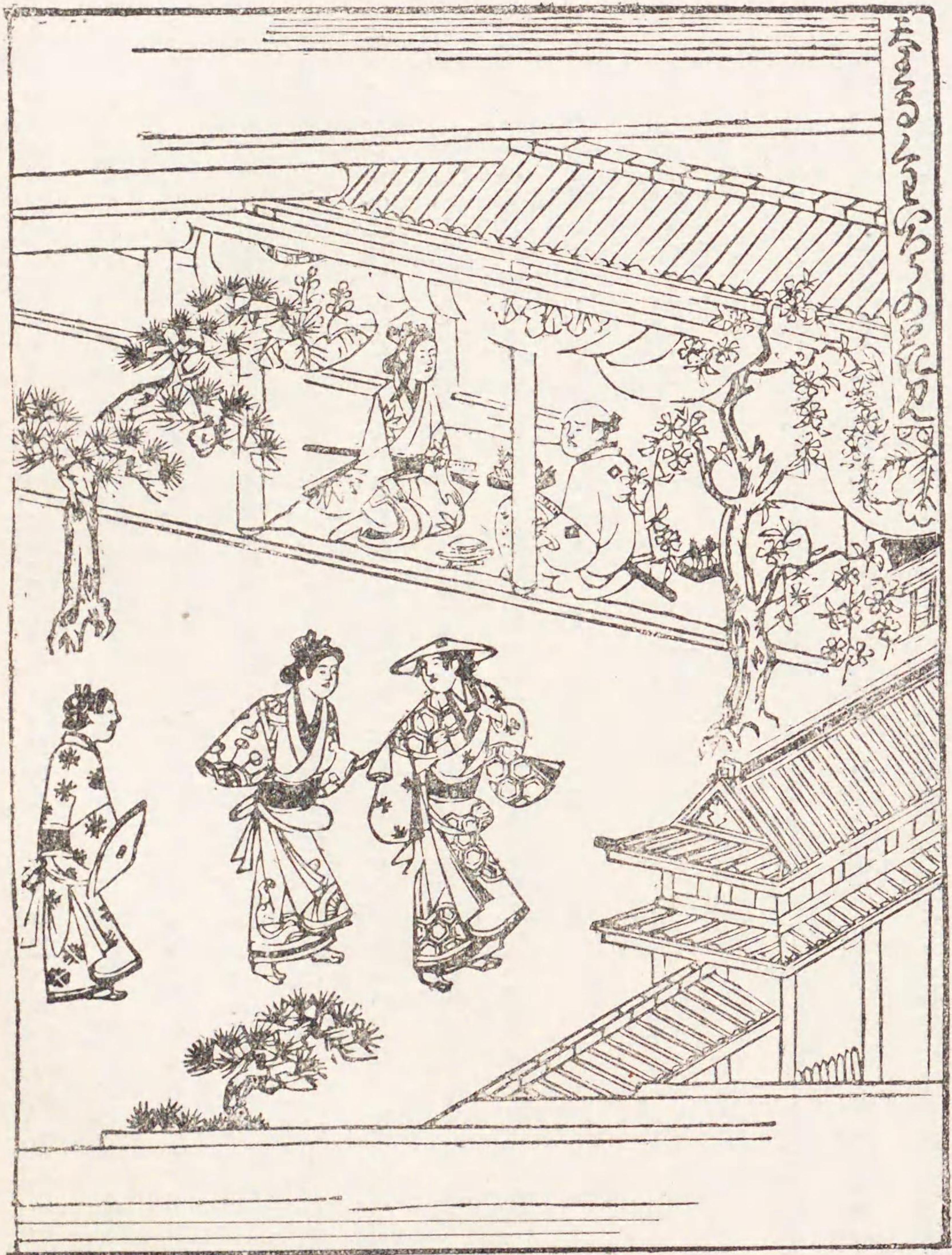
○今日。太子の御忌日也。其職掌の行列。涅槃會のごとくにして。俗人の舞終日百二十番の舞ありとぞ。いにしへ。廿一日より。廿三日まで。三日のあいだこれあるよしを。大造のことなりとて。今ハ一日につとむ



太子の御忌日聖靈會の儀

天王寺彼岸詣

○當寺の彼岸詣ハ。春こそよけれど。人ごとにいふめれど。秋ハまた。あふ坂の清水も。ひや、かに。龜井の水をむすぶ手も涼しくて。三伏の氣をはらふも。またおかし。いつの比よりか。春秋ともに。七日のうちは。人々こゝにまふで。遊宴を催し侍る。其濫觴をあらす。予おもふに。此寺の石の鳥井ハ。極樂の東門の中心なれば。彼岸の時正にハ。日輪極樂の東門にいらせ給ふとて。人々是をおがまむと。歩をはごふ事なりしを。今ハ。此こともなく。身には。きよらを盡して。大坂のうちハ。いふに及ばす。堺よりも。貴賤上下乗物辨當さすがに。ひろき道野邊も。所せくまでこみあひ。をし合て。幾千萬とも知がたく。綾羅錦繡のよそおひ。われおとらじと嗜て。風流をこのむ。人々のありさまハ。またさら也。まことに態ならぬたきしめし。うつり香ハ。花たちばなよりも。めづらしく。行かふ人の心も時めき。色をおもくするも。猶あはれになさけふかし。廻廊堂塔の縁も。ミちく、こゝらの芝原池水のほとりのくま、までも。あくまで。其家々の。紋を幕にあらはし。これ見よと云む斗に僣上するもおかし。こゝにハ。琴三味線のをとつるれハ。かしこにハ。おどりあそび笛。太鼓。つゞみ。尺八などはやしものにて。うたふ聲もおかし。また花の木陰に竝るて。あからめもせず。まもりて。物くひ。酒のミ。ことうたのつけあひ。おもしろしなど、ひげくひそらし。肪杖をつきたる體。見るもさながら。絶が



たく。またおほきなる花の枝ころなく。折とりて。地主にいらるゝも。かたひらいたく。池水をりて。手足さしひたして。見つけられ。にけまゐるこそ。無下に。口をしけれ。また傍には。酔なきして。えもいはれぬことのみして。かしらをとらへるこそ。おかしけれ。猶興つき終りての後に。人々よりあひ。むさほり。つかみあひ。口論をして。法場をけがすを。彼岸詣といふべきや。抑二季の彼岸といふ。晝夜の長短なく。相應して。正き時也。されば。兩岸ならびて。左右ひとしきがごとし。よつて。彼岸といふ。又日出月没の兩岸彼岸云とひとしきゆへに。彼岸ともかく。されば。佛法には。正きをもちる魔界に。たがへるを。用るゆへに。正直の時節に。佛法へ。顯現し。魔界へ。隱没するによりて。此時にあたりて。佛事善根をなすと也。また或説に。都卒天のかたひらに。靈所臺あり。そこに樹あり。二月に花開七日七夜して。落秋八月七日果成摩醯首羅梵天帝釋等。をのゝ集りて。七日の間世間の善人悪人の名を。印記するともいへり

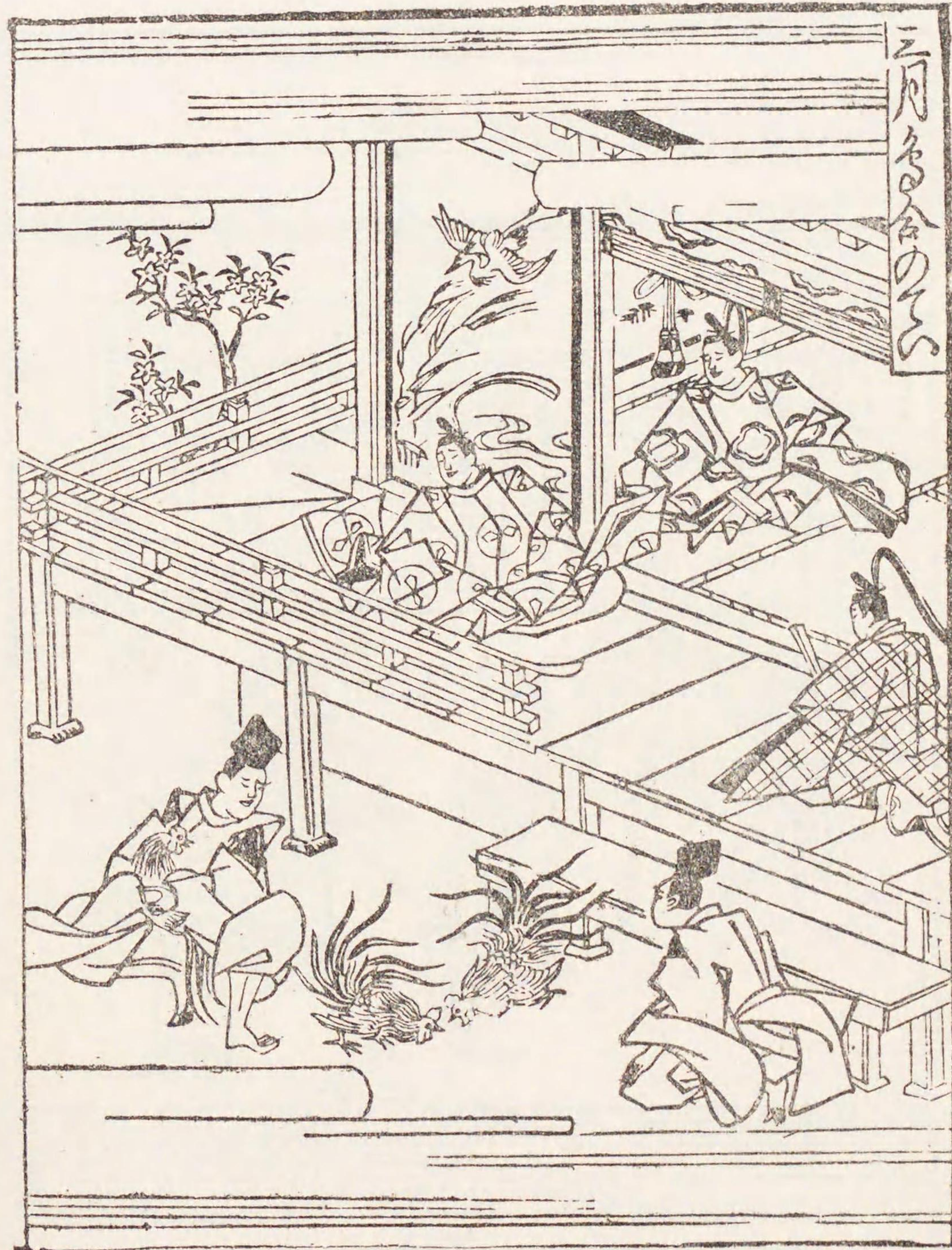
瓢箪町夜見世

三月朔日

〇いにしへ。晝夜のわかちもなく。いとにぎやかなりしが。ひと、せの火災の難に。かゝりしより。いははしならねど夜のちぎりも。たえゝに。晝ばかりの出入となれば。をのづから。柳のうちには。闇夜に灯を。うしなひたる心ちして。物の榮へ。夜に入てこそあれと。行かふ人もなく。いとこゝろほそけに。なりゆきて。冬

の日のみじかきを。かなしみ。夜のながきをくるしむも。さながら寒苦鳥にひとしく。あけなば。局格子に。出むといふも。あはれなりしに。去じ延寶辰のとし。春三月の初日より。無神月の終日まで。としこ夜見世をかざるべしとの仰をうけたまはり。阿波座瓢箪越後三筋の町よしへらまで。局々の青暖簾をとりて。燈をか、けし。萬燈會にことならず。入くる人々。こみあひ。をし合て。かちよりゆく若きものへ。えもんひきつくり。編笠をかぶり羽織をかづきて。まのぶすがたもいとおかし。乗物へ。揚屋のうちに。入ることかなねば。西東の門口にかきすへさせ。内よりいづる面々宿の首尾をすましたりと。うれしけに。跡につれたる。僕のなりふりまでに。こゝろをつけて。見かへる人もおかしくぞ侍る。そも。傾城傾國のことへ。漢書にも見えたれば。今こゝにはむもむつかし。されば。此柳のうち。大夫をはじめて。天神かこひ。はし傾城まで。凡二千二百餘人に及べり。まことに。それゝのおもはくありて。われ鍋にとちふた。たがひに情をかへし。腕を曲て。枕とするたのしみも。おもひやられて。おかしく。されば。さる人長崎の寢道具にて。京の上臈に。江戸のはりをもちせ。大坂の九軒町にて。遊びたしと。ねがひしとかや。此九軒町ほど。あそびこゝろのよき所へ。なきと誰しも。いひけるぞかし。此うちに。あまたの門あれど。東西より。外へ。常にあかす名づけて。蛤門といふ。やけばあくとにや。火事の時。ひらきて。人をとをしけると也





三月三日の合の事

節日草餅

三月三日

○是ハ。周の幽王の御時より。はじまれり。むかし三月三日に。幽王ニある人この草の餅を。奉る。御感な。めならず。それより。獻宗廟後人今日もちゆる事也

并曲水宴

同日

○是も。周の世より。はじまりける事也。水上より。盃をながし。人々の前過さるさきに。詩をつくりて。酒くめること也。御溝にて。ありしと。康保の御記に。見えたり

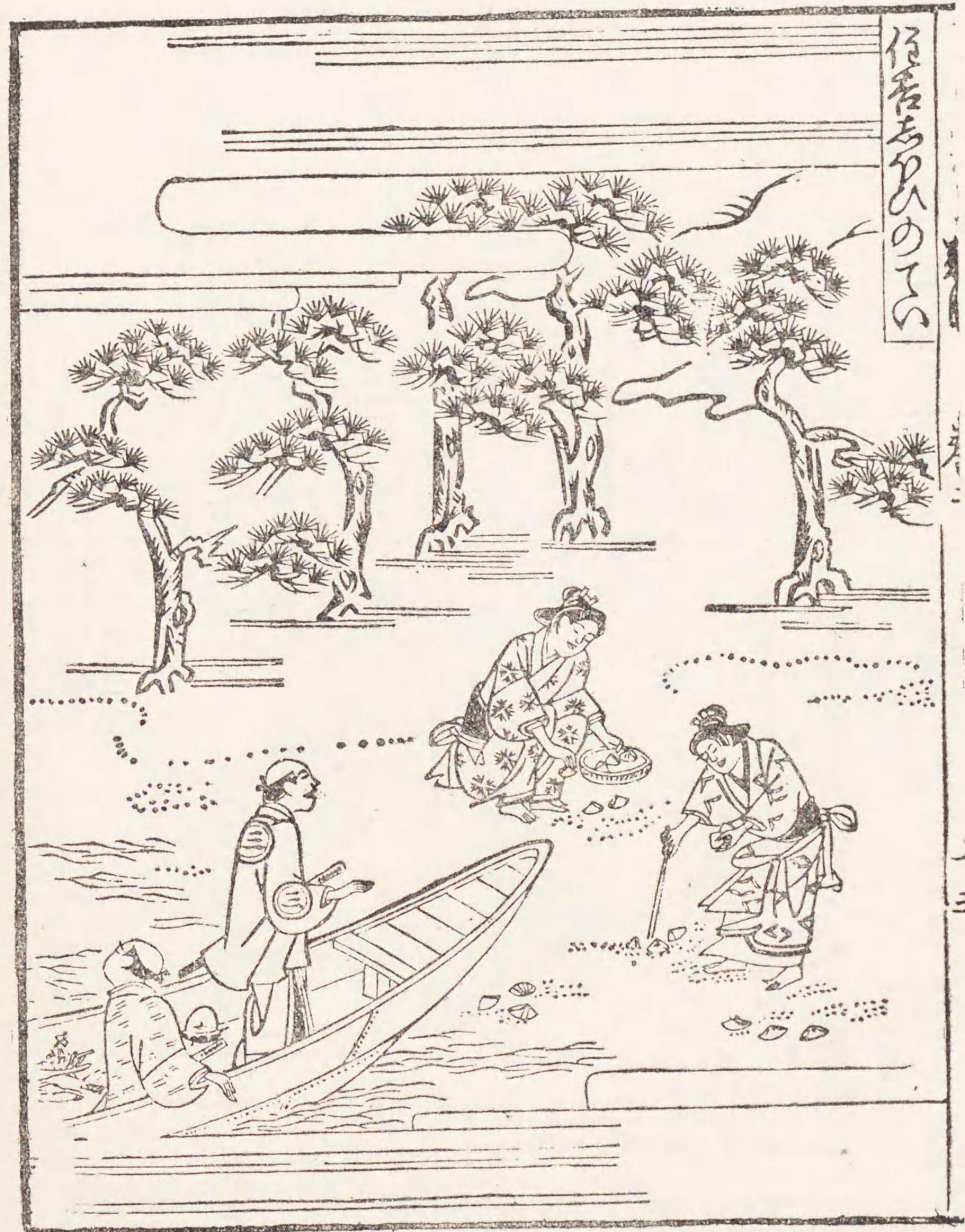
附 雞

合 禁中御庭にて有

○明王と申たてまつる帝。まだ宮においしましざらふ御時雞合をこのませたまふて。今日た。かへしめ給ひしに。ほどなく。御位につかされたまひける。吉例にて。今も侍る事也但明王ハ乙西のとし御誕生ありつる也

住吉浦鹽干

同三日



住吉大乗會

○時をたがへぬものハ。難と。潮なり。されバ。西東南海にハ。日ごとに。鹽干ありて。北海にハなしといふ。けふハことさら。すみよしうらの。ひあがるゆへに。鹽干あぞひとて。大坂ハいふに及バす。京都の好事のひとくも。くだりあつまり。大坂の川ふねに。暮はしらかしあるハながれの女をまねきよせ。笛。太鼓。つゞみ。三味線。鼓弓。いろくの拍子もの水主棍とり。櫓をさせ。とゞめきて。漕てたるすみよし浦より。さかひうらまで。濱も。磯も。沖も。陸も。人ばかりにて。どよめくほどに。物音もきこへず。堺のさもある女房ハ。鹽干小袖とて。うるはしく。こしらへて。今日を晴にと。出立たる面々。鹽の干あがるより。舟のり物を。をりたちつゝ。裙をも。かいとらす沾々としたる。濱の真砂に。裳裙を引。真砂の底にかくれたる。蛤をふむ。ひとつ。ふたつ。手づからとりあけて。なくさきよるこぶかくて。鹽ミちくれバ。俄に舟にここのる。其あいたに。ミちかさなれば。のりをくれて。おほれ。舟をのりかへらかして。水をのむ。一の谷の落あしに。平家の一門女房たち。あへてふためきて。舟にのり給ひけんも。さこそありつらめとぞ。おもひやらる。ことゆへなくのりえたる舟にハ。小歌うたひ。酒盛して。日くるまで。あそびて。浦々に漕わかれ。家々に。立歸るも。いとさうくしく。またあるべきことがらといハ。見えず。おもしらくそ侍る。

住吉大乗會

同八日



○是これは。神主かみぬし前まへ攝津守せつしゆ津守つしゆ宿禰經國すくねのけいこく。自筆みづかみをとりて。十二じふに箇年かんねんに。五部ごぶの大乗だいじやう經きやう二百餘にひやくよ軸書ぢくまふし寫しして。去いんじ安あん貞年ていねん中安居院ちゆうあんきういん大和尚だいわしやう位い聖覺せいかく法印ほふしゆを囑しよくして。唱道しやうだうとして。北白河女院きたしろのむすめいんの御願ごがんに準まして。供養くやうの宿望しゆくもうを達たつして。神明しんめいの法樂ほふらくをなしたてまつらるゝがゆへに。于今いまとしことことの今日けふハ。此會このあひを莊嚴しやうげんして。法事ほふじ有ありとぞ

善導ぜんたう忌き 同十四日

○惣さうじて。當所たうしよにハ。西山派せきざんはの寺てらすくなく。粟生永觀堂あそむねくわんどうの末寺まつし三ヶ寺さんかじに及およべり。此日このひ善導ぜんたう和尚わしやうの法事ほふじ等たうありといへとも。さのみに。羣集ぐんしゆする程ほどの事ことも。なかりき

弘法大師御影供こうぼうだいしのみえいぐ 同廿一日

○此日このひハ。大師御入定だいしごにじやうの日ひなれば。古儀こぎ新儀しんぎのわかちなく。眞言まごん十三ヶの寺てら々にをいて。法事ほふじあり。まかるに。當日たうじつ大師だいしの御影みえいへ。三寸さんすんをたてまつりけるを。ある人見ひとみて神かみにこそ。三寸さんすんハ。そなへけるに。佛ほとけに奉たてまつるハ。いぶかしといふ。予よがいはいく。是これハ大師御入定だいしごにじやうの後のち。いまだ御伯母高野山おんははむたかのやまの麓かふもとに。ましくけるが。御手おんてづから糲もみといふものを。一粒ひとつぶづはぎきよめて。御酒みさけに造つくり。御影堂みえいどうに。をくり給たまひしより。其遺法そのゆいほふにより。いまに。高野山御影堂たかのやまのみえいどうにつまむきの御酒みさけとて。奉たてまつり。今寺いまのてら々に。たてまつるも。是等これらの事ことに。よりにかと思おもひ。尋たづねへし

難波鑑 第三

目錄

更衣かうい 并ならび青葉簾之事あはばりすだれ

孟夏旬まろかのまゆん

天王寺灌佛てんわうじくわんぶつ

住吉初卯すみよしはつう 并ならび忘草わすれくさ

玉造稻荷御出たまつくりいなりおんいで

東照權現祭とうせうけんげんまつり

土塔會どとうかい

五日節會いつかのせちかい 并ならび藥玉粽之事なぐさたまちまき

住吉御田植すみよしおんげ 并ならび源平合戦之事げんへいあわせん

勝鬘參せうまんまいり 并ならび氷餅之事こおりもち

牛頭天皇祭こづてんわうまつり

嘉定喰がていぐひ

新御靈夏神樂にいごれいなつかくら

稻荷夏神樂いなりのなつかくら

座摩御祓

天満天神御祓

住吉御祓

附 堺浦と云事

難波鑑 第三

更

衣

并 青葉簾之事

四月朔日

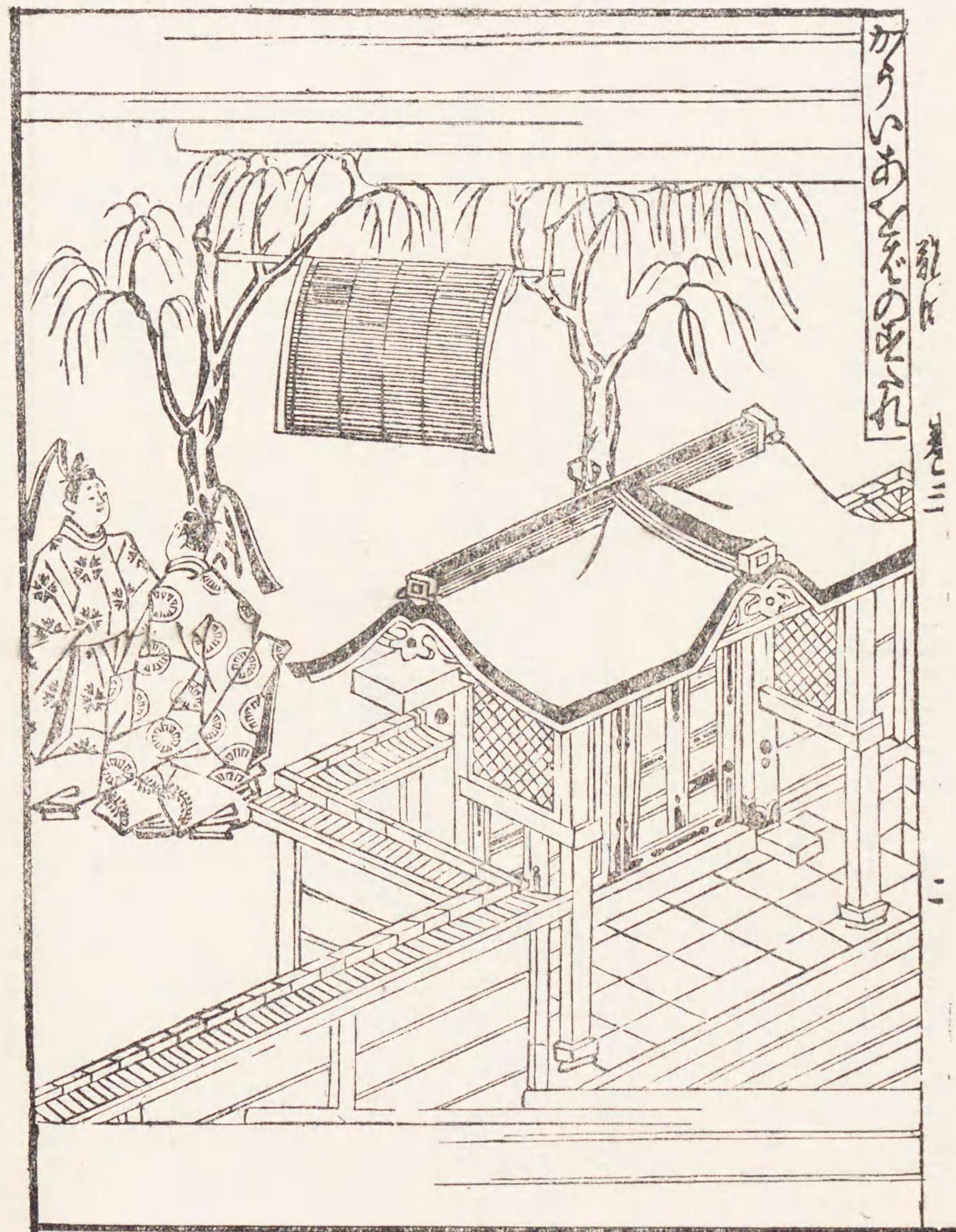
○宮中所々の御装束寮あらたむ。御殿の御帳のかたひらおもてすゞし胡粉にて。繪かくとなん。御疊なども。あたらしきを志きかふと也。天上人へ。けふよりねりぬきの衣を着給ふと也。是を白がさね。または。衣かへともいふと也。さてまた青葉のすたれとて。大内にをいて。今日南のかとに。もろ柳とて。二本あり。相向て。生たるに。青葉のすたれをかけ給ひ。其日のくれに。とり給ふと也。猶尋べし

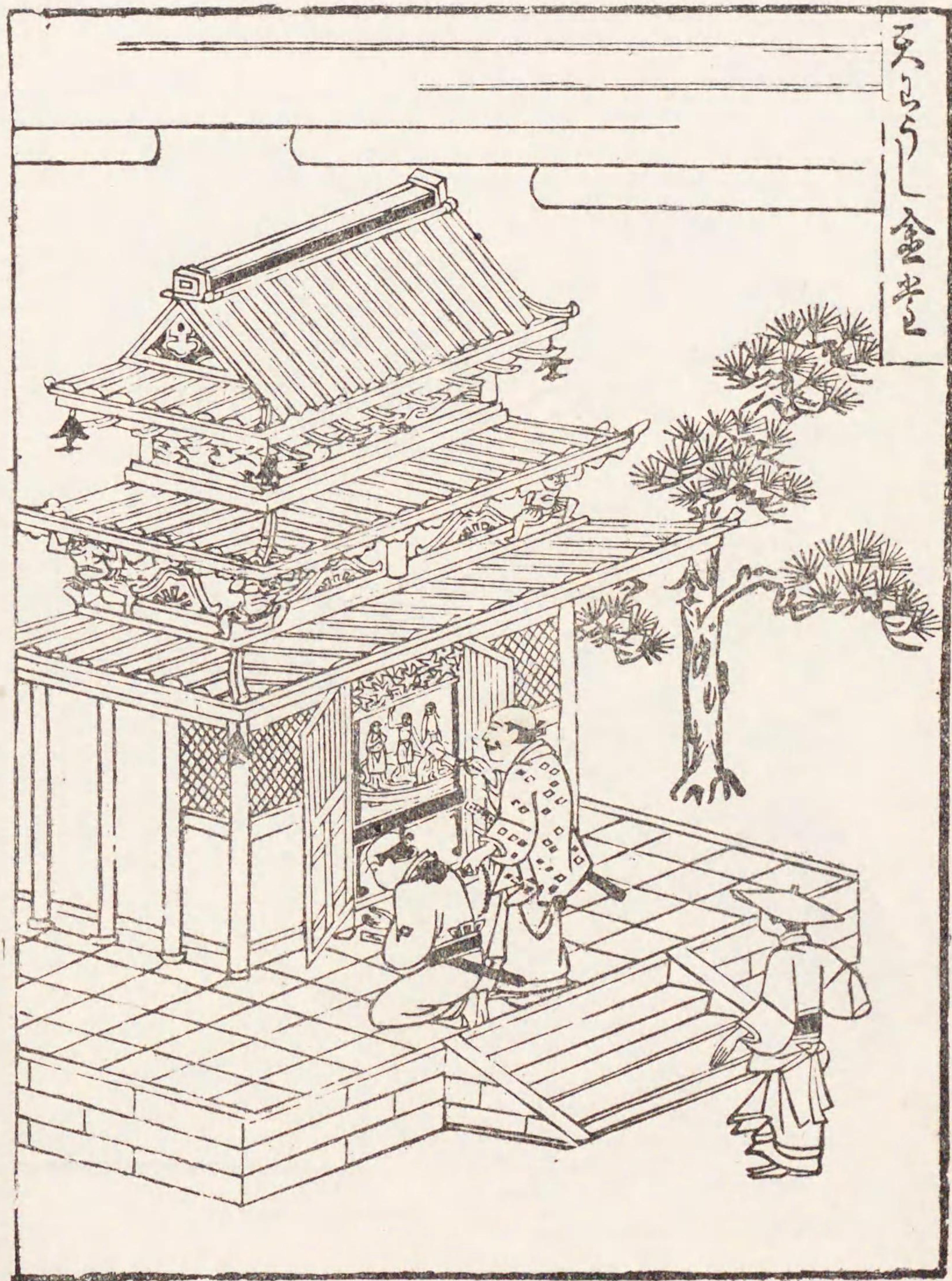
孟

夏

旬

○旬とハ。夏冬の季のあらたまる始に。臣下に。御酒をたび政をきこしめさるゝ義也。冬の旬ハ。十月朔日也。また内裏あたらしく作られて後はじめて。南殿にて。おこなはせたまふを。新所の旬と申也。御位につかせ給ひ





て。始て政に望たまへるを。萬機の旬と申也。是は。天武天皇十二年より。はじめたる也。此四月の旬に。内侍所扇持て。上達部に賜へ。膝をつきて。とり給ふ作法などありと也

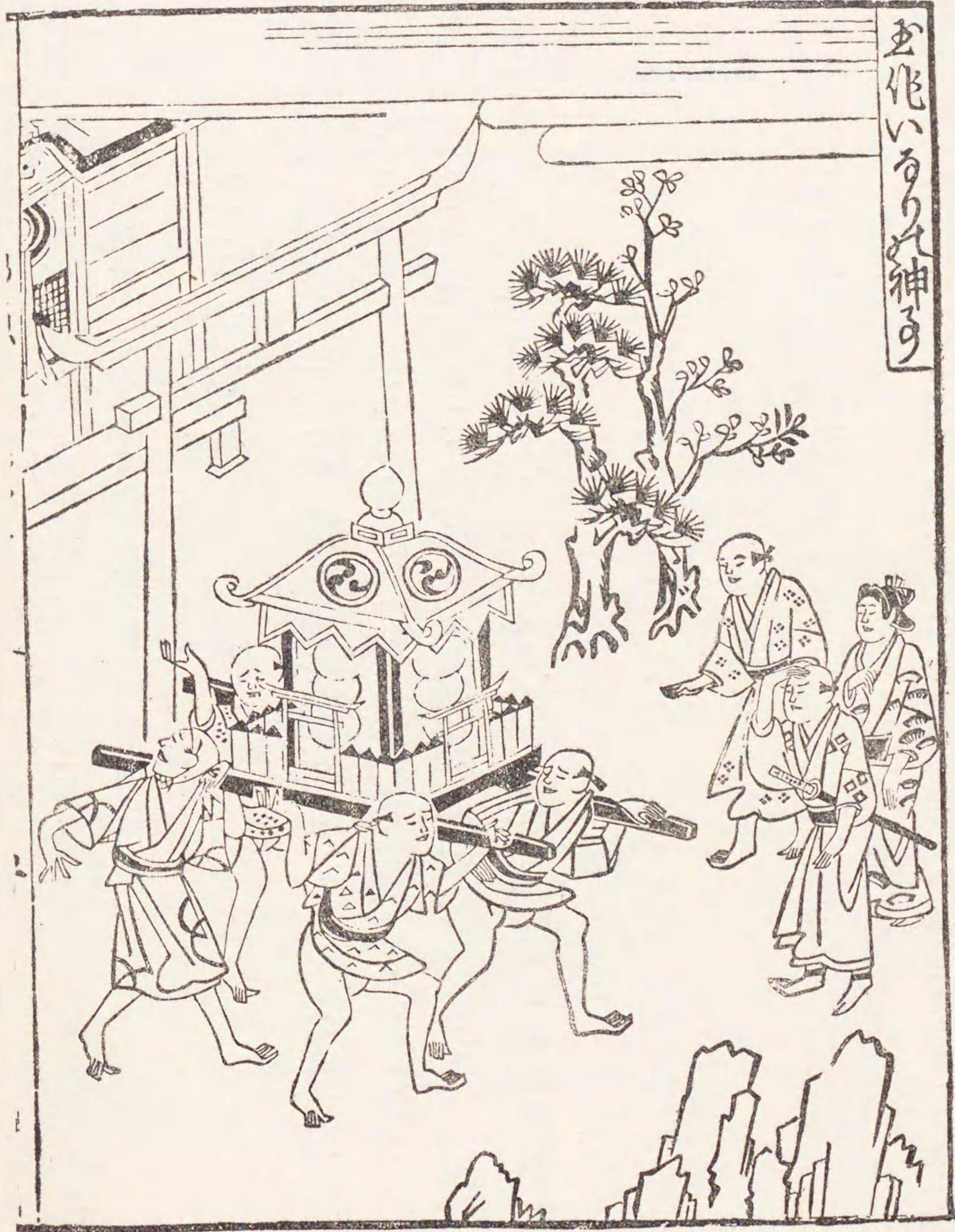
天王寺灌佛

○今日。金堂の前に。金佛の釋迦三體を出し置け。參詣の輩水をそまきて。あぶせ奉る。このミにもあらず。諸寺にをいて。其義あり。されば。灌佛といふ。尺迦如來の俱毘藍城にて。うまれさせたまふける時。天龍たりて。水をそまき尺尊に。あふせ奉り義也。但此佛生會。推古天皇より。はじめたる。また宇多天皇より。はじめるといふ説有。寛平三年四月に於宮中。有灌佛皇帝太子公卿百寮皆浴像し給ふと云々。また延喜十年に。灌佛あり。又古き書に。佛誕生。二月八日とあり。今卯月八日におこなふ誤也。二月。卯の月なるゆへに。卯の月の二月を。四月とこゝろえぬる。ひがことなれとも。世間皆まかあるうへ。あやまりにつくべし

玉造稻荷御出 中の午日

○此所を豊津といふ也。四月中の午日神輿御本社よりいだし。社内を三反まはり給ひて。そのちまた御本宮に。

お化いるり神り



いれまいらせ。卯の日まで。十日のあいだまつり。諸人におがましむ。そのかみは。鉾やうのものなど。わたる
といへとも。此ことも中絶して今ハなし

住吉初卯

○俗につたへし。此日ハ。住吉明神此所に。跡をたれ給ひし。最初日なるがゆへに。まつると也。則神輿一
社南の拜殿より。瑞籬の外を北の門まで。遷幸し。神主一族出仕して。禰宜をのく。卯の葉を持って。ねり給ふ。
其義式あると也。是を住吉の忘草と云。されバ。住吉の忘草のことハ。古今集最上の極祕なれば。たやすく志る
べきにあらず。されとも崇神天皇すみよしに。行幸ありて。物おもひし給ふ時。忘草を。植給ふよりして。いふ
と也。猶志るて尋あるべきこと也

土塔會 同十五日

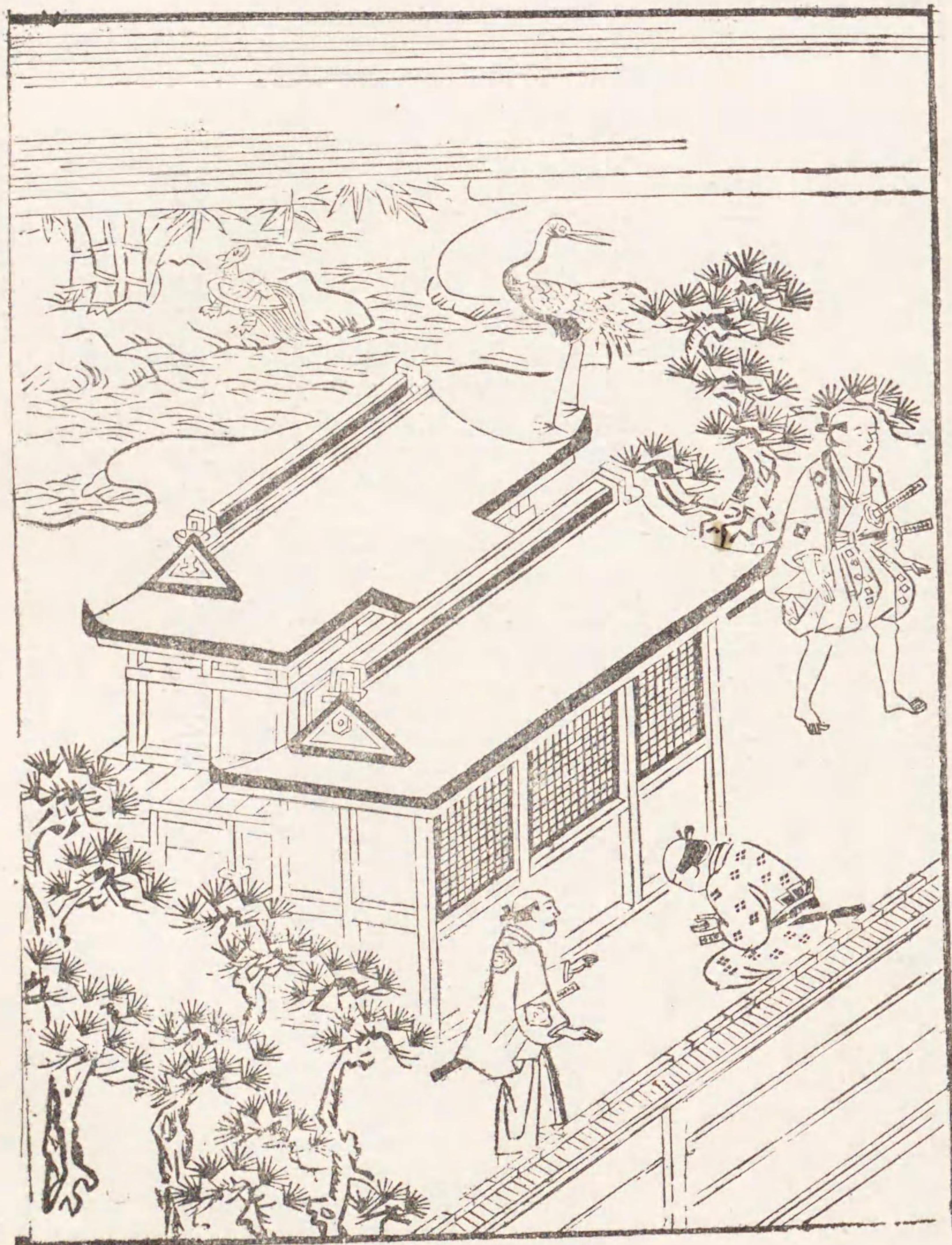
○むかしハ。天王寺七村より。當日ハ山鉾をいだしまつりけると也。まかれども。いつのころよりか。中絶して。
今ハ此こともなく。其時のねりもの。馬具。面。人形など村々の社内におさめをきしを。けふはまいりてとりい
だし。見る人もありとなん。則天王寺の内に。土塔塚として于今あり



東照權現祭

同十七日

○當日ハ。東照宮の御祭禮として。大坂のうちはいふに及ばす。近里遠村よりも。袖をつらねて。まいり。御寶前にうづくまひ。此君千代萬歳と御武運長久をいのり奉る。まことに普天の下々まで。枕を民家のやすきにをくこと。是ミな此聖君の御恩澤ならんや。されば。此君竹千世公と申たてまつり。いまた七歳の御時三州にをいて。五月五日印地うちのありしに。人々見にまかりけるが。一方には。二百餘人また。一方にハ。纔三十餘人にしぎじと見えしがをのく。多勢のかたへむらがりあつまりしゆへ。此君を。いだきまいらせしやつこも。多勢のかたへゆかむとす。公まばく見給ひて。汝多勢のかたへゆくべからず。小勢につくべしいかむとなれば。今多勢ハ。少勢を見て。心に油斷あり。また少勢ハ。多勢を見て。まけじといさむ心あれバ。終にハ。勝べし若まけたらん時ハ。加勢共ならんと仰給へバ奴き。て。何ことをか仰たまふぞ人のゆくかたにまかせ給はずして。いらざる仰ごとやと。あゝて。つれ行奉る。既に雙方立あひ。火をちらして。うちあひけるが。少勢のかたすこしたるみて見へし所へ。後の山より。かくし勢五十餘人かけ出。彼二百餘人を悉うちちらしてけれハ。見物の人々も。こゝかしこに。にけ行たり。公此よしを御覽して。汝いはざるごとかと。奴かあたまを。たき給ふを。傍なる老人つくくと。始終のありさまき。奉りさても我命がふたつほしきかな。此若君の天下を。よろしめさ



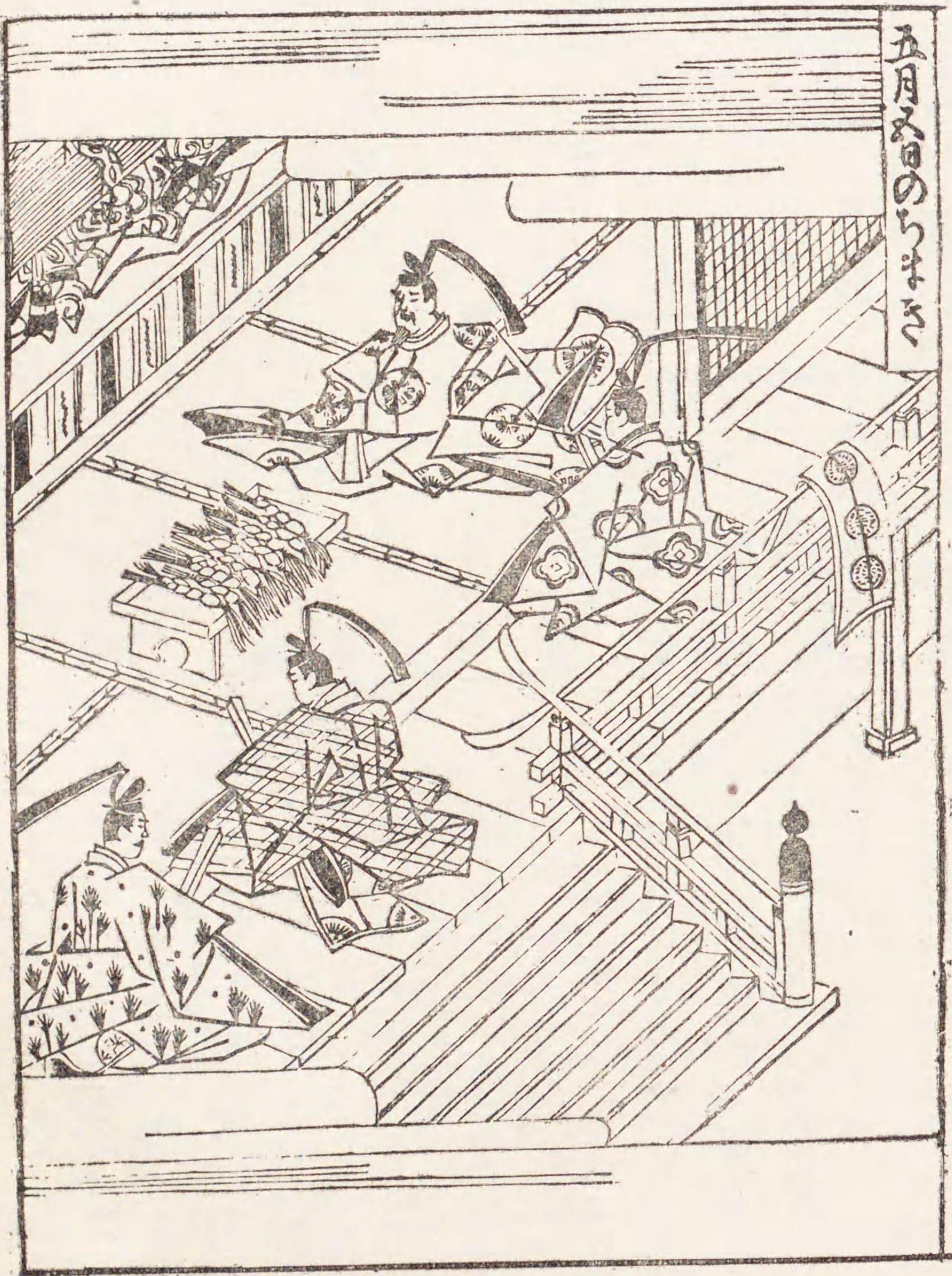
れん行末を見たとし、感涙をながしつづきけると也。寔淺からぬ。御ころさしいとも賢く予か舌端にいひ出むも。をそれあれい。先ハ筆をとめ、ぬ

五日節會 并藥玉粽之事

○主上武德殿に。出御ありて。宴會を。おこなへせ給ひ。羣臣に。酒をたまふと也。内辨なども。元日の節會豊明などに。おなしきよし。また典藥寮あやめの机をたてまつる。羣臣に。藥玉をたまふ。五色の絲をもつて。ひぢにかくれい。惡鬼をはらふとある本文侍るにや。また今日粽を用る。こと。むかし高辛氏のあくし。五月五日に。船に乗て。海をわたりし時。俄に。難風吹て。浪にあづみけるが。水神となりて。常に人をなやます。ある人五色の絲にて。粽をして。海中に。なけ入しかば。五色の蛟龍となる。それよりして。海神人をなやまさずこきゆく船も。災難にあはずと也。また屈原汨羅にまづミしを。まつりし時の供物ともいへり

住吉御田植 并源平合戦之事

○いにしへの。堺の高洲の傾城の役として。色々のかたらひに。衣裏さして。出たちうつくしき帯など。手すきにかけてつゝ。田面におりたち。早苗を。とりてうへたり。神主の車にて。田の畔に来る車をたて。幣をとり。



五月五日のつぎ

一粒萬倍の祈念あり。社人おほく出立て。早苗をはこびわたし。田歌おもしろくうたひける。早乙女のありさま。いとおもしろかりけるを。今ハ傾城ともハ。いて侍らす。人をやとひて。代にたつる程に。老さらほへたる。婆ども。澁かたひらのやぶれたるに。軒まばらなる菅笠きて植るとや。いと見所なし。末の世になれば。なにもかも。略義になりて。上代の作法にたがふこと。上も下もかくのごとし。さてまた田植すきて。神前にをいて。源平兩家の合戦とて。赤白の旗あるしを立。弓箭を持って。た、かふ。むかしハ。なかりしことなるを。中興より。ことばじめけるとこ

勝鬘參并氷餅之事

○御本尊愛染明王なるがゆへに。今日を縁日となし。錦帳をか、けて。おがましむるにより。參詣の諸人所せくまでおし合羣集す。まことに。此明王ハ。衆人愛敬をなし給ふなれハ。誰か信向をなさらんや。けふまた民家にて。氷餅をくふことハ。今日氷室の御調とて。帝氷をきこしめすなり。むかしは。富士と。よし野より。ひむろまいりける也。延喜のミかどより。此かた。丹波のいた田山より。今ハ。あかるとなり。か、るゆへにや。これハ。仁徳天皇の御宇より。はじまる猶氷ためしの所に。くわしく見えたり。





難波宮の御前

牛頭天皇祭

同十四日

○難波の宮にまふで、御湯まいらするばかり。神輿はまつらすむかしハ。平の明神を。上の宮といひ。當社を。下の宮といひて。さかえ給ひし時ハ。神輿をいたしまつりけるよし。今ハ神さびて。其さたもなし。

嘉定喰

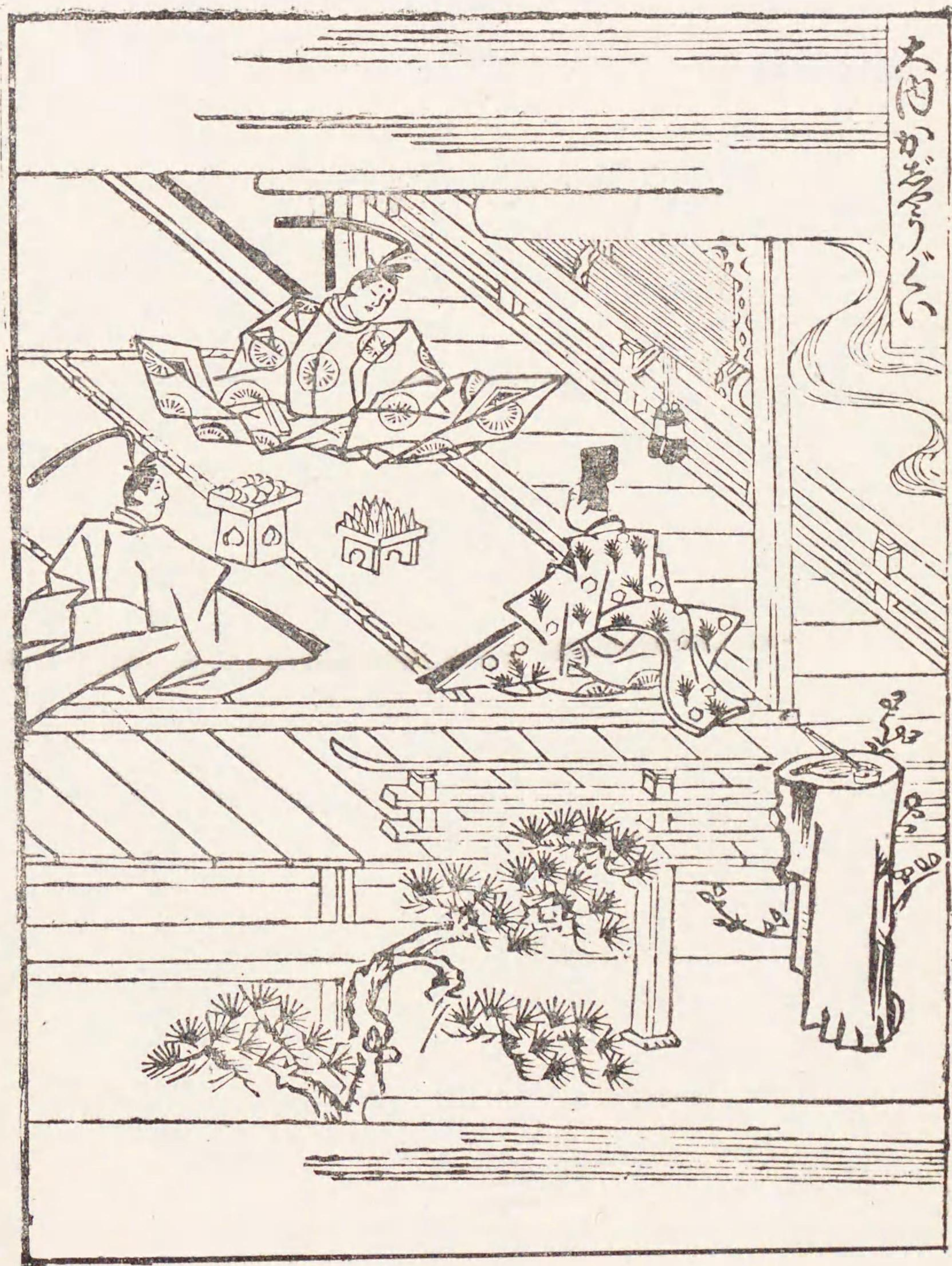
同十六日

○禁中がた米をくばりて。百一口なりにても。所望にまかせて。買もとめて。食せらる。いにしへハ。錢の文に。嘉定と書たる。是を。嘉定錢と。名づけて。食物を買もとめしを。今ハ錢も絶てなし。米にて。買侍べる其米ハ。禁中より。くださる、也。今日武家にも。いろくのくわしなどを。嘉定と。名づけたまはるとなん

新御靈夏神樂

同十七日

○氏人あつまりて。神樂をまいらせけるゆへに。夏神樂といふ。夜に入て。神輿を社内。いだしまへらくありて。御本座になをす。神前より。門外にいたるまで。氏子とも。祈願のために。挑灯をとほしけること。萬灯籠のことし



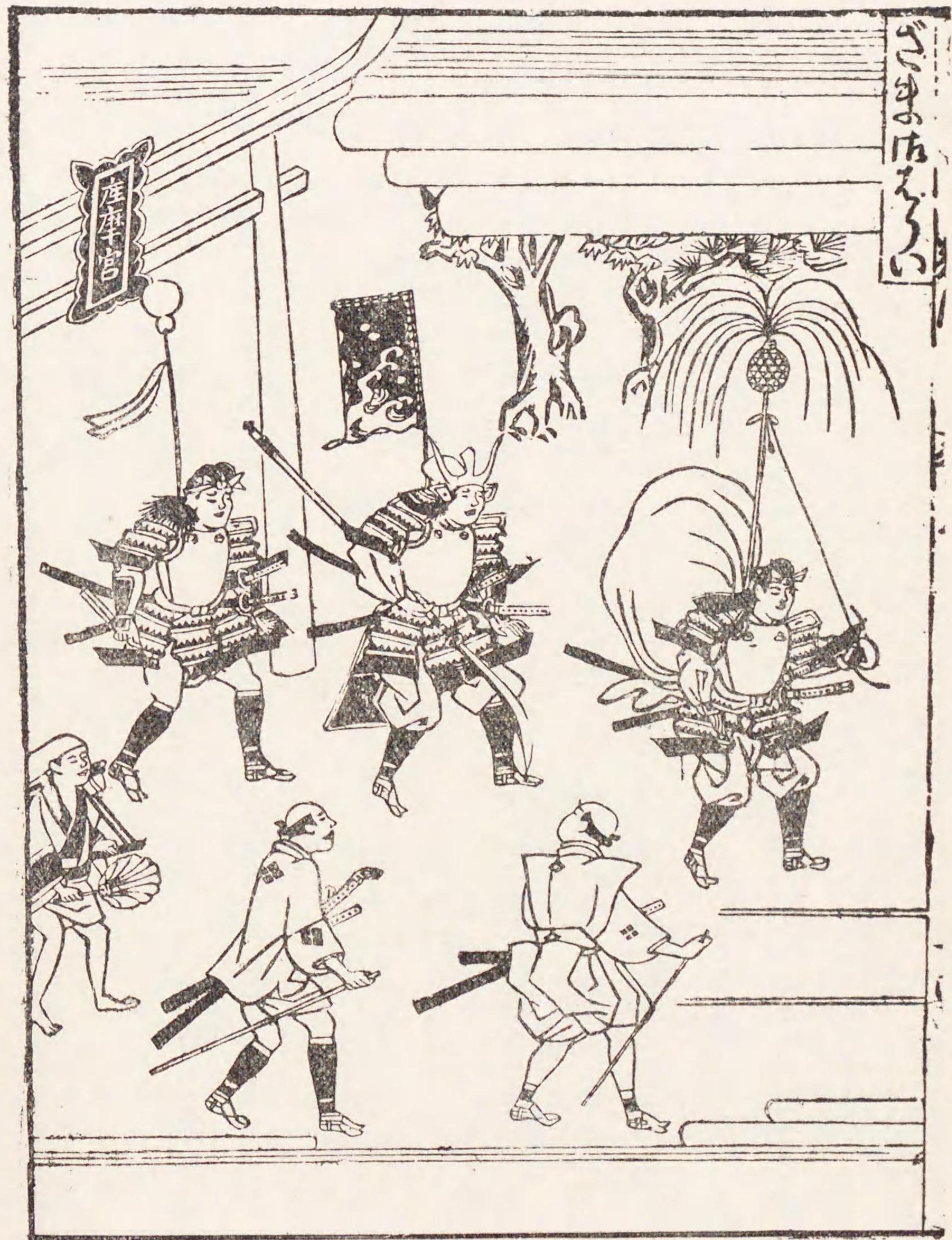
稻荷夏神樂

○是また。新御靈の宮のごとく。夜宮より。社内。挑灯をとほし。門前の商人。夜もすがら箆をたき聲をはかりに。是々味よき砂糖水とよば、れハ。是々こゝハ。よきところてん道明寺なりといふもおかしく。参詣の羣集ハ。野陣の夜に似たり

座摩御祓

同廿二日

○當日。御神前へ。御供にそへて。醬を奉るを。例とす。是ハ神功皇后三韓御退治ありて。御歸帆の時つかれに及び渡邊といふ所に。御休息ありしに。一人の賤女きたりて。ひしほをさ、け飢をすくひしより。其義を以て。奉ると也。此賤女ハ。天朔女とて。今宮社のうちに。いはふ所也。ねりもの。母衣掛武者立花砂の物色々のつくり物に。美を盡し今の渡邊筋より。本町さかい筋へ出。高麗橋をわたり。大津町の御旅所までねる。其間三十餘丁の道筋にハやらひをゆひて。暮すたれなとはりて。祭見しさま。彼法師がいへることくに。見ごと遅し。其ほどハ。人の行かひみるめも。恥す。酒のミ物くひ。圍碁變六など。あそひて。またわたりける時にハ。をのをのきもつぶる、やうに。あらしひ簾はり出をしあひつ。一事も見もらさじとする。人々の體こそおかしけれ。



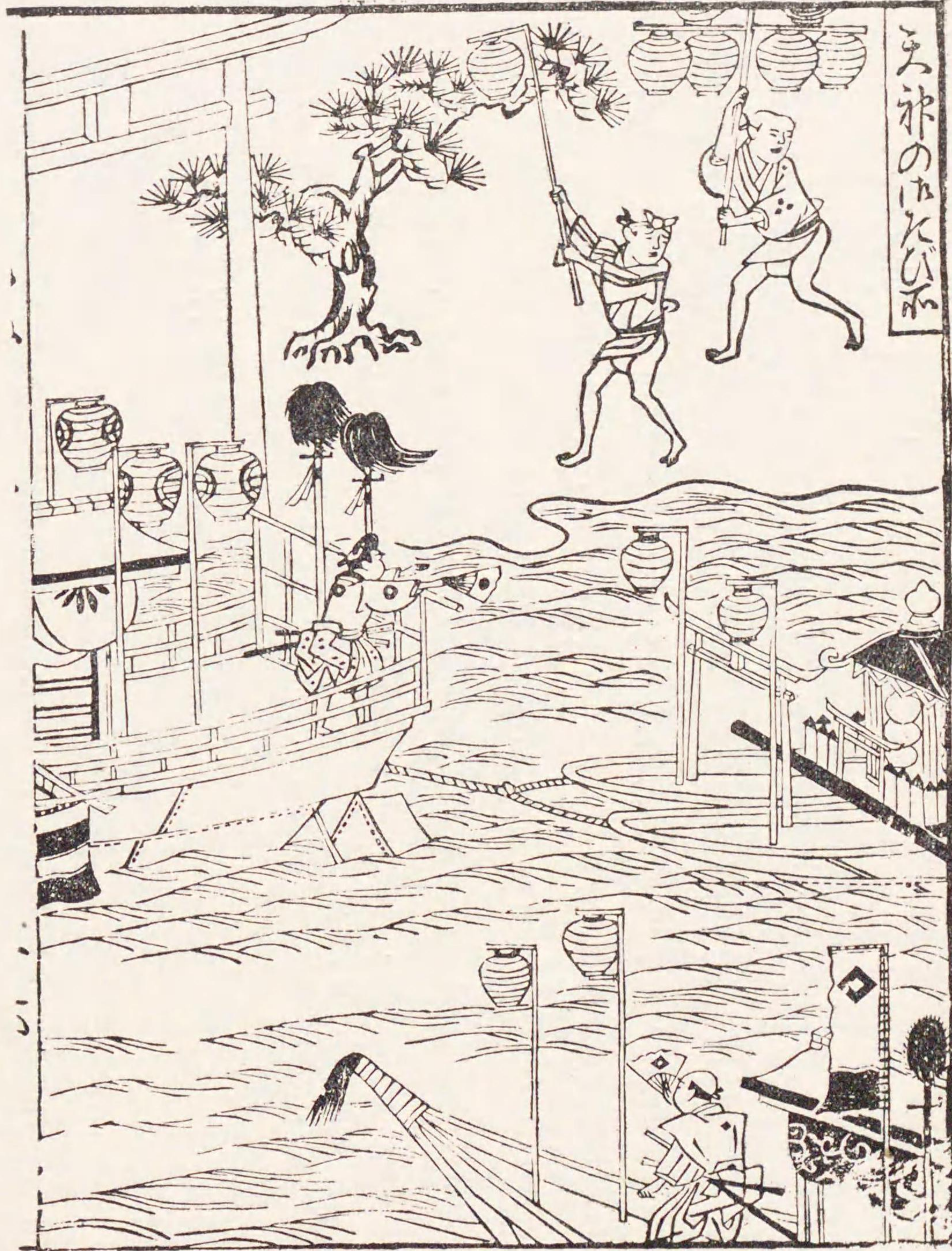
まつりわたりすぎて。その、ちに。御輿もおなし道に出させ御旅所に。御幸あれハ。神主祓などありて。本社に。還御ある。御迎の挑灯をいだして。まつり奉ること。大形ならぬ事ども也

天満天神御祓

同廿五日

○菅丞相筑紫へ。ながされ給ひし道の次でに。あしおはしませし舊跡也。今の北野の天神此宮より。其時菅丞相あまりに。飢つかれ今のえのころ嶋といふに立より。翁媪二人住ける家に入給ひ。小麦餅を。たてまつりしを聞めされし例により。御旅所とさだめ。小麦の御供をそなへ奉ると也御事ねりもの。引山三方面にして。内に兒あるひハ。花笠をきたる子どもにおどらせ。あるひハ。異類異形に出立せ。さまくの藝づくし。かね太鼓を。笛にあへせ。拍子ハ。都祇園會のまつりのごとし。また引舟などあり。内にて。おもしろき小歌うたへせ。また母衣かけ武者。小具足。いろく有。天神橋通をわたりて。難波橋の邊までゆく。御輿二社難波ばしより。舟にめし。今ハ惠比須嶋に漕行御旅所に。遷幸あり。夜に入て。かへらせ給ふ。御迎の挑灯の數々浪間をか、やかし。蒼波もからくれなるに水くどり。神代もきかぬ。祭禮のありさま。いときらくし

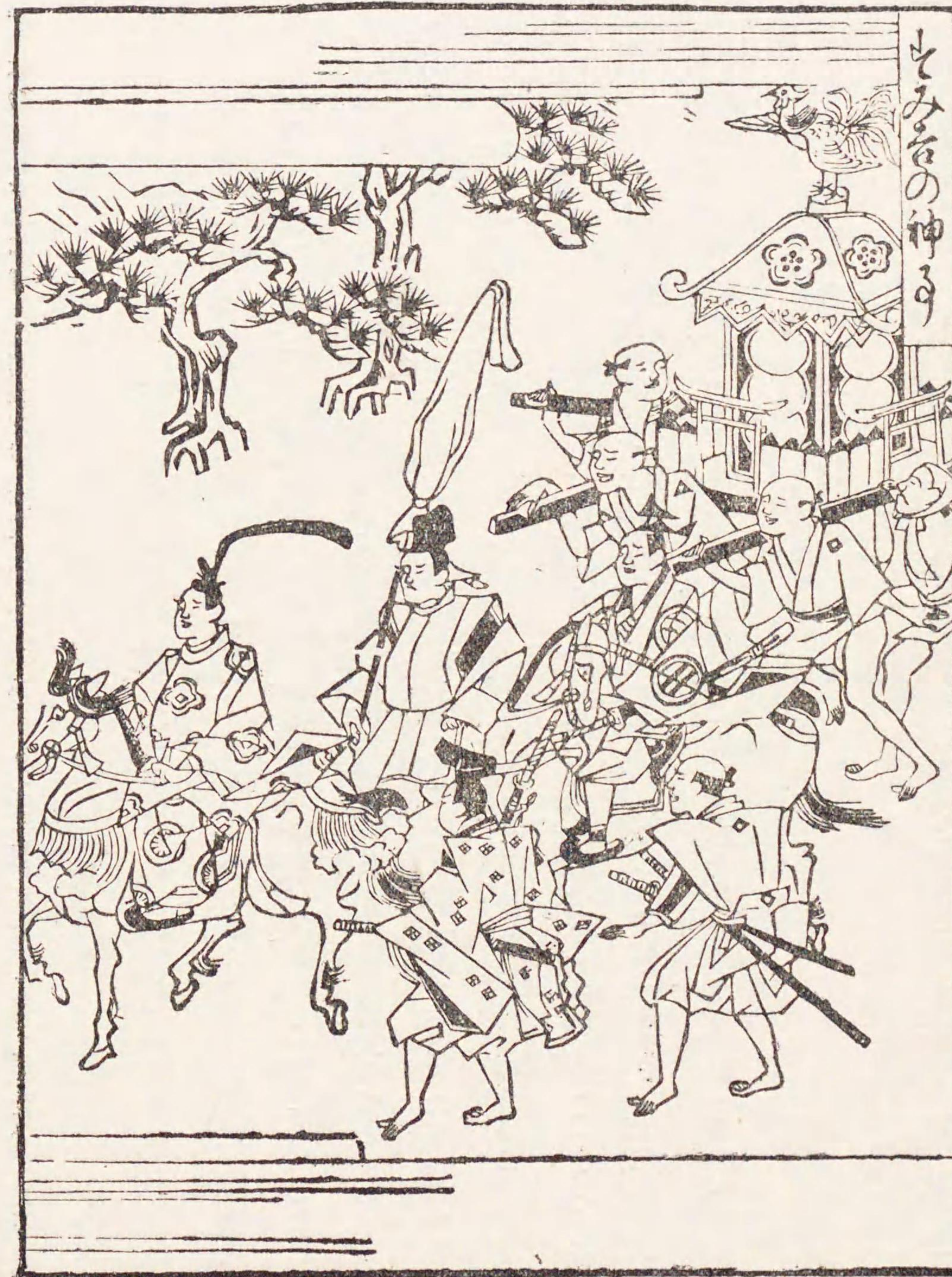
住吉御祓



○朝まだきより。方々のねりもの母衣かけ武者。小具足いろくの節に。手をつくしてわたる。其さま奇麗也。さて晝時分より。鼻高。鷹師馬にのりてわたる。社人もおなじく馬にのり。社僧ハ。茶臼笠を。きつれて。馬にのり。其次に。禰宣も馬にのり。一疋に。數百人長刀。鑓。なきなた。かつきつれ。一組々々引て。わたる聲よきものともハ。小哥うたひつれたり。さてそれより。神馬に。笠鉦さしかけ引てわたる。四社の神輿をまつりたてまつる。社務ハ。檳榔毛の車にて。反橋の本に立かく。神輿一社。七度の濱に出し。潮におりひたりたまふをあかるましきとの御事也とて。拍子たて、それより。宿院の御旅所へ。遷幸ある。神人のつとをあけ。志ハしありて。還御ある。御送迎の挑灯まことにおびたゞしきまつりこと。またく有べきともおもはれずされバ。御祓といふことハ。今のさかい浦干興七佛のいにしへより。物不思議の龍宮有。今の宿院。彼砌に。如意寶珠。また壺を。埋置給ひ。住吉明神今日幸をなし。口をひらき給ふゆへに。祭禮をなし。神輿をこゝにうつし奉ると也。御誓願の文に。今此三界皆是我有乃至唯一人能爲救護是とあるも有がたし。さるによりて。此浦の潮を。浴する輩ハ。必現當二世の願成就せりと。をのく。當日潮に入て。水をあひけるも。かゝるゆへにや

附 堺浦云事

○開口一説水十三所の神明ハ。外宮金剛界三十七尊九會まんだら佛界と。衆生界と。金胎兩部陰陽不二の地也。



是によりて。塚浦と名づく。男子盧嶋。葦邊干興ともいへり。また八祖の浦ともいふと也。子細あること也

難波鑑 第四

目録

法善寺墓參

乞巧奠

天王寺千日詣

孟蘭盆 附 躍之事

地藏祭

三津寺八幡祭 附 放生會

安居天神芝原祭

難波鑑 第四

七日御節供 索餅并仙翁花送事

天名種 并 七姬名之事

御城御番代

東西本願寺燈籠

八朔 并 禁中御馬

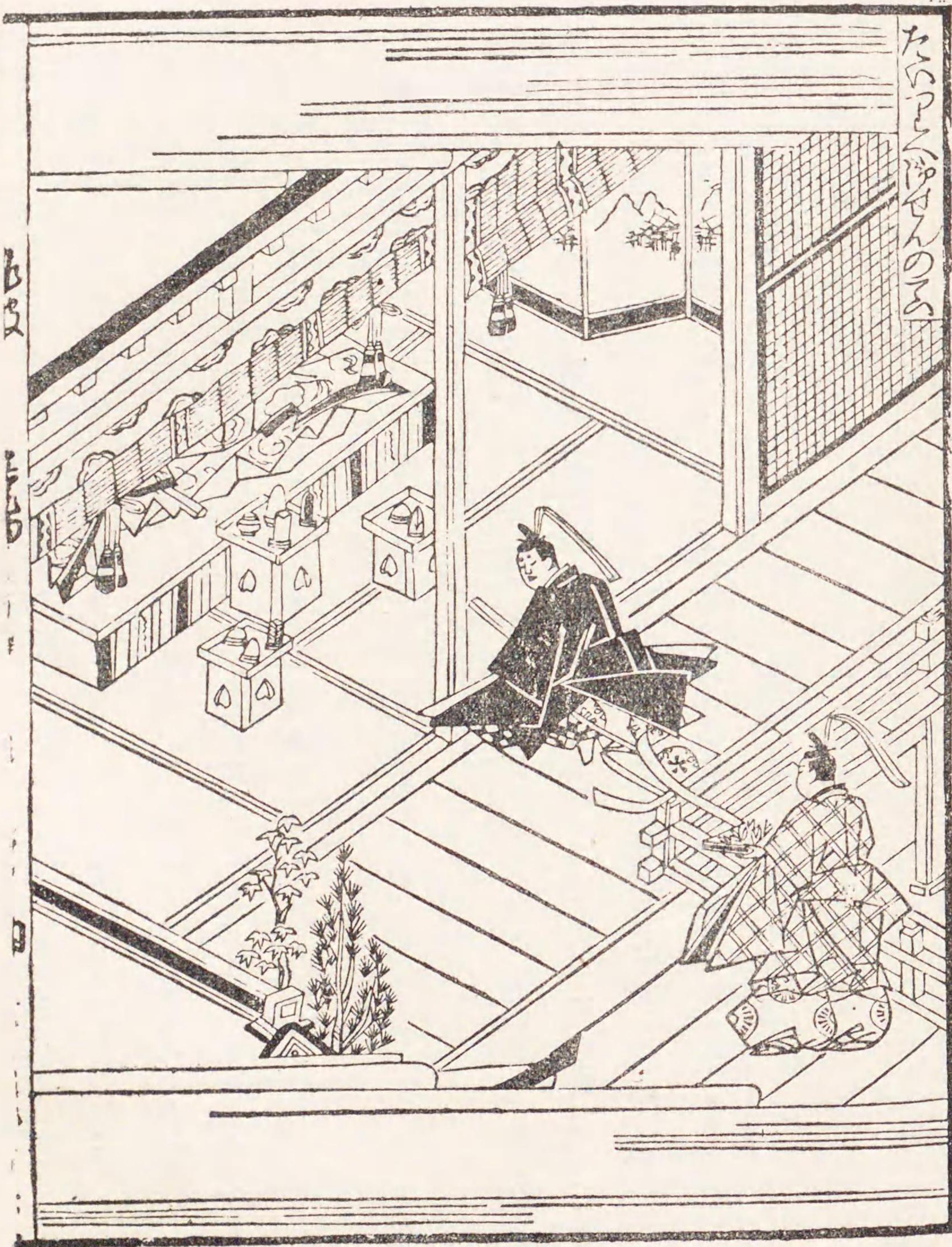
難波堀江月見 并 難波御被

難波鑑 第四

法善寺墓参

七月朔日

○千日寺のたゞきがね。諸行無常のひゞきあり。歌舞喜若衆の花のかほばせも。つるに必衰をあらへせり。さればあしたにハ。紅顔ありて。世路にほこる人も。夕には。此墓所にきたりて。白骨となりて。朽る。まことにけふ人の上。あすの我身をたらず。おもへばくはかなき。あだしの、露よりもろき世の中に。たれありて残るべき。鳥部山の煙たちさらでのミ。住はつるならひならバ。いかに物のあわれもなからんといへることなと。おもひやられて。心ほそくそ侍る抑此法善寺と申せしハ。寛永年中のころほひより。千日の念佛をとりたてしより。人ごぞりて。千日寺といへり。それよりつとひて。今ハ不斷念佛の道場となれり。いつのころよりか。此寺の墓参として。七月一日より。其月のくる、まで。毎夕大坂の男女。老若貴賤によらず。此寺にまふできたるありさま。いふも中々くだくし。予も一夕残暑のたえがたかりし折から。納涼の陰をもとめむと。こゝに來て。堂のえ



んに。端居して。人々のころをうかゞひ見るに。予がごときの人おほくて。實に參人まれにして。わかき人々へ。色にそみあるひは。酒宴などを催し。されめき遊ぶ人がちにして。あるひは。いきほひ猛にのしり。はてハ。喧嘩して。法場をけがす人あり。かゝることを見るにつけても。いよく我身をかへりみ。うけかたき人界に。生を得て。有がたき御法を。うくるよろこひを。わすれ後の世のくるしみをまふけむこと。おもへばくあさましくそ侍る。かゝることをしても。物詣といふべきや。をそるべくつゝしむへし

七日御節供 索餅并仙翁花送事

○むかし高辛氏の小子七月七日に死せり。その靈鬼となり。人に瘡病をなやます。彼存日に。麥餅をこのみしゆへ。索餅を以て。是をまつれば。年中の瘡病を除くといへり。さればけふの御節供に。内膳司より。是を調進せり。よりてするくまても。索餅をもちゆるは。此ゆへ也。けふまた仙翁花を人に送ることハ。乞巧奠とて。二星をまつり。香花をそなふがゆへに。花を人にも。送るにや。仙翁花ハ。嵯峨の仙翁寺より。はじめて。出しによりて。其名とせりとかや

乞巧奠 七日

○乞巧といふことハ。もろこしよりことおこれり。七夕祭とも云也。けふハ御殿の庭に机を四脚たて。灯臺九本但をのくともし火あり。机の上火とりに。夜もすがら。たき物くゆる。また琴をたて。たらいに水を入大ざらの星をうつせり。天平勝寶七年よりはじめて行へせたまふと也。香花をそなへ。供具をとのへて。庭上にふみを置。竿のはしに五色の絲をかけて。一事をいのるに。三年のうちにならなふといへり。此ゆへに。乞巧と申也。郝隆ハ。腹中の書をさらし。阮咸ハ。竿の上の禪を。手向しためしも侍る也
年中行事 七夕にけふハたむくる琴のをたえぬや秋のちきりなるらん 爲羣朝臣
歌合

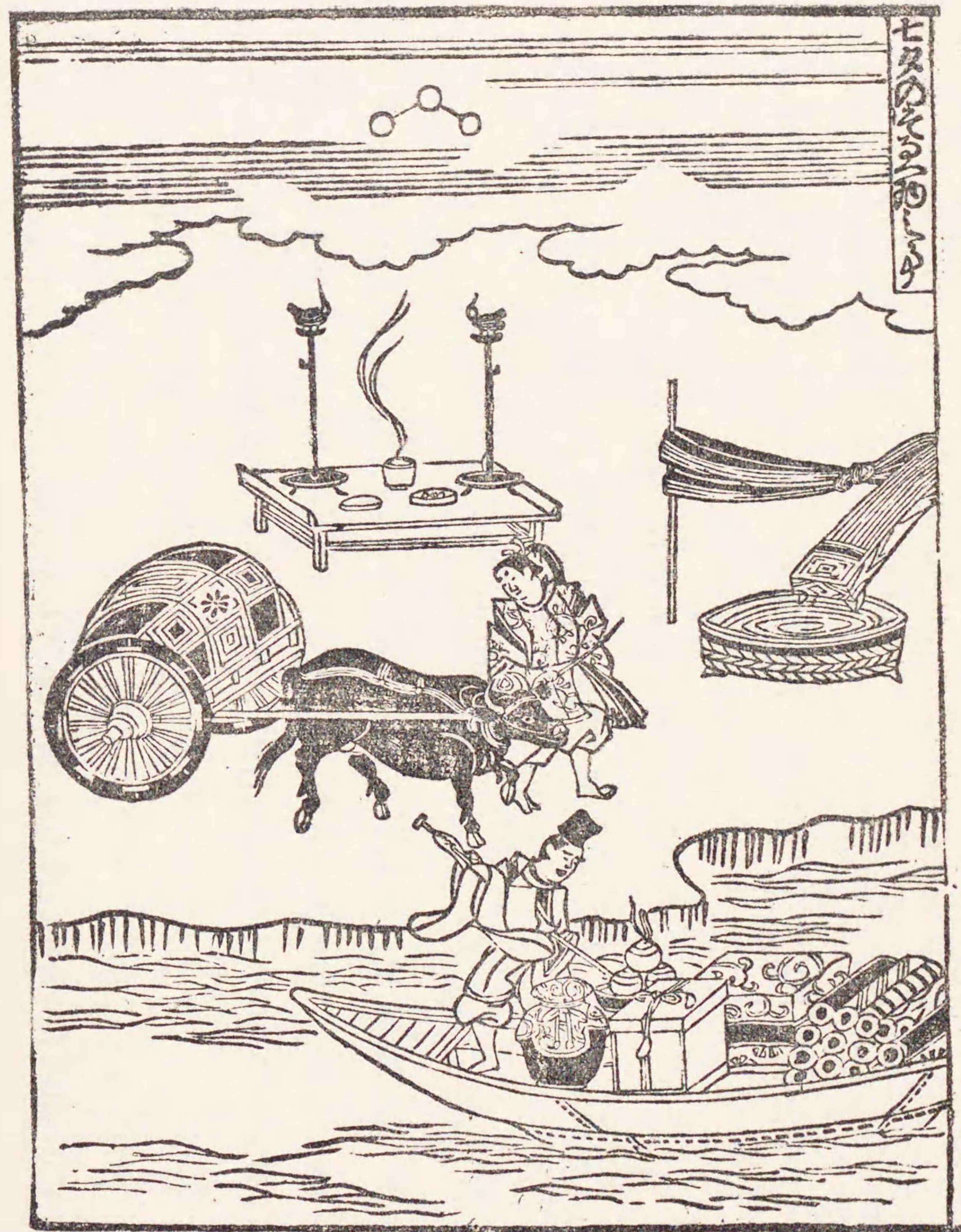
天名種 并七姬名之事

○同七日萬の寶物を。舟車につめて。七夕に手向たてまつる。是を天の名種といふ
けふハとて天の名種のとりくくに舟と車や七夕のもの
さてまた。七夕に。七姬の名あり

- さゝかに姫
- 薫姫
- 百子姫
- 袖かす姫
- 織女
- 梶葉姫
- 横姫

天王寺千日詣

同十日



○此日天王寺へまいれば。千日にむかふとて。参詣の羣集大かたならず

御城御番代

同十二日

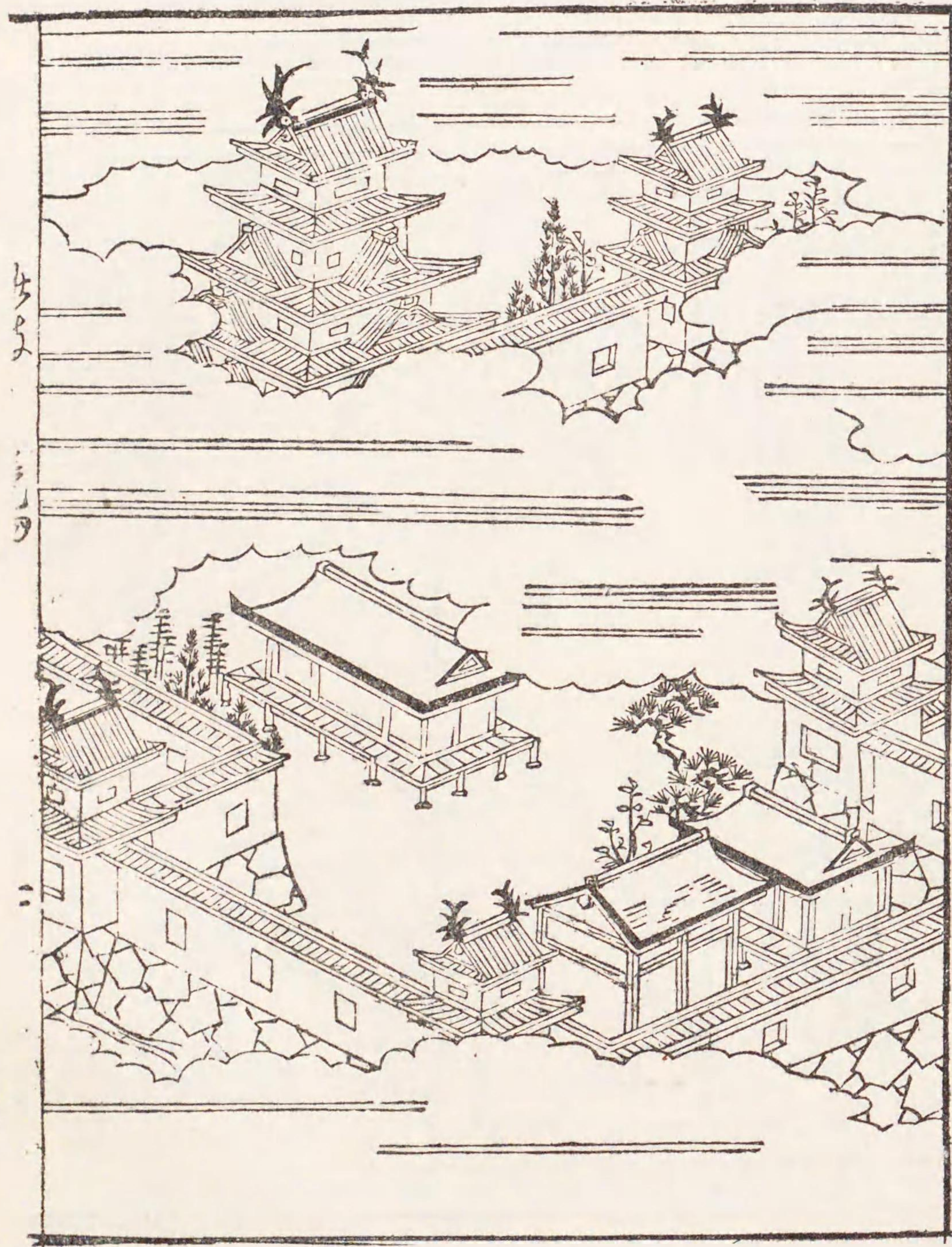
○四の海浪まづかにして。江戸をならさぬ。時津風難波のうらも。をたやかに。民の籠も。にきくとたかき矢倉の時の太鼓も。うちおさまれる。御城の白洲にをりし。友鶴へ松にちとせやちきる覽。猶行末も。久堅の雲かとのミぞあやまたる。あら浪た、む石垣の堀のどう龜幾世經て。萬々歳や待ぬらん。かゝるめでたき御代に。また行もかへるもあふ坂の關のひかしのあなたより。御勤番の諸十隔年に。かへらせたまふ。そのかきは。仲秋のころなりしが。ちかきよりして。今日をはじめ十六日までかへらせ給ふ。御出入の粧。かいつくろふ儀式うるはしく。まことにやんごとなき御ありさま。中々武士に越たる物あらし

人ハ武士はしらひの木魚ハ鯛小袖は紅梅花ハミよし野 一 休

盃 蘭 盆

同十四日

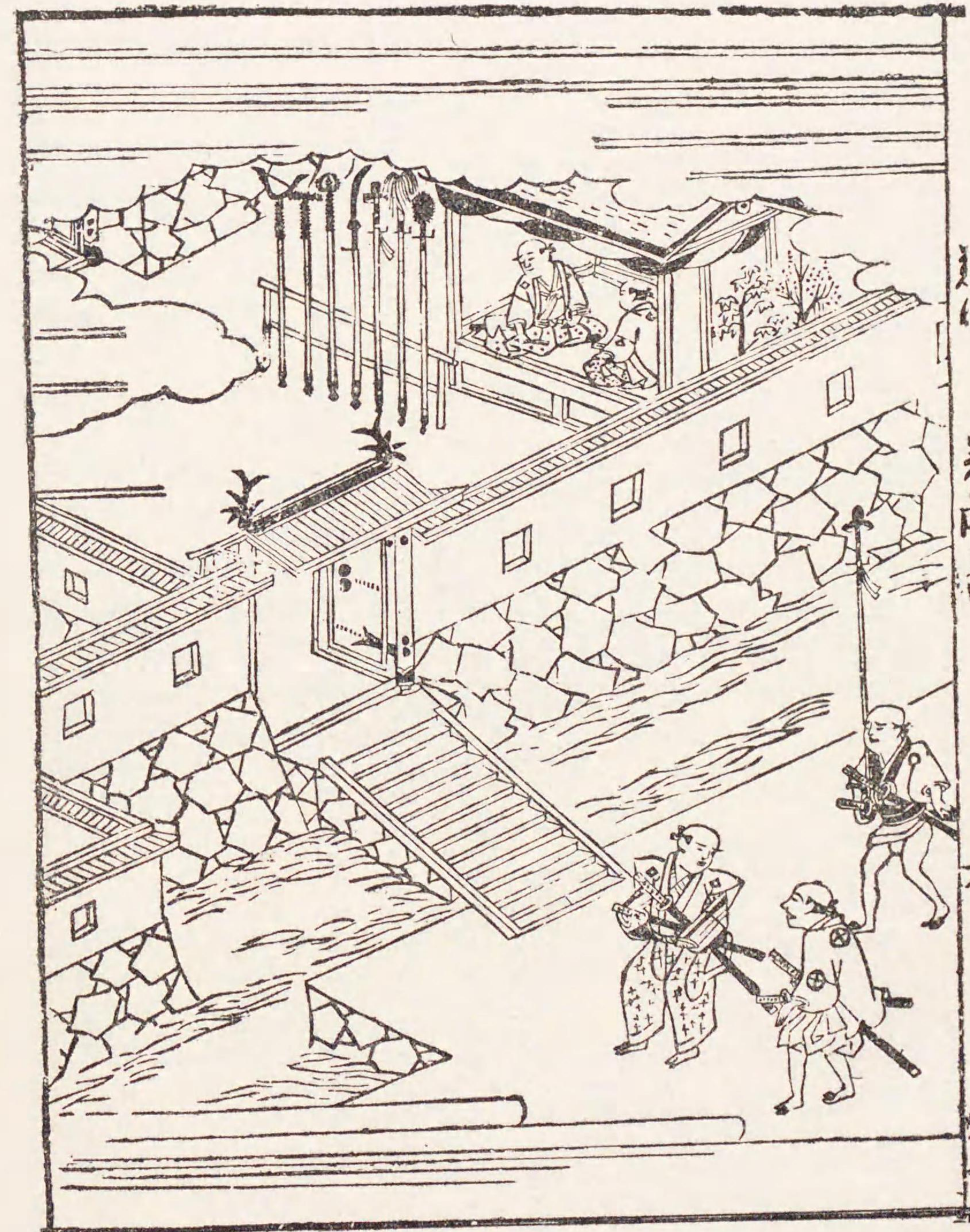
○内藏寮御盆供をそなふ。晝の御座の南の間に菅圓座一枚ちかせ主上是にて御拜あり。幼主におはしたまへる御時ハ。此義なしと也。盃蘭盆といふハ。梵語也。倒懸救器と。翻譯せり。倒懸ハ。さかさまにかくるといふ心也。



ナニワ

シロ

二



一〇



餓鬼のくるしみを。思ふにさかさまにかけたらんがごとし救器のこのがきのくるしみをすくふうつもの也。佛弟子目蓮はじめて。六通をえて。その母の有所を見られしに。餓鬼の中にありしかば。是なけきて釋尊にまふで。このくるしみをすくはむことをもとめられしかば。七月十五日に。自恣の僧を供養あらば。解脱をえられんと。説たまひしよし。孟蘭盆經に見えたり

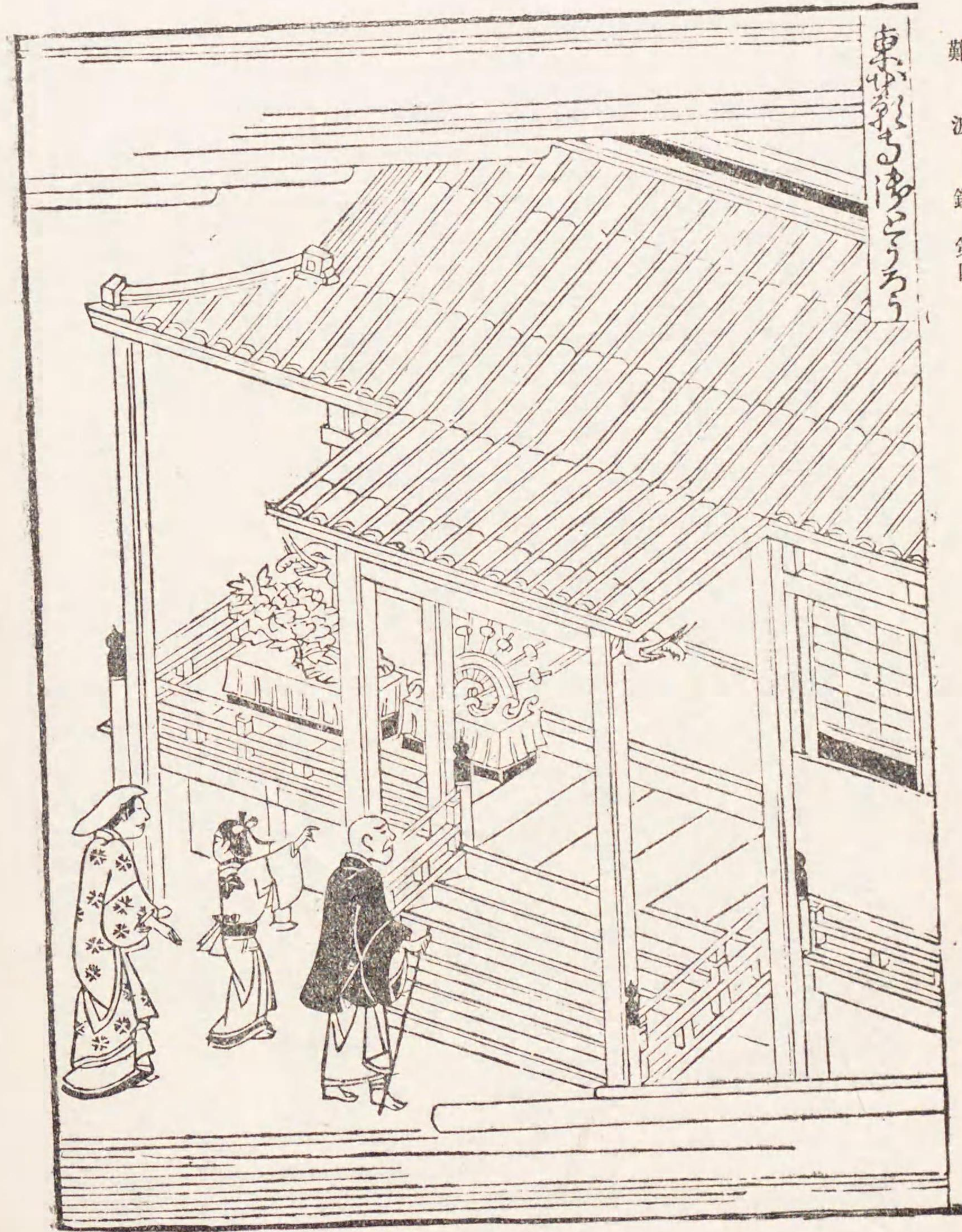
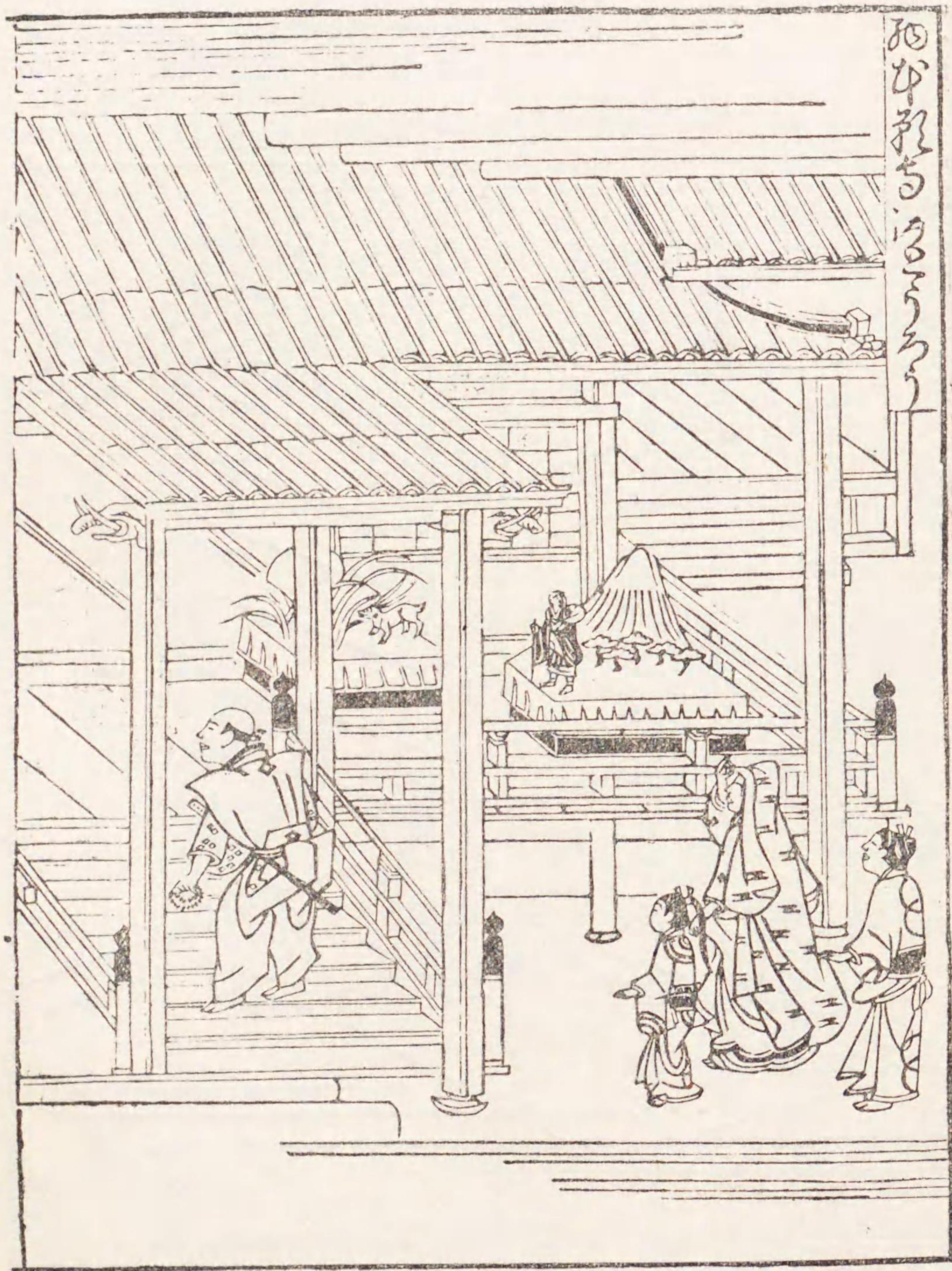
附 躍之事

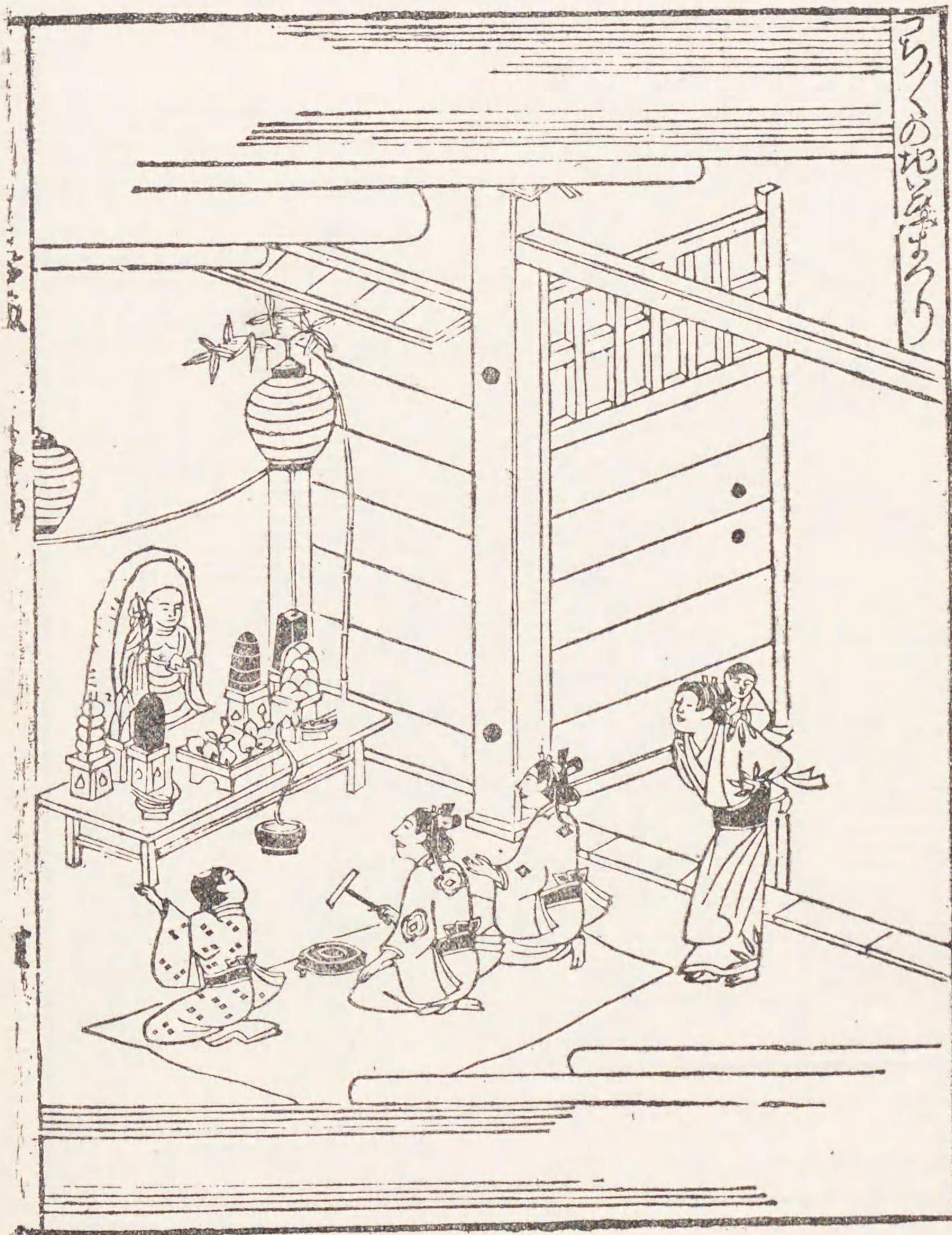
○をどりハ佛在世にもあり。すなはち。踊躍觀喜とて。法門を悟道してハ。をどりとつて。よろこふといふことなり。儒經には。手のまひ。あしのふむところを。あらずといへるものこゝろあり。いま町々のをどりハ。秋ハ人の氣分下陷するゆへに。殺厲の氣をはらひ。君相二火の氣分を引たてんためにをどりハありとこそ

東西本願寺灯籠

同十七日

○洛陽御本寺にありし灯籠を。大坂の御堂にうつし。十七日より十九日まで。諸人に見せしむ。まことにいろいろのつくりばな。さまざまとしくにかはり。鳥けたもの、つくりものなとにこゝろをつけて。色をあらそふこと。東西いづれかをとり侍らんや





地蔵祭 同廿四日

○けふハ地藏の御えん目にて。町々の辻に。わらバへとも。供物灯明をか。けてまつる也。取分安堂寺町東堀壹丁目の門の脇に。あぶらかけの地藏とて。いにしへよりあり。此地蔵よく。瘡病をなをし給ふとて。其宿願に。繩をかけ置。やまひ愈時ハ。かならず繩をときまいらする。寔苦勞なる地藏の體。見るもさなから堪かたくこそ侍れ

八朔 并禁中御馬

○是ハ。大やけことにてハなし。されバたしかなる本説あらず。建長の比より。祝來られると也。はじめハ。田のミとて。土器に。米をいれて。人のもとへ送けるとかや。其後次第々に。世人さかんにけふを以て。あつかへる事也。今わらハの行器をもて遊ひの送物とせるも。今としの米をいる。うつハものによ。ある説に。公事也。田面の節會とて。そのかミは。早稻の焼米を。諸國地頭の本より。禁中に奉りしと也。中手奥手田も。このころハ。穂並花咲て。科戸の風も。静ならんことを。上下ともに。いはるまつる節なれば。猶武家にハ。領地方の満作納收の祝をなし。主君の拜禮をおもくする也ともいへり。また今日は禁中へ公方より。御馬進上あり。

た、し昔ハ。十四日より。當月の中。國々よりたてまつると也

あふ坂の關の清水にかけ見えていまやひくらん望月の駒

三津寺八幡祭

同十五日

○けふは當社の祭禮とて。氏人ども神樂を奏して。御輿はまつらす。居祭也。まことに神ハ。人のうやまふによりて。威光を増しめ給ふとかや。此御神ほと御種性も歴々にて。ことに。男山宇佐などには。おびた、しままつりことをなし奉るに。さのミのことなきハ。よき氏子をもたせ給へぬゆへにや。此日諸國にて。放生會をなしける。其はじめをきくに。是ハ。元正天皇の御宇養老四年九月異國襲來の時。八幡大菩薩の神力にて。たやすく。異敵をふりぞけたまふ。その、ち大菩薩の御託宣に。合戦のあいだ。おほくの人ころされぬ。かれがために。放生會をおこなふべきなりと。ありしによりて。石清水にて。此事あり。うたにいけるを。はなつとよめり

年中行事

歌合 世にかくてつなかる、身をすくいなむ生るをはなつ神のめくみに

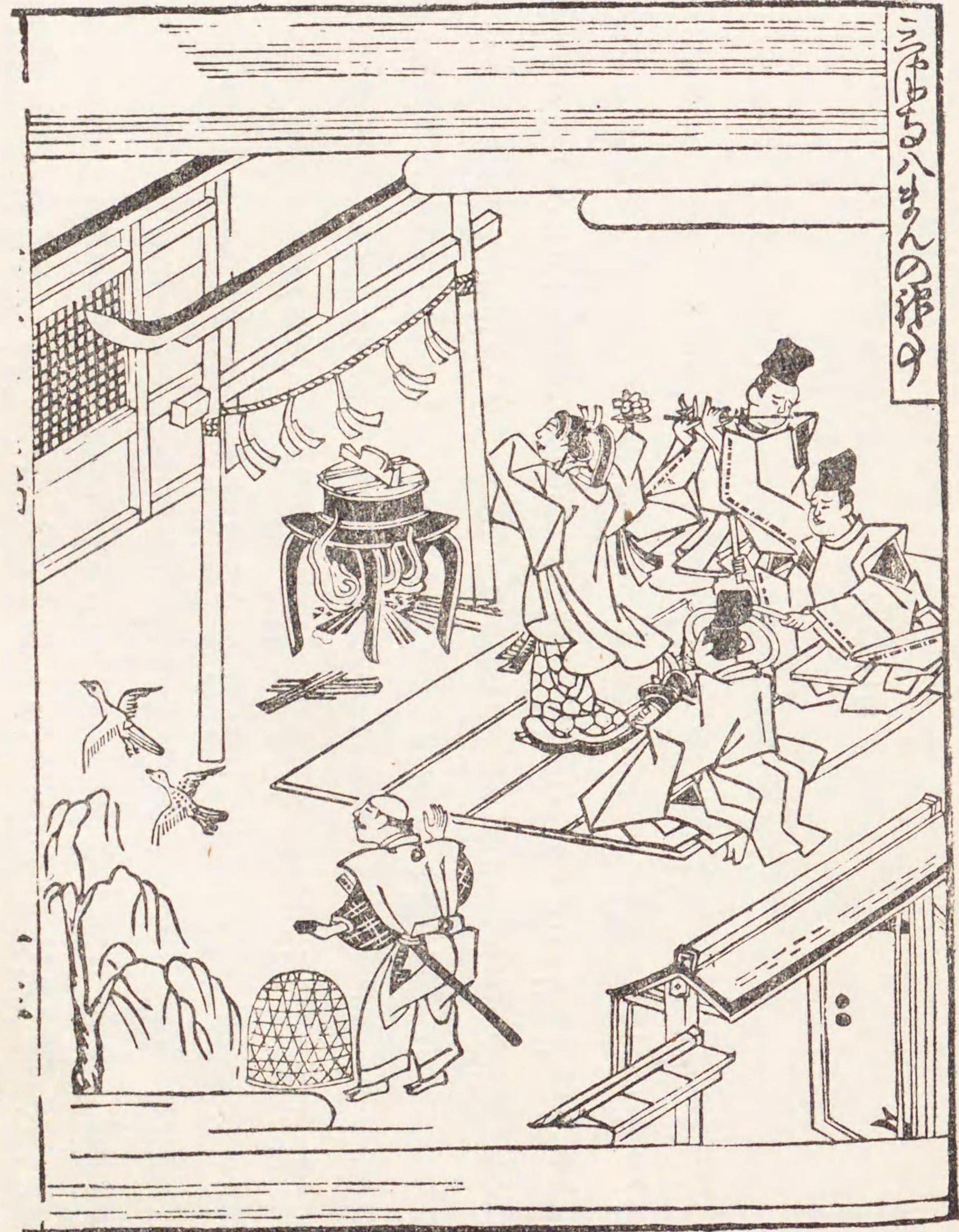
新中納言

難波堀江月見

并難波御祓

同十五日

○月の名所ハ。須磨。あかしより。はじめて。更級。娘捨。田子。都は。廣澤。ちかきハ。若吹上。諸國に。名



を得しことなれば。世々の歌人。今宵の月に。あこがれて。いろくの歌をとり出して。のこしをかれたり。こも名にしあふたる。難波堀江の月こそ餘所にてみるに。はまされと。棚無船に。暮はしらかし。辨當提重をいれさせ。曲水ならねとも。手まつさえぎる盃の波にうかべし遊宴も見所有て。おもしろく。また。琴三味線。笛。太鼓。つゝみ。鼓弓とりくのはやし物にて。船こぎいつる。物の音に。水底の魚鱗も。おどりあかるかとおもはる。かゝる遊興またくあるへきや。また世の好事の輩ハ。硯懷紙とりもたせ。堀江つたひに。傳法あるひハ一の洲のあたりまでも。櫓槓をさせて。あこがれ出。水の面に。てる月なにもあづかにて。二千里の外までも。曲なき月の面影ハ。つねにまさりて。一きはいさぎよく。心もうき立物ハ。今夜の船遊ひなりと。いひけんもおかしく。されバ。彼法師ハ。月花ハ。さのミ目にて。見る物かハといへれど。もしまた。今夜雨のふらばいかばかり。残多からめと。つぶやきけるも。實もといひて。酒のミ連歌して。ゐるまに。月西海にあづめハ。難波寺のかねもあけぬと。つけわたる。いざ。家路にかへむなんいざと。をの。船をはやめて。こぎかへるありさまハ。また興ありて。おもしろくそ侍る。されバ難波の御祓といふことハ。源氏月の秋の比。此浦里にくたり給ひしとき。名月の夜にはらひし給ふことあり是をいまに難波の御祓と申傳へり

安居天神芝原祭

同廿二日



○當社の神事を芝原祭と申て、けふり。三寸をそなへて。神慮をすゞしめまつり給ふ也。あまり人志らねり。
参詣の人もまれく也

難波鑑 第五

目録

重陽宴 并 菊着綿

生玉祭

高津祭 并 相撲

住吉相撲會 并 寶市

天王寺一乘會 并 結縁灌頂 御念佛始

神明祭 并 例幣

天皇祭

今宮祭

稻荷祭

座摩祭

天満鐺流矢馬

津村祭

住吉神送

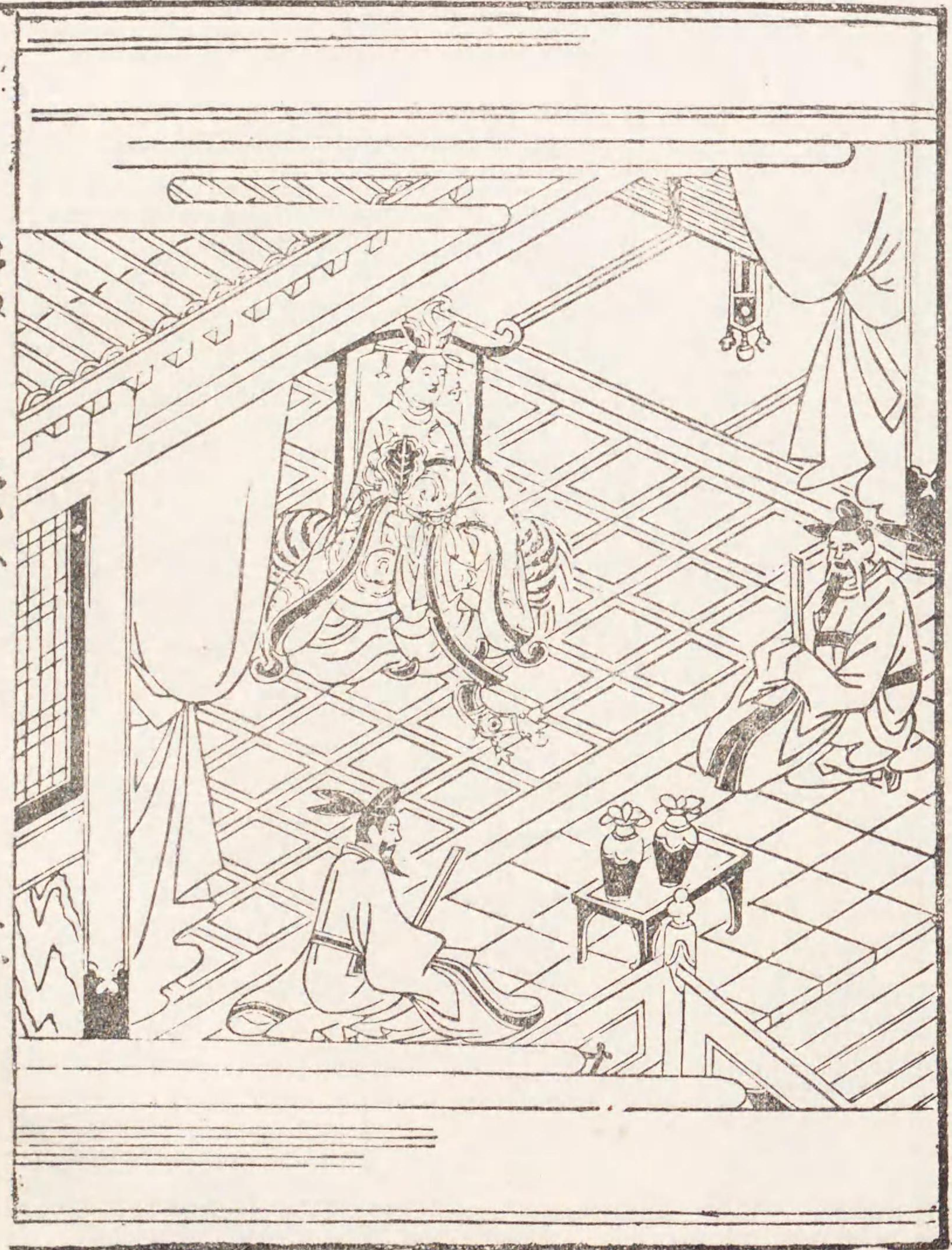
難波鑑 第五

難波鑑 第五

重陽宴 并菊着綿

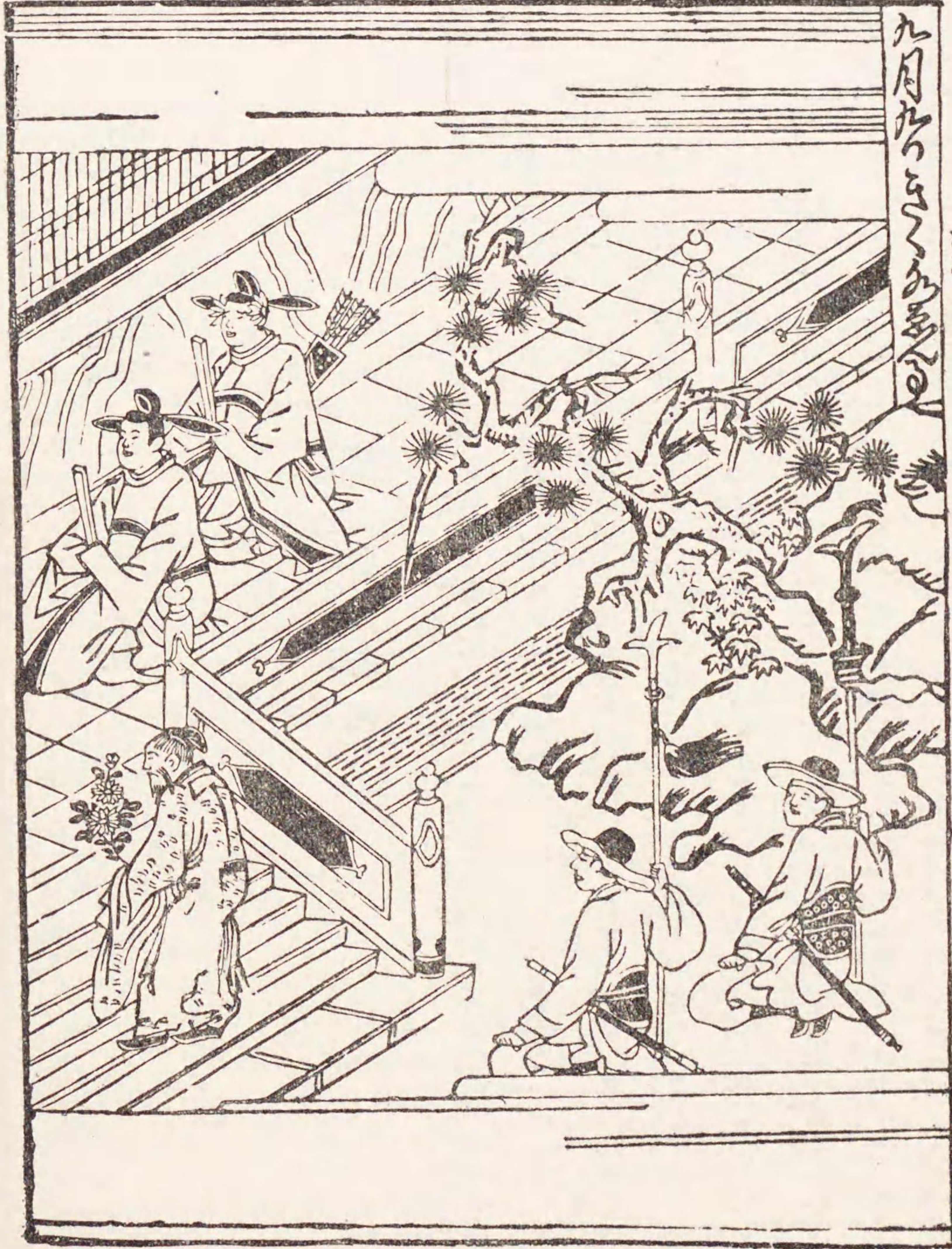
○けふハ節日にて侍れハ。禁裏にて。茱萸の壺を。御帳にかけて。羣臣に菊酒をたてまつり。菊花の宴を。おこなはるゝ也。是を重陽の宴といふ也。九月九日ハ共に。陽の數なるによりて。重陽といふ也。また菊をもちゆること。諸書に見えたり。むかし費長房といふ。仙人汝南の桓景にかりていはく。九月九日ハ。汝か家に。わざハひあるへし。茱萸の壺を。ぬいてひぢにかけ。山にのほりて。菊酒をのまハ。此災きゆへしと申れハ。其日にいたりて。をしえのごとくせしかハ。其身ハ。つゝ、かなくして。家中の雞犬羊ことくく死たり。かやうのくふ侍るによりて。けふハ。菊酒を。のむといひつたへたり。又後光明峯寺殿の御抄にハ。九月九日に。寒温二季のさかひあひあふとき。身肉にわかるゝ也。此時酒をのめハ。病を得ず。さてけふより。酒をハ。わかすといへり。寒温の二季大増大減すれハ。かならず。病のをこる也。故に。針灸灸治も。みな肉別をしてす

難
波
鑑
第五



五

難
波
鑑
第五



四



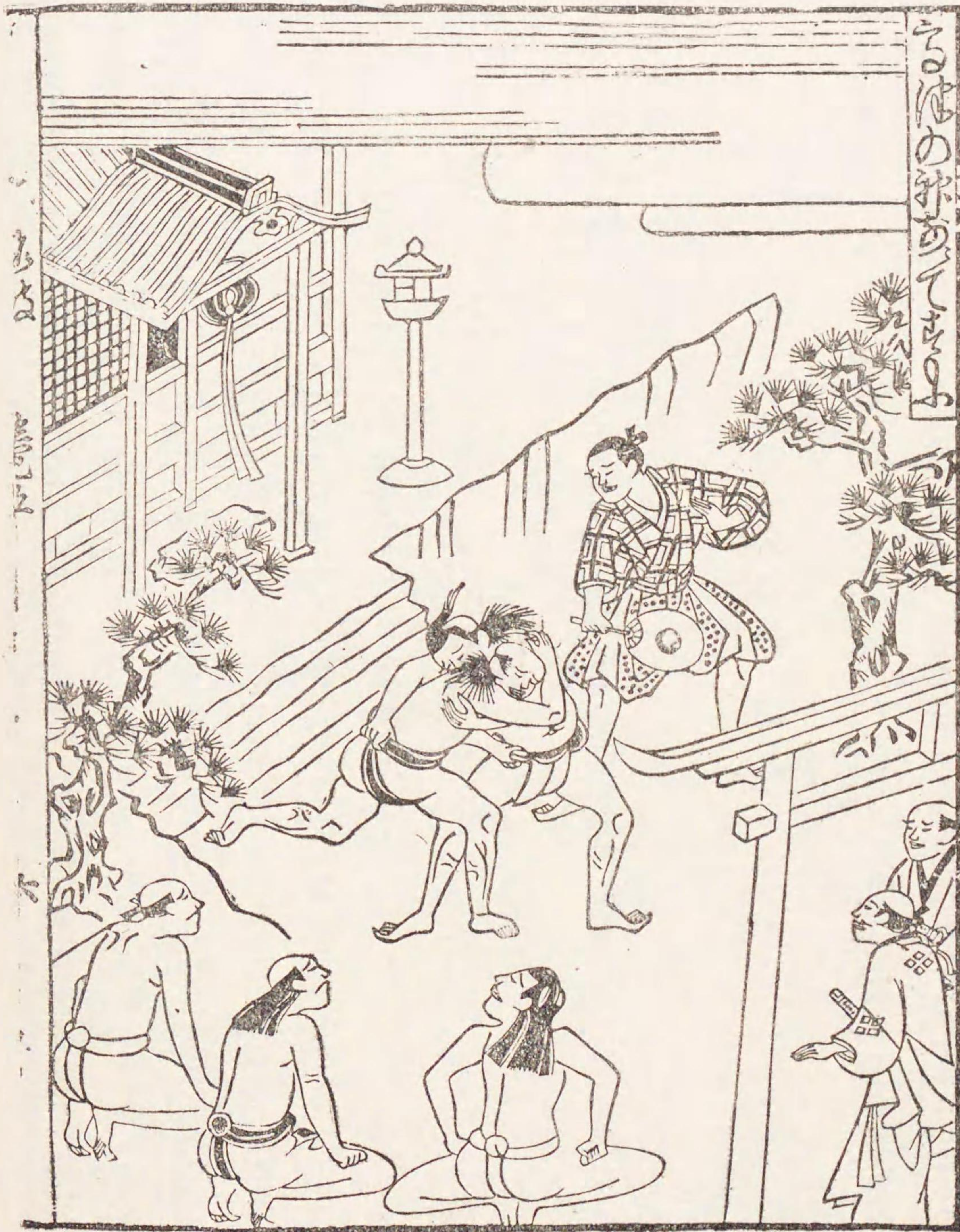
る也。また魏文帝うまれたまふ時。紫雲殿上に現して。例にも似す。はたして七歳にして。位につき給ふてけり。其時天下の壽命。十五に過ぎす。ことに。帝十五漸。近づく時歎きをふくして。あゆましめ給へす。其時穀祖といふ。仙人のらきくえんの菊を。花を折て。九月九日に。持参りて奉りければ。帝是を服したまひて。延壽七十歳を。たもち給ふよし載られたり。漢の武帝も。菊酒をのみて。長壽を得給ひしこと侍る也。また菊のきせ綿をけふとる也。是ハ。七月一日より。菊にわたをきせて。九月九日に。花をさかせて。大内へ。かさしまいらせむか爲也。此綿きすること。別にあらず。花をとくさかせんがゆへ也

生玉祭 同九日

○当社御祭禮。引馬犀鉾母衣武者など。そのかみは。ありといへとも。今ハ。神前の松原にて。やぶさめあり。御輿一社をまつり奉る也

高津祭 并相撲 同十日

○御神前にて。御湯なとまいらせ。神樂を奏しまつる也。そのかみより。氏人立寄相撲などはじめ神慮をすしめける也。抑相撲節とて。禁中にハ。七月廿五日より。廿九日まであり。是ハ。垂仁天皇七年に。はじめ給へる



と也。諸國の供御人をめして。すまふをとらさしめ給ひ。天子御覽有事也國々より。相撲人をめさせらるゝを。萬葉に相撲使とあり。主上仁壽殿に出御なり。左右の相撲人横鼻の上からきぬはかまをきてすまひをとり。勝負あり。是を内取といふ廿八日に召合といふあり。天皇南殿に。出御なる。廿九日に。拔出といふあり。その中の上手をすぐりて。御覽あるゆへに。拔出しいふよし。それ相撲のおこりなり。垂仁天皇の御時。當麻のむらに。蹶速といひて。角をもさきぬるほと。ちからつよきものあり。此よしきこしめさせられ。是につかふへき人を尋させ給ふに。出雲の國に野見の宿禰と申もの侍るよし。奏せり。則めして相撲を。御覽せられ。野見宿禰ちからまさりて。蹶速が腰をうちくじきて。踏殺し侍る。是相撲の始也

年中行事 歌合 かつ分てことりつかひのいそきしけふのぬきての水となりけり 女房

住吉相撲會 并寶市 同十三日

○むかし。當日住吉にいて相撲競馬ありとそ是ハ神功皇后三韓御退治ありし時の例をうつけけると也。今ハ中絶してこのことも。なかりき。さてまた。今日夜に入て。神前にいて。市を立舂をうりかふ是をたからの市といふ也。予おもふに住吉の地主神ハ。侍者御前とて。女體にて。ましまし是を市姫と申て。すまよしハ。日本國の市の立始なるがゆへに市のあるじとし侍れハ。是等のことによりてか。此市姫に。御子七人あり。すなハチ

住吉の氏人の



七姓を給ふて住吉の氏人となり給ふ。大領氏。板屋氏。狛氏。これらハ。今の津守氏の先祖也。そのほか。津氏。大宅氏。神奴氏。高木氏など、てあり。いづれも神とあがめ。七所に。鎮座なり給ふ尋へし。

天王寺一乗會

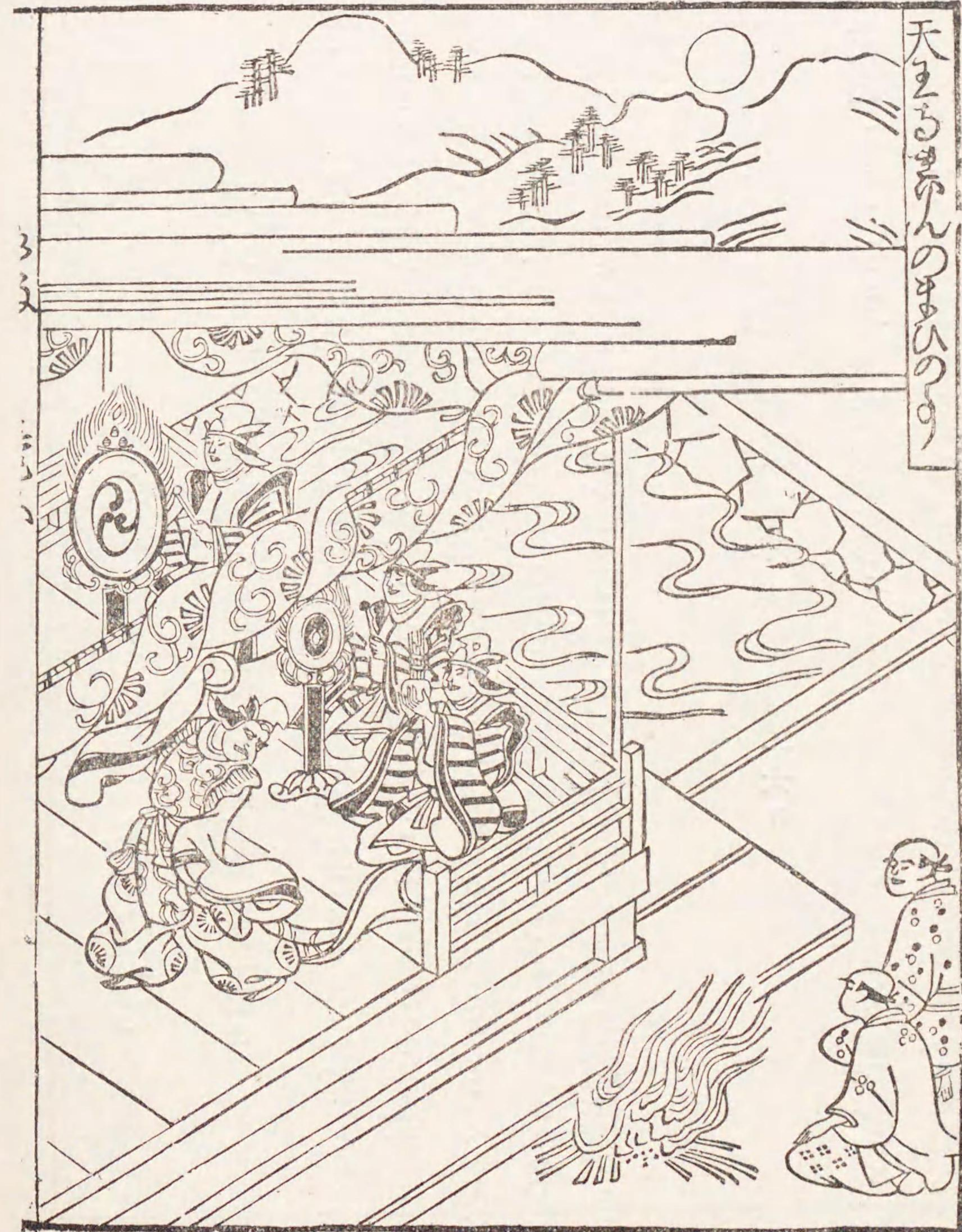
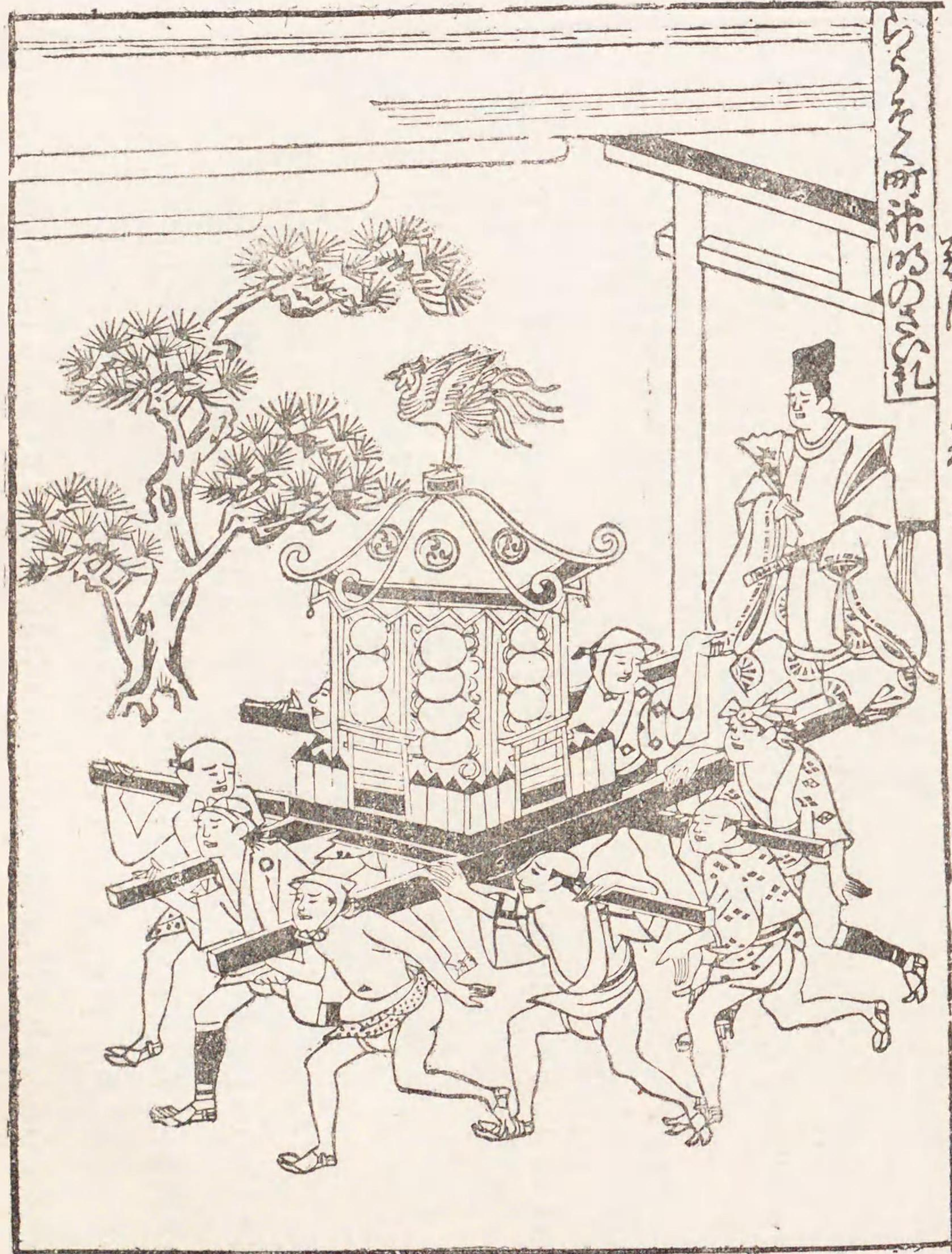
并結緣灌頂御念佛始 同十四日

○當日夜に入て。一乗會をとりおこなひ給ふ。そのぎしきハ。涅槃會聖靈會におなしく。御輿などふり出。伶人の舞あり。まことに木の間をもちくる月影ハ。舞臺にうつり。物の榮ある粧こそ。たうとく殊勝なれ。萬のもの、きらかさり色ふしも。夜のミこそめでたけれ夜はきららかに。花やかなる装束いとよしといへる人をおもひ出。人のけしきも。夜のほかけそよきハよく。物いひたるにほひも。物のねもた、よるぞひときハめてたけれ。むかしハ。又此月の廿日ことに。結緣灌頂をとりおこなはる、と。舊記に見へたり。猶御念佛始など、いふこともあり尋へし。

神明

祭 并例幣 同十六日

○是ハ。蠟燭町に。た、せたまふ。一社天照太神宮にて。わたらせ給ふがゆへ。當日を。御祭禮とし。氏人御湯神樂を奏し。神慮をすじしめ給ふ也。されバ。當日禁中にも。例幣といふことあり。是ハ伊勢大神宮へ。御幣を



たてまつらせ給ふ義也。としこの義なれば。例幣とハ申と也このこと朱雀院の御時より。はじめらる。當月一日より。今日にいたるまで。僧尼重輕服の人御門に在ることならず。大神事なれハ也。神風の伊勢の國に。御鎮座あることは。垂仁天皇二十五年三月に。倭姫命をしへによつて。五十鈴川上に。神宮を立。外宮は。内宮鎮座の後四百八十四年をへて。雄略天皇の御宇にあとを。たれさせたまふ。養老五年九月十一日にはじめて。官幣を。たてまつりたまへるなり。いまに。神祇官にて。これをおこなはせたまふなり

天皇祭 同十六日

○此天皇は。難波村のうぢ神也。當日を御祭禮として。御湯をささげ。神樂を奏して。是をまつりたてまつる

今宮祭 同十八日

○當社のまつりは。今日也。天王寺より僧侶きたりて。拜殿に在いて。法事をなし。すなはち天王寺の伶人舞學を奏し。神慮を。すしめたてまつり。そのうち。神輿一社を。ふり出。天王寺の西門まで。遷幸したてまつれば。聖德太子の御輿出むかへせたまひて。その議式あること也





稻荷祭 同廿一日

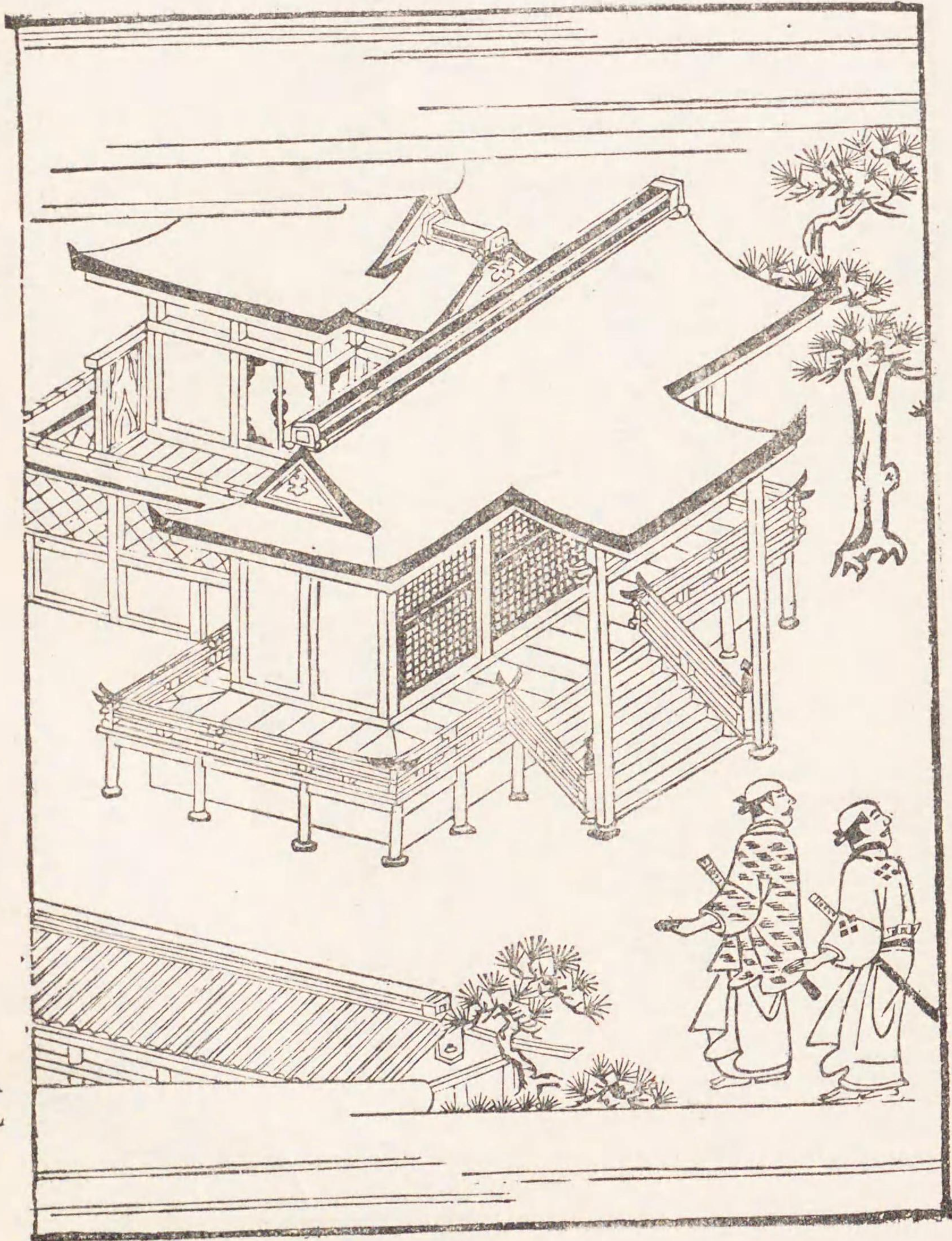
○当社へ。仁徳天皇の御廟也。むかしは。七堂伽藍の地にて。さしもはなやかに。宮殿玉をたれ。瑠璃を鏝といへとも。たびぐの回祿にかゝり。今へ。わづかの宮井にて。物ふりにたるけしき。玉かきまばらにありしを。此とし本社を再興ありて。神の威光をかゝやかしたまふ。まつりへ。當日也。そのかみは。男舞として。かみ難波より。いろくねり物をわたし。俗人の舞など。ありしがとも。いつのころよりか。このこともやみ侍るとそ

座摩祭 同廿二日

○當日を。御神事として。十二灯の隙なく。神樂を奏し。氏人の参詣おびた。しくそ侍る

天満鋪流矢馬 同廿五日

○此日天神の御神事也。則やふさめあり。是へ天満天神の門の前に。茶屋あり。茶屋のあるじの式として。としこと是をつとむ。まづ七日以前より。拜殿にあらこもをまきて。通夜いたし。精進潔齋して。其日にいたれば。あたらしきなをしはかまに。袖くゝりあかき鉢巻して。かさりたる馬にのり。ゆみとかふらやを。左右の手にと



り。社壇をのりめぐること三度それより。逸散をかけいだし。宮の前濱手九町を三反のりかへすあいたに。六所に角のまをを立て。是を射る也。手綱をもとらず。手をはなちて。弓るる間。逸足かくる馬を。つるに落さるとハ。此天神の御はからひといたうとし

津村祭 同廿七日

○津村の宮にまふで。神樂まいらするばかり御輿へまつらす。居祭にて。過る也。されども。氏子をのく。夜宮まいりのためとて。ちやうちんなどほして。まつり奉る事。いとにきやかに社内もか、やくばかり也

住吉神送 同晦日

○今日暮かたより。四社明神の御輿を。北の拜殿にふりいたし。神主一族禰宜已下をのく出仕して。おこなひありて。出雲への神をくりのつとをあげ給ふ義式殊勝にそ見え侍る。また十月晦日に。神かへりの式此日におなしきと也

難波鑑第六

目録

孟冬旬 并無神月

殘菊宴

十夜始

日蓮御名講

惠比須祭

豕子

東西本願寺御佛事 并東山

御火焼 并内侍所御神樂

天王寺道祖祭

納庚申

神宮寺佛名

追儼 并節分大豆鬮首大戟さす事 附白朮焼事

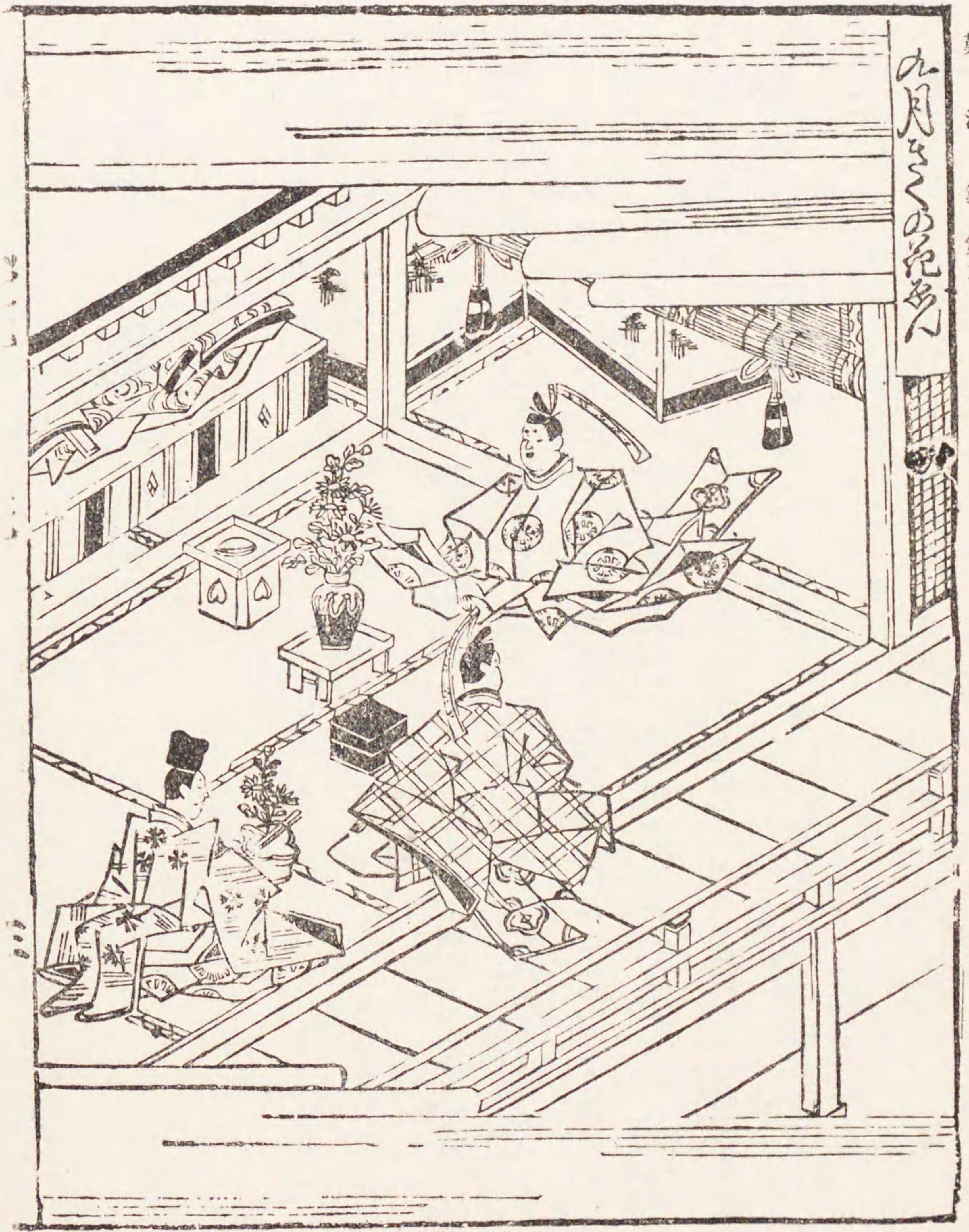
難波鑑第六

孟冬旬并無神月

○十月一日ハ。先御衣がへあり。掃部寮。夏の御齋束を撤して。冬のにあらため給ふ。天皇南殿に。出御ありて。節會あり。是を孟冬の旬とハ申也。二獸の後水魚を。羣臣にたまふとかや。また此月を。かみなづきといふこと。説々不同にして。一決しがたし。ある説に伊弉册尊。崩御し給ふ月なればいふとにや。また四方の木末ちりさむ比なりとて。葉みな月といふ人有。また諸神出雲の大社へくだり給へハ。いふとにや。一日素戔嗚の尊常に軍を發して。天照太神をうちたてまつらむとし給ふにより。太神素戔嗚をすかさしめんが爲汝我が子となりたらバ。一年に十月を譲り。出雲石見の兩國を。あたへんと宣ひしによりて。十月にハ。諸神出雲に行て。つかへたてまつると也。此ころを

出雲には神在月をいか、して神無月とや四方にいふらむ

經 信



九月の残菊

残菊宴 同五日

○菊花のえんへ。九月九日にて。また残菊の宴として。十月五日に。おこなはせ給へると也。是も羣臣詩をつくり。酒をたまふこと。重陽に。ひとしきよし

十夜始 同七日

○今日より。十五日まで。寺町の浄土宗の諸寺にをいて。談義念佛等あり。されば。無量壽經に。千日十夜の語あり。これにもとづきけると也。また鼓音聲經にも。本文ありとそ。

日蓮御名講 同十三日

○惣じて大坂のうちに。日蓮一派の寺々。六十四ヶ寺あり。此寺に。盛物。花香。灯明。讀經。談義などありて。まいりの人多し

夷祭 同廿日



○是其所とさだめたる社なし。夷三郎殿ハ。商人をまもらせ給ふ。御神とて。上下の諸商人面々の家に。して。内祭す。夷棚ある家にハ。色々の御供を備ふ。

亥の子 亥の日

○十月亥の日。餅を食すれば。病なしといふ。されども此こといつのころよりはじまるとも見えず。延喜式にも。侍れば。往古より。あることならし。今日内蔵寮より。餅をそなへたてまつる朝餉にて。きこしめしたまふ。また此餅を。おけんでうとて。人々にわちたまへる也。またいのこの説ある書に。猪ハよくあまたの子を。うむなり。さるによりて。女人是をうらやみ。亥の月。亥の日にあたるゆへ。餅をいはふと也。亥はとしこと。十二の子をうむ。一年十二ヶ月をかたどる。また閏年には。十三子をうむと也

東西本願寺御佛事 并東山 同廿八日

○としごと。十月兩本願寺の御門跡。大坂の御堂に來臨ありて。開山親鸞聖人の御佛事を取りおこなひ給ふ。其うち。東の御門跡ハ。隔年にくたらせたまふ。廿二日より。廿八日まで。一七日のあいだ近里遠村よりも。老若男女參詣して。御堂の内は。所せくまでおし合。法談を。聴聞して。觀喜のなみだをながしよろこぶ。一文不智



のともがら。他力の本願をたのみ。行住座臥に。彌陀の御名を唱往生すへしとのすゝめの程も。たうとし。また東山佛光寺の御門主も隔年に。くだらせ是も一流の他力眞實の信心をはけきたし佛恩報謝のためには。稱名念佛をとなへ申せとの。おほせのほともありかたし。あなかしこく

御火焼并内侍所御神樂

○大坂所々の宮社にをいて。當月。神火を。たきてたてまつる。是を御火焼とて。氏人ともあつまりたてまつる。其社々

高津宮	八日	玉造稻荷	八日	新御靈	十日
生玉明神	十二日	稻荷明神	十三日	三津寺八幡	十三日
座摩明神	十六日	朝日宮	十六日	同聚樂町神明	
神明燭燭町	十六日	天満天神	十八日		

さてまた神樂とて。諸神の前にて。冬かならずし侍ること。是等をはじめとやいふべからん。抑神樂といふは。天照太神の岩戸をさして。こもり給ひし時。諸神の祈申されけるに。御目命まさきのかづらをかざしとし。ひかゆを。手すきにして。うたひまひ。庭火をたきしか。天照太神の岩戸を出給ひしより。諸神此ことこのミ給

ふ。今も内侍所にて。行はる。御神樂の事にて侍る也。是ハ一條院の御時よりはしまる也。まことに神樂こそ。なまめかしくおもしろけれといへるも。實とおもひ出られ。其人もなつかし。

天王寺道祖祭 同十六日

○此日ハ。天王寺の村里の辻々に。わらへべとも。集居て。塞の神をまつるとて。行還の人々に。錢をこる出ざれば。此所を通さずして。剩其人にとりつき。難儀させしとかや。是を道祖祭といふ。是道祖ハ。道の神まつりにや。今も此ことをまつりたる人ハ。此日ハ。こゝに來らす

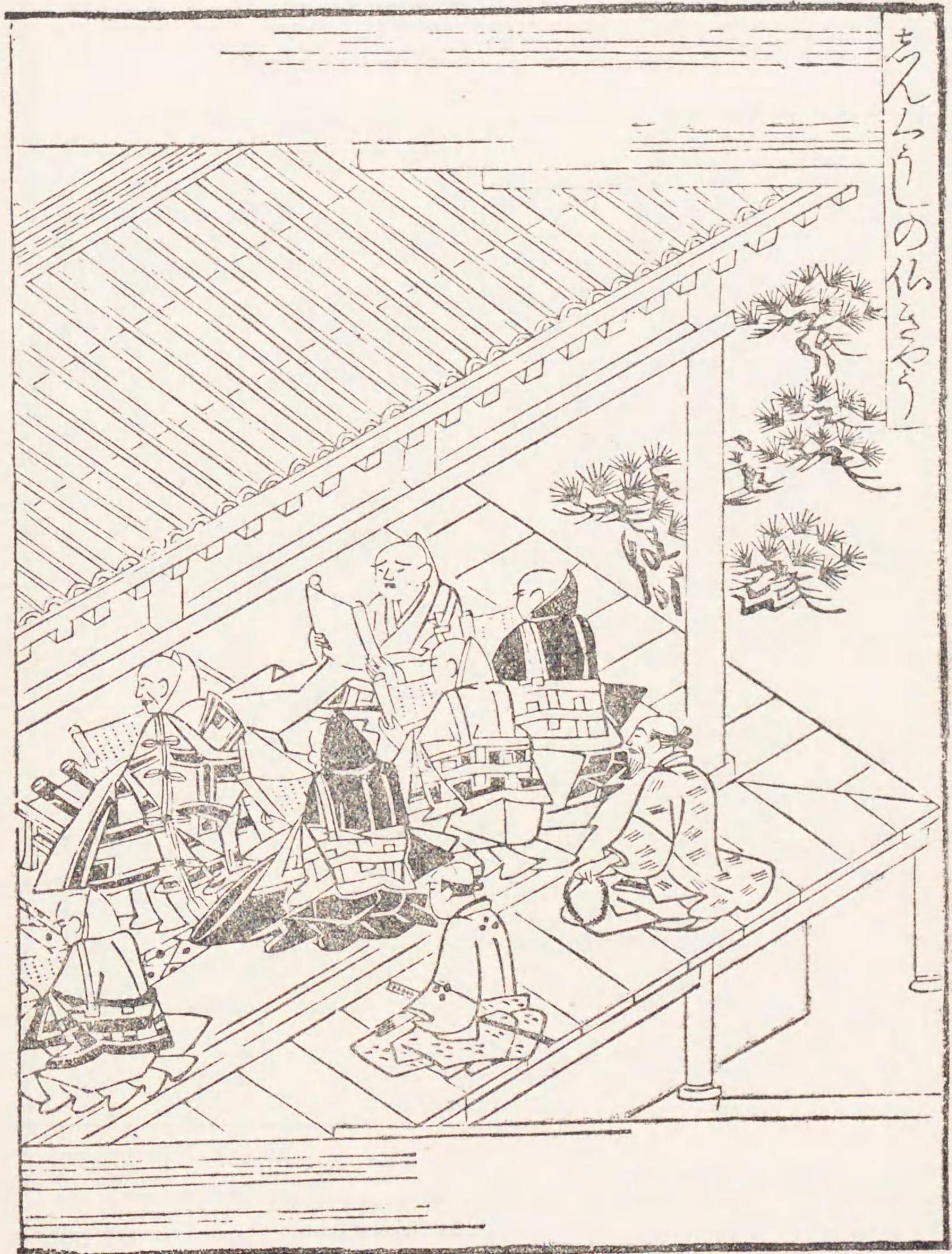
納庚申かのえさるの日

○天王寺の庚申ハ。諸國の本寺也。一とせのうちに。六度づ。潤あるとしハ。七庚申あり。なにても。所願ある人。一色をハ。かなへ給ふとて。參詣の人々初庚申よりも。願成就いはるおさめの庚申まふでよと。羣集して。十二燈々々々とよべる聲も。喧く。七いろの菓子々々とするこゑもいそがし。さてまた。今日夜をねざることハ。三戸天にあがりて。人の善惡を告によりて。夜をまもりて。ね侍らぬとかや。

年中行事 歌合

貞世





年中行事
歌合

出やらてなをそやすらふかのえさる蘆分を船こきやかぬらん

爲郡朝臣

神宮寺佛名

同十九日

○當寺にをいて。むかしより三千佛名經を。誦し給ふとかや。是則住吉明神の御法樂の爲に。とりおこなはるゝと也。されハ。禁中の御佛名ハ。十二月十九日より。廿一日まで。三ケ日也。あるひハ。一夜も例あり。此佛名といふハ。三世諸佛の名號をとなへて六根のつミを滅する心也。まことに佛名經に。とかるゝ所の功德はかりなきにや。寶龜五年。十二月より。はじめ。承和のころハ。としごと。佛名三ケ日の間諸國にて。殺生禁斷のよし格に見へたり。また釋の靜安と申せしハ。比良の山にて。十二佛名經をよみて。禮拜修懺し給ふ。其聲帝闕にきこえ。諸國のあいたにも。きくものあり。是によつて。勅して。僧官をたまはりけると也。くわしくハ。元亨釋書に見へたり。

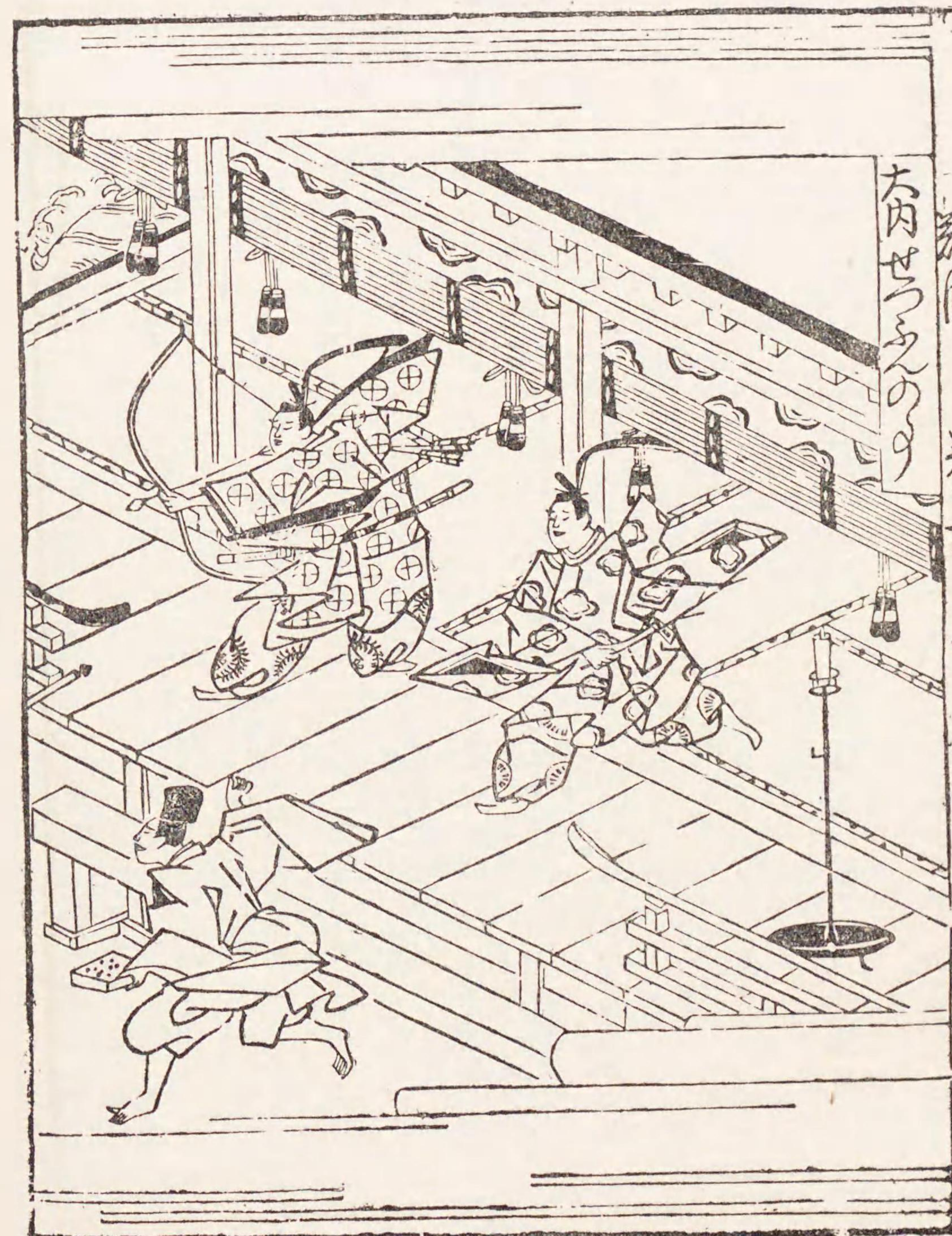
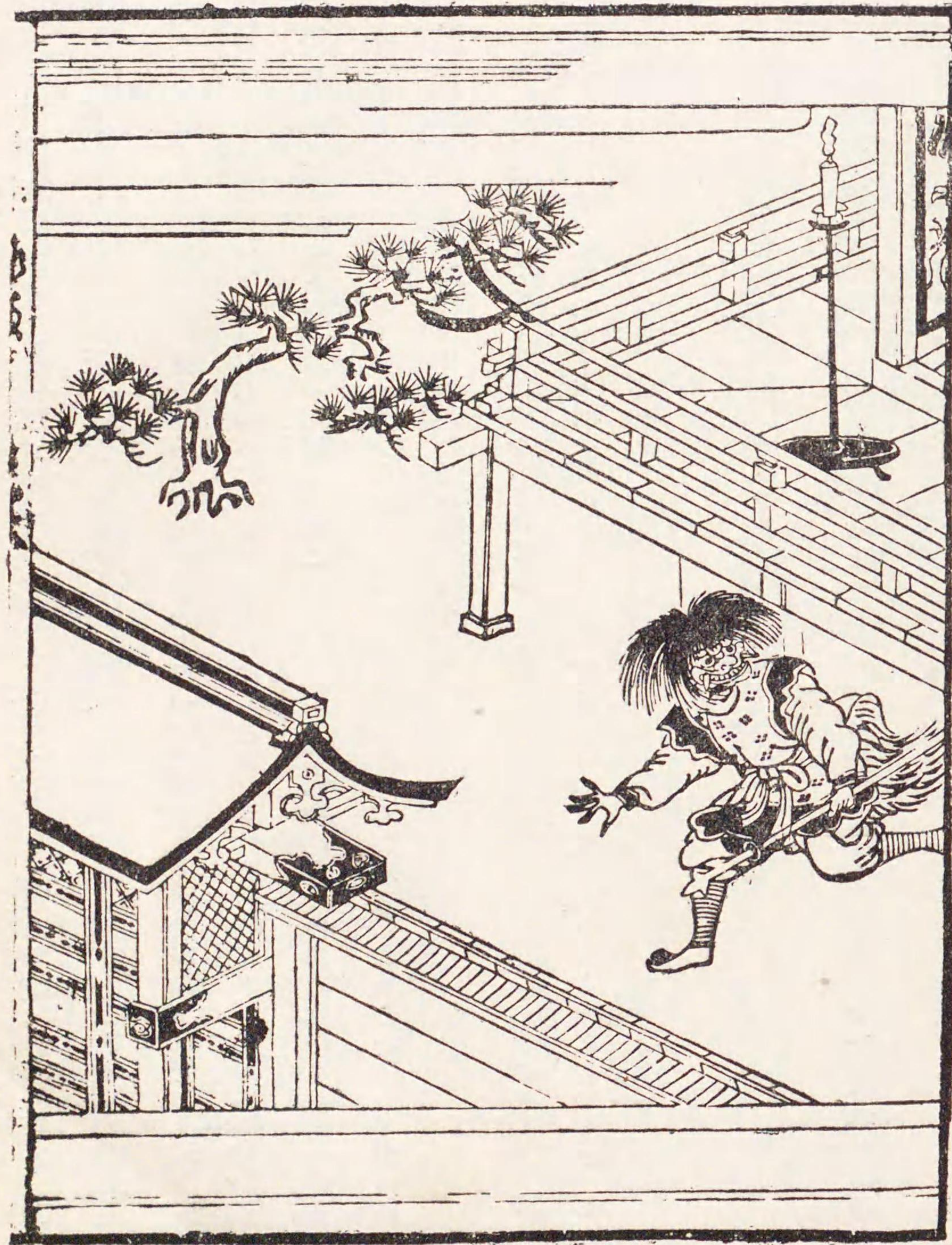
六百番 河竹のなひく葉風にとしくれて三世の佛の御名をきくかな 定 家

追

讎

并節分大豆鰯首大載さす事 晦日

○禁中にハ。十二月晦日に行ハる。今日ハなやらふ夜なれば。惡鬼の夜行するゆへに。陰陽寮さいもんをよみて



上卿以下是をおふ。御所にともし火を多ともして。四目ありて。おそろしけなる。面をきて。手にたてほこをもて。内裏の四門をまへる也。また殿上人ども。御殿のかたに立て。桃の弓よもきの矢にて。いはらふ。これらをかたとりて。節分にまめうちて。鬼をはらふ事はじまれるにや。此内裏にて。鬼を、はれしことハ。慶雲二年十月百性多く。疫癘になやまされしゆへに。はじめられけると也。また鞍馬のおく僧正が谷御菩薩池の邊に。方丈の穴あり。藍婆惣王とて。二頭の鬼出て。都にいるべきよし。毗沙門のつけありしをくらまの別當宇多の帝に。奏しけれハ。法家に仰られて四十九家の物をとりて方丈の穴を封じ三石三斗のまめをいりて鬼の目をうちしよし。あるせし書あり。十二月晦日の夜の鬼を射恒のうたに

鬼すらも都のうちとミのかさをぬきてや今夜人にミゆらん

今の世に節分の夜いはしのかしら。大戦を軒にさすこと。聞鼻といふ。鬼の人を。くハんとするを。ふせく術なりといへり

附白朮燒事

同晦日

○おなしく此夜白朮をたくことハ。白朮ハ風氣をさる薬にて侍るゆへ。羣薰あしきがゆへに。疫癘の神の夜行する夜なれば。是をたきて。をそれしめむが爲にて。侍ると也

一 新道治先生いしを志家のまの
 墨ありき〜我住方南紀海北園
 玉浦くまもあはれ都波津子嘆けたの
 白ひのなる〜く為身あてまおが
 らひ侍りの〜ろれり〜やあ換する
 又何あてらん侍り〜まの系れし〜
 ちあとのまを〜あつ〜をいす
 白居のりよ〜あけ〜難波のり

中行よりせしむる元来家箱を
 和歌の長入の家をくく玉は清浄代
 名事とくくくくくく我籍の編年
 涌てくるくくくくくく城守の如き
 を解をたすくくくくくく多傳きんもの
 集りて加さくくくくくく徳元是亭
 ちくくくくくくくくくくくく業くくく
 為くくくくくくくくくくくくくくく

辞一始をきくくくくくくくくくく
 婦人の子の歌いものくくくくくく
 菊畔の揺れはくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくく

延寶八申月日

南陽山人自菴斎

大坂本町五丁目自衛堂筋角

小濱屋七島兵衛板

同景

近江屋次郎右衛門

難波十二景

解題

一 『難波十二景』は、山本洞雲の著。延寶四年丙辰（我が二三三六
西曆一六七六）の開板。稀観本として讀書子の話頭に上る珍書です。本叢書刊行會では、夙に此の書が京都の富岡家に祕藏されてゐることを聞いてゐましたので、曩に本會顧問新村出博士を煩はして同家の快諾を得、本冊の中に収録すること、なつたのです。殊に巻頭の第一丁には、故鐵齋畫伯が愛用の鐵老齋と刻した藏印のある此の珍書を、僅々數頁のうちに活字として組み上げることは、いかにも不本意と考へられ、かつは本會の旨趣として、成るべく原本の面影を傳へたい希望の下に、全部を凸版とすることにし、その製版にも及ぶかぎりの注意を拂ひました。

一 原本は天地八寸八分、左右六寸の大本です。されば、これを全文凸版に取るに際し、原本の寸法のまゝにては、菊判一頁の中に、その半丁を收容することが出来ません。やむなく十分の六の大きさに縮め、力めて原本の味ひを保存することに留意いたしました。

一 著者山本洞雲は、京都の人。夙に文筆に親しみ、二十餘歳にして『洛陽名所集』の著があり、後、浪速に來りて、家塾を開き、諸生に教授してゐました。延寶四年、この『難波十二景』を著は

した時は、四十一二歳の頃でした。その『十二景』の卷末に、『予客此地亦年——』と書いてあるのを見ますと、少くも三十餘歳で浪速に來り住んだものと思はれます。そして教授の餘暇には杖を近郊にも曳き、興到れば吟咏みづから樂しんだものでせう。延寶四年といへば、新町の廓に、夕霧が全盛を唄はれてゐた頃です。その時代の大坂を、暇ある毎に、そこ、こゝと、そゞろあるいた著者は、いつのほどにか浪速に於ける十二景を選び、これに七律一首づゝを添へ、一つ一つその詩の解を、みづから試みたのが、この『難波十二景』であります。

難波十二景

波橋晚景

浪浸長橋二百弓 春陰未霽是何虹

金城卷雨吞斜日 碧殿穿雲絕太空

千店閭闔撲地列 一條周道到京通

年々眺望思無盡 南國魚塩歷洛中

難波橋ノ上ニテ晚方ニ四方ノ躰ヲ見ルコトヲ詠ス○一二ノ句
 コノ橋ノ長ヲダケニ百ハカリモ有ラン浪ニヒタレテ橋リタ
 ルハ虹ノ如ニ見ル虹ノ雨ノ晴レタル時ニ出ヘキニ陰リタル空
 ニ出タルハ是ハイカナル虹ヲト也此兩句ハ橋ヲホム阿房宮
 賦云後道行以空不覺何虹○三四ノ句此橋ヨリミレハ金

鉄ヲ入ベタル如ナル城フル雨ヲ卷ハラスヤウニテ夕日ノ指入
 タルハ其辨目ヲ吞タルヤウニ見ユ又碧殿ノ高キ一片ノ
 雲ヲ穿テ天ヨリ鈎タル如ニ見ニ繼トハ繩ニ取付テサ
 ガルヲ云尤傳ニ繼而出ト書リ此兩句ハ城墉ノ堅固ナ
 ルヲ云○五六ノ句市町ヲ見渡セハ千万ノ家尺寸ノ地
 ヲモアニサス作り連タリ街ハミセダナトヨム閭閻ハ
 人ノ住処ヲ云文選ニ閭閻トアリ滕主閣序ニ云閭閻
 撲地又一筋ノ大路是ヨリ京ニテ通レテ貴賤皆此路ヲ
 行更ニニガイナレ一條ハ一筋ト云義也此兩句ハ市町ノ
 ニギワイ天下ニ統ニメ政道正シク遠乱ナキヲ云リ○七
 ハノ句年比此難波ニ住レテ此橋ノ上ニ來テミルニ見
 テモクアカ又此國ノ繁昌ハ洛中ニモニサランカト也
 魚塩ハ万ノ商買ノ一屬トハニサルコト也古人ノ梅ノ
 詩ニ清香麗蘭麝○此詩賦ナリ賦ノ躰ハ見タル処
 ヲアリノト何ノ子細モナク作り出ヲヨシトス殘ル
 十一首モ皆賦也○此詩第五ノ句撲地列ノ三字下
 三連ナレハ是律詩ノ一躰也杜少陵ノ七言律詩ニ

見タリ先輩此格ヲ用ラル

堂島飛雨

滿江飛雨晝朦朧

山墉人煙万景収

休釣飯來數點艇

洗翎增擊下双鷗

坐中藥氣消炎熱

村外清流報甯秋

日暮朦朧看不見

忽從漁火認汀洲

堂島ノ雨中ノ景ヲ詠スル也○一ニノ句此堂島ノ江村
 下面ニ雨フリ來テ晝ナレドモツク口ニ成レホトニ山
 モ里モ煙モ皆カクレテ万ノ風景見又ナリ朦朧ハ風
 雨ノ負此兩句ハ雨ノフリ出ル躰ヲ云リ○三四ノ句
 雨フルホドニ釣スル舟ドモ皆釣ヲヤメテ歸ル又川
 三浮タル鷗ノ飛アガテユクハ雨ニテ翎ヲ洗ナリ

原賦に云増撃而去○五六ノ句坐中モ雨ニテ炎熱ヲ忘タリ寒氣ハサハヤカナル氣ナリ又村外ニ流ル川ハハヤ秋ヲ知スル也肅秋ハヤ、サムキ秋ヲ云報トハ知スルコト也○七八ノ句トカクスルホトニ日モクレヌ弥クラク茂テ今ニテ見タル舟モ鴨モ川ノ流モ皆ウセテ何ノ分モ見ヘスニツクロニナリニ処ニ忽ニ瀨リ火見タリサテハアノ火ノアタリ汀洲ニテ有ヨト思ハカリ也認トハウレナハ又義ナリ

長柄春陂

漠漠長堤淡淡天

麥農語泰與留連

刃鞋踏破滿蹊綠

孤帆中分兩岸煙

野憤相依眠織草

春禽戲集浴清川

衰遲幸遇康歌日 一醉何妨落照前

長柄川ノ陂ニテ春遊スルヲ詠ス○一ニノ句漠々ト長クツギキタル堤ノ上へ出レハ寒クモナク熱クモナキ淡淡々タル春ノ天氣ナリ麦ヲ作ル農人モ此堤ヲ通ル共ニ打ツレテユク此者カ云ケル今年ハ世モユタカニシテ麦モヨク出來タリ妻子ヲモ心安ク養フヘカンメトナト物語スル聞ツ、行ホトニアツコ爰ニ立ヤスラフナリ留連ハ立ヤスラフコト也○三四ノ句此堤ノ蹊ヲ行ホトニ春草ノ緑ヲシレゲモナク踏ヤブル也又此川ニ煙ノ立コメテアル其ニ中ヲ帆カケ舟ノ通ルニテ煙ヲ兩ノ岸ヘニツニ分タル也此兩句ハ遊賢ノ躰ヲ云○五六ノ句此堤ニ野飼スル犢ハ一処ニ集テ聚ナル草ノ上ニ卧テ居也又春ノ禽ハタハフレ集テ此清干川水ニ浴スル也織草ハ草ノ柔ニシテ織モノ、如クウツクニキフ云ツ廬全ノ詩ニ陽陂草軟厚如織ト作レリ此兩句ハ此

処ニスム鳥歎モ其処ヲ得タルノドカナル躰ヲ云〇七
八ノ句ヤウク年老タル比カ、ル太平ノ御代ニ逢タ
ルコソ幸ナレト堤ノ上ニ打ヒロゴリテ竹筒取出シ
酒ノミ一醉シテ日ノ暮ヲモ忘レテ遊ブ何カ若シカルハ
キ道ニサヘ背スニハ遊バイテハ康歌ト云ハ昔堯ノ天
下ヲ治玉シ時天下ノ治リタル躰ヲ知シメサントテ
ヒツカニ康衢ニ出テ聞王レニ童トモノ歌ニ立我カ烝
民莫匪爾極不識不知順帝ノ之則トウタヘリ又一
人ノ老人ノ歌ニ日出而作日入而息鑿井而飲耕田
而食帝カ何有於我哉トウタヘリ是ニヨリテ天下
ノ太平ナルヲ康歌ノ目ト云也衰運八年ノ老タルヲ云

淀川長流

逝者如斯一逝川 碧琉璃色洗青天
岸横南北百餘里 流澗西東幾万年

鯨游鱗衝浪躍

輕輕泛鳥傍隈眠

世波更逐風波嶮

多少征帆袒狄鞭

淀川ノ水ノ流ヲ詠スル也〇一二ノ句此川ハ昔ヨリ今ニ至
ニテ流テ舍ラズ論語曰逝者如斯夫不舍晝夜上ノ
逝者ノ字ハヒロク指テ云下ノ逝川ノ字ハ川ヲ指
テ云リ字ハ同ケレ心別ナリサテ此川ノ水清シテ
碧琉璃ノ如ナルが青天ノ色ト一ツニ成テ天ヲ洗フ如
ナリ于謙ノ詩ニ碧琉璃滑淨無塵ト作レリ此兩句ハ
川ノ躰ヲホム〇三四ノ句此川ノ岸ハ南北横ハリテ
百里ハカリモヤ有ラン又此川ノ流ハ西國東國ノ通
路ヲナレ國ヲウルラスコト昔ヨリ九万年ト云コト
モ知ヌ也此兩句ハ此川國ノ用ナルコトヲ云ナリ〇五六
ノ句此川ニスム魚ハ浪ヲツイテ躍リアカル鱗々ハ魚
ノ尾ヒレヲフツテハタラク貞詩經云鱣鮪鱣六又
此川ニアル鳥ハ水ノ隈ニツフテカルト波ニ浮テ眠

ル也隈ハ水ノヨドニ也此兩句ハ川ニスム魚鳥モ其処ヲ得タルヲ云○七八ノ句此川ヲイクラトモ知ヌ舟我サキニト京へ上ルヲミレハ中々世ヲ渡ル波風ハ川ノ波風ヨリ嶮シ世ノ中ハ安クハ渡ラレヌト也太平ノ世ニ居テ嶮ヲ忘レヌハ君子ノ心也祖狄鞭ト云ハ晋ノ劉琨ト祖狄ト常ニ武勇ヲ争テ互ニ先ヲカケントハケム劉琨カ云ケル我松戈待且只恐祖狄先我著鞭是ヨリレテ何ゴトニテモ我ヲトラント先ヲ争フ相狄鞭ト云古人未開ノ梅ノ詩ニ到春不弄祖生鞭作

駒嶠晴雪

何處空山戰王龍

飛鱗轉盡夕陽春

風搖縞練三千丈

日照瑤華幾万重

無數林梢認銀樹

許多在壑委花峯

凜然一望寒於水

特地唯疑在月中

生駒山ノ雪ノ晴タル景ヲ詠ス嶠ハ山也○一二ノ句イツクトモ知ヌ山ノ上ニテ玉竜ノ戰ヨト見テ竜ノ鱗ヒタモノ飛ラツル見ウチニハヤ鱗モ飛ツクニツ雲モハレテ入日ヲツル也雪ヲ玉竜ノ鱗ニタトヘ雪ノフリヤムヲ鱗ノ轉シ盡スト云ナセリ張元ノ雪ノ詩ニ戰罷玉竜ニ百方敗殘鱗甲滿天飛ト作レリ生駒山ノ雪ナレトモ何レノ処ノ山フト云ルハ作者ノ意ナリ一ノ句ニ雪ノフル射ヲ云カケテ二ノ句ニ其ニ雪ノ晴タル射ヲ云開合叶リ夕陽春トハ米ヲウスツク杵ノ下ル如ク日ノ落ヲ云○三四ノ句サテ雪モハレツ此山ヲミレハ其高ニ千丈ハカリモ有ラシテ白練ヲ以包メルヤウニ見ルヲ風吹テ山モウコクヤウニアレ也縞練ハ白キ子リキス也文選雪ノ賦云万頃同縞又夕日ノ此雪ヲ照ラシハ兎万重トモシラス降ツミタル瑤ノ華ヲカヤカス也瑤華ハ雪ノコト也

古人ノ詩ニ折以代瑤華○五六ノ句數モシラ又林ノ梢ハ惚テ銀樹トナリイクラトモ十キ丘壑ハコトクク花サキタル峯トナル也秦韜主ノ詩ニ銀樹長關六出花○七八ノ句此雪ノ後ノ景ヲ詠レハ凜然トメ身ノ毛モ立ホト寒キ也サムサハサムシ何クモニツシロニハアリ晝ナレトモ其二、月夜カトウタカハル、也特地ハ即今ト云義也

剛岳朝霞

紫紫煌煌斷又連

非雲非霧也非煙

一行紅綺晒風畔

千丈金光泛白邊

靄与公羊流筆底

飛齊孤鷺落簾前

須史变化都無跡

猶見餘暉映遠川

金剛山ノ朝ノ霞ヲ詠ス○一二ノ句此山ノ上ヲミレハ紫々トアサヤカニ煌々トアキラカナルモノ離カトスレハ又連ル雲モアラス霧ニモアラス煙ニモアラス是ハイカナルモノソト也霞トハ見レカヤカヤウニ云テスハ作者ノ意也○三四ノ句一トヲリ夕ナヒイタルヲミレハ紅ノ綺ヲ風ニサラスヤウ也畔ハホトリトヨム付字ナリ杜少陵ノ詩ニ落霞沉綠綺ト作レリ綺ハナリモノ、キヌ也又千丈ハカリ長ク夕ナヒイテ朝日ニ映レ金ヲ流セル如ク一ノキニユル李青蓮詩ニ朝霞動金光○五六ノ句此霞ノ靄タルハ公羊子ノ筆勢ヲアラハス也三場文海云公羊少傳經如暮霞朝雲靄于青空又コノ霞孤鷺ノ鳥ト齊ク飛テ我簾ノ前ニテモ落來ル也滕主閣序云落霞与孤鷺齊飛落霞ハ虫ノ名ナリト云新説アレハ古説ハカスミノユト也○七八ノ句如此ノ霞須史ノ間ニ变化シテ跡モナリナル猶其ア二リノ暉殘テハルカナル川ノ上ニ水ニ映シテアルニテ也高唐賦云須史之間变化無

窮羣類列ノ詩ニ餘霞映遠角

遠浦客帆

雲開遠見客船班 片々飛馳香靄間

散似池蓮轉空水 行如朝鹿度煙山

秦人帆向潮頭落 漢使槎從天際還

名利風波嶮於海 何時透破万重關

遠キ浦ノ旅ノ舟ノ湊ニ入ヲ詠ス○一ニノ句海上ニ立
ヲホフタル雲モヒラケテ月和ナルホトニ窓ノ舟
我モトト香ナル煙霞ノ中ヲハセ來ル也謂ハ煙霞
ノ立コメタルヲ云○三四ノ句此舟ノバラクニ來ヲミ
レハ池ノ蓮花ノ水ニチリ浮タルニ似タリ又ツラナリ
テ來ヲミレハ北ヨリ度ル雁ノツレ飛テ山ノ腰ヲ度

カ如シ韓文公詩花開ナ夫藉如船郡國志云舟航
如鳥雁○五六ノ句秦人ハ秦ノ徐福ヲ云不死ノ藥
ヲ來ト云テ蓬萊山ニ行ケルカ遂ニ歸サルコト史記
ニ見タリ漢使ハ漢ノ張博望ヲ云天竺へ使ニ行ト
槎ニ乘テ天ノ川ニ至リコト漢書ニ見タリ此句ノ
意只今舟ノ帆潮サキニ向テ落來ルハ秦ノ徐福ニ
テモヤアラン又張博望カ槎ニ乘テ天際ヨリ飯ニ
テモヤ有ン○七八ノ句如此ノ舟万里ノ風波ヲレノ
キテ來ルハ名利ノ爲ナリ名利ノ風波ハ大海ノ風
波ヨリ嶮レ何レノ日カ名利万重ノ関ヲサヤフリ
テ安糸ノ道ニ入ヘキソト也

玉池白蓮

滿池菡萏濯漣漪 直立亭亭自不枝

克使周郎說君子 豈將張六汗清姿

雨晴洲客珠浮淚

雲散陽臺月啓眉

彷彿鑑湖三百里

適來何處問西施

生至ノ池ノ白蓮ヲ詠ス〇一二ノ句此池ニサキミナ
 ル蓮花ハ池ノサ、ナミテ流出シタル也菡萏ハ蓮花ナ
 リ漣漪ハサ、ナミナリサテ此花ノ莖ハ直ニシテ枝モ
 ナク天性スナラナル花ニテ亭々トヌキヨク五ル也愛
 蓮説云濯清漣而不染中通外直不蕃不枝亭々如
 植云云〇三四ノ句周郎ハ周茂叔ヲ云蓮ハ花ノ君子ナ
 ルコトヲ愛蓮説ニ説リ張六カコトハ唐書ニ見タリ
 双ナキ羨男ニテ則未皇后ニ寵セラレモノ也楊奐
 思張六ヲホメテ人言六郎似蓮花非也正謂蓮花似
 笑郎ト云レシ羨男也此句ノ意蓮ハ花ノ君子ナルニ何
 トテ張六ニタトヘテ蓮ノ清キ姿ヲ汚サンヤ〇五六ノ
 句洲客ノコトハ博物志ニ見タリ海中ノ鮫魚ガ人ニ
 化テ絹ヲ賣テ歸サニ泣テ涙ニ珠ヲ出レテ主人

ニ与レ交選ニ洲客慷慨而泣珠ト書リ陽臺ノ月ノコ
 トハ神女賦ニ見タリ神女賦ニ云神女兮進也皎若
 明月兮舒其光云云此句ノ心ハ雨ノハレタル後花ニ露ノ
 ヲキタルヲミレハ洲客ノ涙ニ珠ヲ浮タルモ角ヤラ
 ン又白キ花ノ開タルアリサニハ陽臺ノ雲ハテ神
 女月ノ如ナル顔ヲアラハシ眉ヲヒラキタルヤラント
 モ思也〇七八ノ句李太白ノ吳歌ニ鑑湖三百里菡
 萏出荷花五月西施人看盛若耶ト作レリ此池
 ノ蓮花ヲミレハ鑑湖三百里ノ風景ニサモ似タリサレ
 在西湖ハ見ズ何ノ処ニ向テ西施ヲ問シト也彷彿ハ
 レカアラヌカトヨム相似タルヲ云適來ハ即今ト云義ナリ

觀臺素月

碧天雲盡淨無埃

素月迴披金匣來

盈闕却隨人所見

晦明偏任日離閭

山河影入鏡中轉 造化梳於輪上回

仰視清霄纒數尺 恍然高卧玉盤臺

觀音堂ノ舞臺ニテ秋ノ月ヲ見テ詠セリ素月ハ秋ノ月ヲ云〇一二ノ句一天雲ハレテ空ノ色ニドリニナガレテ埃トハケカレノコトナリ此時金ノ匣ノ蓋ヲ開テ秘藏シテルモノヲ取出ス如ク月出タリ〇三四ノ句凡ク月ハ銀丸ノ如ク光ナレ日ノ光ヲ受テ光トス依テ日ノウツル方ハ光アリウツラザル方ハ光ナレ毎日朔日ゴトニ日月會ス月ハ下ニ日ハ上ニ重ル依テ下界ニ月ノ光見ズ日ハ陽精ニテ早クメクル月ハ陰精ニテ遅クメクルニ日三日ニ至テヤウク日ト月ト離開レテ月ノ光釣ノ如クニ見ル是ハ人下界ニ在テ月ヲ櫂ニツバタテ見ル故ニ釣ノ如ク日ノ真向ナル方ハ二百三日ニモ滿月ニ見ルサテ漸々三日ト月ト遠クナルニ從テ人下界ニ在テ月ヲロクニ見ル故ニ次ウク

ニ滿月ヲ見テ十五日ニ至テ日月東西ニ相望ミ人其ニ中ニ在テ月ノ真向ヲ見ルホト二十分ノ滿月ヲ見ナリ如此レテ十六日ヨリ又次ウクニ横ニ見ルニ隨テ半月ホソク成テ晦日ニ至テ月ノ光見スサテ朔日以後ハ半月ノ反ノ方西ニアリ十六日以後ハ東ニアリ日ニ向テ光ヲ受ル故也月ニ盈闕ハナシ日ノ光ノウツリヤウト人ノ見ヤウニ隨テ盈闕アリ是ニ沉存中ノ論スル処雲谷老人是ヲ正論トセラレ此句ノ心月ハ人ノ見ヤウニ隨テ横ニミルトキハ闕真向ニ見ルトキハ盈又晦日ニハクラマリ十五日ニハ明ナル偏ニ日ノ離闕ニ任スルナリ〇五六ノ句中ニ黑影ノ見ルハ山河ノ影ナリ山河ハ世界ノコト也山ト河トノコトニハアラズ其空明ナル處ハ海水ノ影ナリ是漢儒ノ論スル處也雲谷老人是ヲ正論トセラレ千歳ノ惑ヲ明ニスト云リ其外樹ノ樹玉兎ノ説ハ皆異端妄妄ノ説ナリ此句ノ意世界ノ影月中ニウツリテ月ノ東ニアルトキハ影至東ニアラハレ西ニアル時ハ西ニアラハレ月ニ從テ轉ス鏡

中八月中ナリ月ヲ玉鏡ト云又陰陽造化ノ枕モ月ヲ
 輪ノ上ニ於テメクル月ユケル日來リ晝來レハ夜ハ去
 ル畢竟日月ノ去來ヲ以テ陰陽ノ造化ヲ知也○七
 ハノ句此臺ヨリ仰テ露ヲミレハ鏡ニ數尺ヲヘタテ手モ
 トクヤウニ見ル月ノサヘタル夜ハ天近クモユル也仍テ
 心モウカリトナリテ思フコトモ慮フコトモトクウチフセ
 リテ月ヲ詠ルマテ也恍然ハ心ノウカリトナル貞杜少
 陵ノ詩ニ江月去人只數尺ト作レリ玉盤臺ハ月ヲ詠
 ル臺ヲ云ナリ月ヲ玉盤ト云李青蓮ノ詩ニ少時不知
 月呼爲玉盤

南海屯雲

鵬搏南溟翅未斂 洋洋澆澆又菜英
 粘天銀浪不風漲 撐日奇峯疊雪輕

元は無心自出岫

何胡有意造陰晴

只因過入陽臺夢

狂被人呼巫女名

南海ノ上ニ屯リタル白雲ヲ詠ス○一二ノ句木鵬北
 冥ヨリ南溟ニ搏テトブ其翮イニタラサニラズ羽ヲ
 ヒロゲテ并ル也雲ト云スレテ鵬ノ翮ヲヒロゲタ
 ルト云ナス也南溟ハ南海ナリ洋洋々ハヒロコリタル
 白浪々ハタハタル白菜々ハ輕白ノ白詩經ニ菜々白
 雲トアリ太鵬ノコトハ莊子ニ見○三四ノ句此雲ヲミ
 レハ白浪ノ如ニレテ天ト一ツニナツテ漲ルナリ銀浪
 ハ白浪ノ一也常ノ浪ハ風ニヨリテラコル此浪ハ風モ
 フカ又ニミナキル又靜シキ峯ノ如ナルガ日ヲサハ
 テソヒヘタルハ雪ヲタシタル如クニツクニ見ル常
 雪ニカハリテ輕ク見ル也楊都賦云浪勢粘天陶淵
 明詩夏雲多奇峯○五六ノ句此雲ハ元來無心ナリ只
 天地ノ氣ニ任テ自ラ岫ヲ出來ル或ハ晴或ハクモルモ

更ニ意ナシ取去來賦云雲無心出岫○七八ノ句陽臺ノ夢ノコトハ昔梵王陽臺ニ遊テ急テ晝イ子ラレケル夢ニ一人ノ女來テ我ハ巫山ノ神女ナリ朝ニハ雲トナリ暮ニハ雨トナル巫山ノ雲ノ精ナリ玉ヲナクサメシタメニ來ルト云楚王夢中ニ此女ト契ラレシト云コトヲ高唐賦ニ書リ此詩ノ心雲ハ元來無心ノモノナルニ神女ト成テ陽臺ノ夢ニ入テ契リシト云コトヲ筆ニ記シテ雲ニナキ名ヲ負セテ任テ世間ノ人ニ巫山ノ神女ノ名ヲヨハル也雲ハ山川ノ秀氣也禮記ニ毛名山大川ノヨク雲ヲ出スヲ祭ル法アリ

四天梵宮

為言樂土正當東 龜水猶濺千歲峒
深樹校雲垂翠蓋 閑花點地雨天紅

金缸長提三更月

寶鐸高聲十里風

人去人來誰是主

蒲牢殷殷暮煙中

四天玉寺ヲ詠ス○一二ノ句此寺ハ極条土ノ東門中心ニアタルト云也榜曰釋迦如來轉法輪處當極条土東門中心龜水ノ流レハ今ニタヘスレテ岫ノ中ヨリワ、キ出ル也此寺ノ法ノタヘヌヲ云○三四ノ句植コメタル樹ノ梢ニ一片ノ雲カ、リタルハ翠蓋ヲサ、ケ花ノ開ニナリヲツルハ天ヨリ降り降ルカト思ナリ唐ノ太曆年中ニ僧儼雲花寺ニテ經ヲ講シケルニ天ヨリ花フリ降レリ○五六、句金多錢タル燈籠八月ヲカ、ゲテ常住ノ燈トセリ恒燒夢中ノ聞テテラス寶鐸ハ高ク風ニ鳴テ十里ノ外ニテ聞ユ生死長夜ノ眠ヲサマシ北魏ノ時水寧寺ヲ建テ九重ノ塔高九丈ニ作レリ寶鐸ノ聲十里ニ聞ト書リ○七八ノ句昔ヨリ今ニ此寺

ニ参^リ詣^リスル人此寺ニ住スル僧一人モ世ニトマ
ラス共ニ無常變化ノ世ナリ何レヲ賓トシ何レ
主トセン昔ニ晉ヲヌモノハ殿々タル鐘ノ聲暮烟
ノ中ニヒ、クニテ也世ノ無常ナルヲ云テ一篇ヲ
結セリ蒲宇ハ鐘ノ一也

住吉神社

住吉靈場神又神

不顯不兼德之絶

千株松樹擁崖秀

万頃煙波浮日巡

韓戎曾漂血流杵

我邦鎮敬角崩嶺

夜來圓月闢金鏡

彷彿于天岩戸春

住吉ノ社ハ四座ヲタラセ玉フ〇一ニノ句此住吉
ノ神ハ神ノ中又神殊ニスクレ玉フ其名アキラ

カニ人皆ツカフマツル是神徳ノ絶ナル故也詩清廟
篇曰不顯不兼無射於人斯〇三四ノ句此嶺ニ生々
ル松ハ崖ヲカコンテ高ク秀クタリ陶泉洞詩冬嶺
秀孤松又滄海万里ノ波ハ日ノ光ヲ浮メテ此嶺
ヲメクリテ穂ナリ〇五六ノ句昔神功皇后三
韓ヲ攻玉レ時此住吉第三座ノ神軍ノ先ヲカケ
玉ハ三韓ノ夷賊打負テ血流レテ楯ヲタ、ヨハ
ス武成曰前徒倒戈攻于後以北血流漂杵我目
本ノ人皆首ヲ地ニツケ礼拜シ長クサ、ケモノヲ
奉テ此神徳ヲ仰ク角崩ハ嶺ヲ地ニ付ルコト
也秦誓曰若崩厥角替首嶺ハウキクサナリ神
サ、ケモノヲ云左傳曰蘋蘩蘊藻之菜可薦於
鬼神〇七八ノ句ヤウノ日モクレ夜ニ入、ニ東西ク
ラクナル處ニ金鏡ヲヒラク月出テ社頭モテリ
カ、ヤク昔天照太神天ノ岩戸ニコモラ玉レニ神
条ニメテ岩戸ヲ推ヒラキ玉ハトコヤミノ雲ハ
レシ神代ノ昔モカクヤト思ミテ也洋々如

其上如在其右ノ意ヲ云也第十一月八天照太神
三ノ渡ラセ玉也

難波十二景古來未聞有其聲也予客此
地亦年吟風弄月蓋不為不多矣於是舉
其尤者十二且綴早韻以贅其後晦翁尋
芳於泗濱之春程夫子學少年於前川之
花柳游觀君子之所不弄耶今也非肯擬
之只攄味嘆之不可已矣於戲蛙鳴蟬噪
漫聒人耳爾延寶丙辰春二月甲子日散
人山本洞雲記

難波十觀

解題

一 『難波十観』は、延寶八年庚申(我が二三四〇西曆一六八〇)の開板。跋文の字句によりて山本洞雲の著と斷ずることが出來ます。序文の末節に『——まかはあれど五ツの花をいつゝの友とせしためし』云々の語あるにより、この『難波十観』の著は、明曆(我が二三一五西曆一六五五——二三一七)のむかし、堂島にあつた小川宗五の五花堂のことが、執筆の動機となつたものかとも推測されます。

一 堂島に五花堂のあつたことは、寛政の『攝津名所圖會』に『——近歲キンセイ五花堂といふ風流者あり原は洛キトに住ミヤコみしが、浪花に移りて、庭に梅、櫻、牡丹、蓮、菊を植ゑて五花堂と號す、羅山文集に見えたり——』と書かれてゐます。『羅山文集』卷十七『五花堂記』に依りますと、五花堂の主人小川宗五は京都の人で、羅山とは永い間の昵懇であつたが、承應(我が二三一二西曆一六五二——四)の末に浪速に徙り住み、庭に梅、櫻、牡丹、蓮、菊、以上五種の花を植ゑ、年中、花を見ぬ日はないとて、五花堂と名づけたとあります。さてその五花堂は、どの邊にあつたでせうか、かの近松が『心中天網島』の妙文を生んだ蜷川、その蜷橋附近、今の大阪市北區堂島裏壹丁目に存在してゐたことは疑ふ餘地がありません。

一 五花堂の庭に榮へた五種の名花、それにもました樹木の眺めを、浪速のうちにもとめたら、どこであらうか。かういふ考へから、高津の梅、稻荷の柳、東御堂の海棠、天王寺の櫻、寶縁寺の牡丹、洞巖寺の藤、生玉の蓮、明静院の菊、妙壽寺の楓、天満宮の松、以上の十観を選んだ著者は、心ひそかに五花堂の眺めにも勝るとの意味から、一つ一つに、七絶一首とその詩の解釋とを添へ、やがて公にしたのが、この『難波十観』ではないでせうか。

一 この『難波十観』は、稀観本として珍重すべきもの。本叢書刊行會にては、南木芳太郎氏の祕藏本を借受け、特にこの珍本の面影を傳へんがため、全文を凸版とし、その大きさを原本の十分の八に縮め、その製版にも充分の注意を拂つたつもりです。猶、この書の著者たる山本洞雲については、別に小傳を草し、本冊の末尾に添へることに致しました。

難波十観

しうしうとくもくめとるなれとるる入もくもくはれく
 関へまじあなれしをうあなてまうき物の若
 けう有るる人の世とわらしてはあなをよまう
 めひうむくさふくひの道はらあなまらりかて
 そ耳よぬれ目よちほものちよはりたようの
 よかりりて春秋のあなをいしうもくもくはれ
 こまて物まかりあ人のあなをいしうもくもくはれ
 柳のやまの風よみまらあなをいしうもくもくはれ
 まくあなをいしうもくもくはれあなをいしうもくもくはれ
 ものしうらりたあなをいしうもくもくはれあなをいしうもくもくはれ

布

は松のつるを乃ぎまきまらりけいせとめひ
 糸乃をたれをたえて世にたしむまはるハ
 植の花乃香ととめてかかれをたのをへハ
 めらりけいハ物と我と部とまことなりとまは
 れるハとありあるよありして春ハ春のあそひ
 びひて志原へれまき亦よゆらひ秋ハ秋ハ泳あよ
 ひう純くたよりれまき方またとら水またたた
 よ身入る本草乃君とかと人十八のあそひ
 うこれゆくあるとけいハ難波十観と名つけ
 けふあつちかひるまはあそひてうやうやとめ
 けふあそひとけいハ難波十観と名つけ

常の香のつるにけいけいけいけいけいけい
 めよかほら花乃のつるにけいけいけいけい
 けいけいけいけいけいけいけいけいけい
 ひつまの海草 ぶさくはなるたあそひけいけい
 よろける香のつるにけいけいけいけいけい
 けいけいけいけいけいけいけいけいけい
 にかろららけい海草のつるにけいけいけい
 けいけいけいけいけいけいけいけいけい
 うしけいけいけいけいけいけいけいけい
 草とけいけい花のつるにけいけいけいけい
 けいけいけいけいけいけいけいけいけい

序

かゝる人々のまゝに
 あつたまゝに
 てはらうと
 子もあつた
 いつとあつた
 いかんか
 まゝに
 と
 か
 け

難波十観

高津宮臘梅

香肌玉骨本皇家

臘裡関春領歳華

十古難波詠成後

江南摠属二枝花

此詩ハ高津宮ノ臘月ノ梅ヲ詠全篇難波皇子ノ
 御事ヲ以テ作レリ。一ニノ句此花香キ肌玉ノ骨
 本来皇家ノ種ナリ人間ノ種ニアラス臘月ニ花ヲ
 開春ヲ関レ留テ年光ヲ領知セリ是ハ難波皇子
 イマタ即位シ玉サル時天下ヲシロシメス征ヲ備玉ヲ
 云〇三四ノ句昔玉仁ノ難波津ニサケヤ此花冬ユモリ

今ハ春ヘトサクヤ此花ト詠セシ後ハ江南ノ風景ハ
惣テ下枝ノ梅花ニ属ス更ニ上コソ花ナレトナリ難
波ハ江ヲヘタテ、帝都ノ南ニアル故ニ江南ト云
ナリ昔シ陸凱ノ江南ヨリ范曄ニ梅花ヲ贈シ詩ニ
江南無所有聊贈一枝春

稻荷社楊柳

垂柳受風飄晚霽

湧兮如旧旋如齊

年々繰出黄金縷

漏洩春光無劣緜

此詩ハ博労町ノ稻荷社頭ノ柳ヲ詠○上二ノ句垂
タル柳風ヲ受テ晚景ノ霽タル空ニヒルカヘル枝ノ

灑アガルトキハ水サキノアカル如ク旋ルトキハ
水ノウツミク如シ莊子曰興齊俱入與汨借出○
三四ノ句此柳ハ年々ニ黄金ノ色ノ如クナル縷
ヲイトクリ出セトモ春光ヲムスビトムルニカ
ナクシテ春ヲモラシ出スナリ柳ヨリ春色ノ始
ルコトヲ云ナリ黄金縷トハホメタル柳ナリ柳
ヲカメノ出ル色ヲ云ナリ唐ノ李商隱ノ新柳ヲ
詠スル詩ニ已帯黄金縷仍殘白玉枝杜子羨ノ
詩ニ漏洩春光有柳條

東御堂海棠

一樹晨粧露未乾 堂前旭日已三竿

丹柿絳萼嬌無力 認作葦清睡起看

此詩八東御堂ノ海棠花ヲ詠全篇楊貴妃ノ事ヲ以テ作レリ震且國ニ云ル海棠ハ我朝ニ云ル櫻コトニ隣ユ又山櫻晚櫻ノ名モアリ我朝ニテハ櫻ノ外ニ別ニ一種ノ海棠アリ今ノ東御堂ノ庭ニアル花是ナリ○一上ノ句此一樹ノ花ノ晨ノ粧ハ露イマタカハカスヌレノトシタリ堂前ノ旭日ハ三竿ハカリノホリテ已ニ日夕ケタルナリ人ノ朝寢レシタルヤウニ云ナセル也○三四ノ句此花丹柿絳

萼ウツクヒクテカナキ有サハ其二、楊貴妃ノ葦清宮ノ睡起ノ姿ヲ見ルコトスルトナリ拊ハ花ノ坐ナリ萼ハハナクナリ長恨歌ニ侍兒扶起嬌無力楊妃外傳曰明皇嘗召太真妃々被酒新起帝曰此乃海棠花睡未足也

天主寺垂櫻

絲、綴玉萬條同 鮮萼粧成古梵宮

終日檻前何所見 一隻白鳳舞春風

此詩八天主寺ノ塔ノ前ナル糸櫻ヲ詠○一二ノ句此櫻ハ絲コトニ玉ヲツ、リツラ子ニ如ク花咲テ

万々ノ條長クモナク短クモナク同シクソロウガ
此アサヤカナル萼ヲ以テ古キ梵宮ヲヨソソヒテ
セリノ三四ノ句終日檻ノ前ニ何ゾカ見タルソト
云ニ白キ鳳凰ノ一双春風ニ舞タルヲ見タナリ
花ノ風ニヒルカヘルヲ白鳳ノ舞ニ云ナセリ此サ
クフハ東西ニ二本ナラヒタル故ニ一双ト云リ

寶縁寺牡丹

專名獨號百花王 國色天顏自主張
萬紫千紅感臣妾 春來願賜御爐香

此詩八天満東寺町寶縁寺ノ牡丹ヲ詠○一二ノ句

牡丹ハヒトリ其名ヲホシイマニシテ百花ノ王
ト號ス誠ニ國中無双ノ花ノ色天顏ヲ生レウケテ
自然ノマニ春ヲ主張ス唐ノ李正封ノ牡丹ノ詩ニ
國色朝酣酒埠雅曰牡丹爲花王芍藥爲花相○三
四ノ句牡丹ハ花ノ王ナレハ万紫千紅モロクアラ
ユル花ハ皆花王ノ臣妾ナリ春ニナレハ花王ノ御爐
ノ香ヲ願タマハリテモロクノ花ヲカウハヒカラシ
ムルナリ

洞巖寺紫藤

下攘砂磧上晴天 密葉稠花轉纏綿

剛被高風吹爛熳 紫山搖動落暉前

此詩八寺町洞岩寺ノ藤花ヲ詠○一二ノ句此藤下
ナル枝ハ庭ノ砂ヲハラヒ上ナル枝ハ晴天ヲハラ
フ密キ葉稠キ花思ノマニトヒツラチレリ○
三四ノ句剛テ空フク風ニ此花ノサキミタレタル
ヲ吹レタル有サニ紫色ナル山ノ落日ノ前ニウコ
キ出ルヤウナリ此藤ハ諸木ニミトヒカノリテ其
形山ニ似タリ故ニ紫山ト作レリ杜子美ノ詩ニ
雲隨白水落風振紫山悲コノ紫山ハ江陵ト云
ニアル山ノ名ナリ山ノ名ヲ取用テ藤花ノコトニ作

レリ是翻案ノ格ナリ

生玉池白蓮

蓮塘在杖獨遊逸

香露輕浮疑玉膏

破曉煙波綠池上

爲誰洗出水雲袍

此詩ハ生玉ノ宮ノ前ナル池ノ白蓮ヲ詠ス○二ニノ
句蓮花ノヒラケレ池塘ニ杖ヲサヘテ只ヒトリ
遊テ花ヲミル香キ露カロク花ニウカンテ玉ノ
アブラヲコラセリ○三四ノ句早朝ニ煙コメタ
ル波緑ナル池水ノ上ニ此花ノヒラケタルハ誰人ニ著
セシタメニ此イサキヨクウルハシキ袍ヲアラヒ出セル